

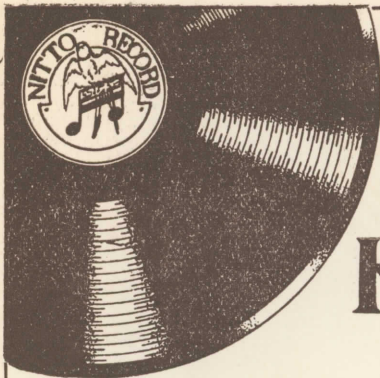
# 道類掘

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和三年六月一日發行  
昭和三年五月廿八日印刷



芥子園畫傳

芥子園



# ニッポン トップ メロディ コレクション

## 好評噴々の新譜

お師匠様がなくても獨りて立派にお稽古の出来る

稽古用長唄

蓬萊鳥

杵屋佐吉

哥澤

潮來出島  
ほこぎす(今一聲)

哥澤芝金

獨唱

泊り舟(北原白秋詩 小松耕輔曲)  
河原やなぎ(野口雨情詩 藤井清水曲)

照井榮三  
ピアノ伴奏  
金澤孝次郎

漫劇

飛行行進曲

東京漫劇協會

流行歌

日比繁次郎作歌 鹽尻精八作曲  
道頓堀行進曲

筑波久仁子  
ハーモニカ  
片岡正太郎

此の他多數、嶄新な内容を有つものが御座います。  
レコード目錄、機械の型録は蓄音器店で差上げます。

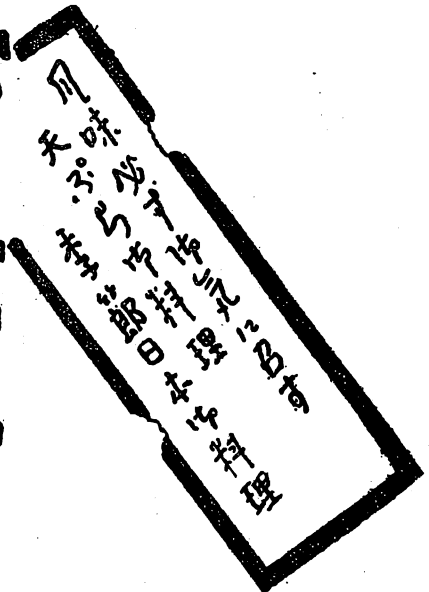
日東蓄音器株式会社

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



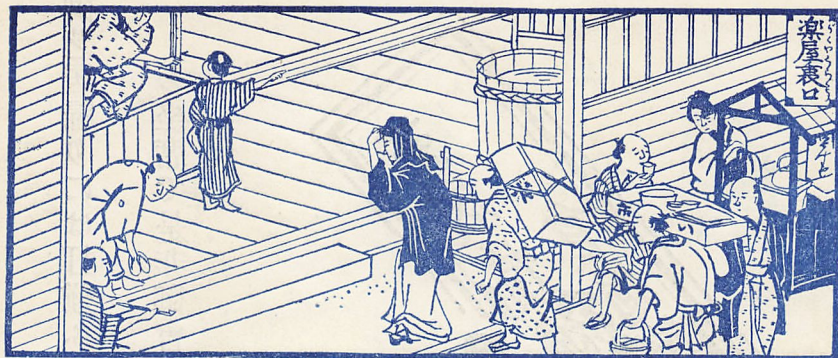
# 喜又屋食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドンブリ橋



漱屋裏口

道 頓 堀 (水無月號) 第三年・第二十一輯

◇表 紙……………(伊勢音頭戀寢及)……………山口草平畫

眞寫繪口

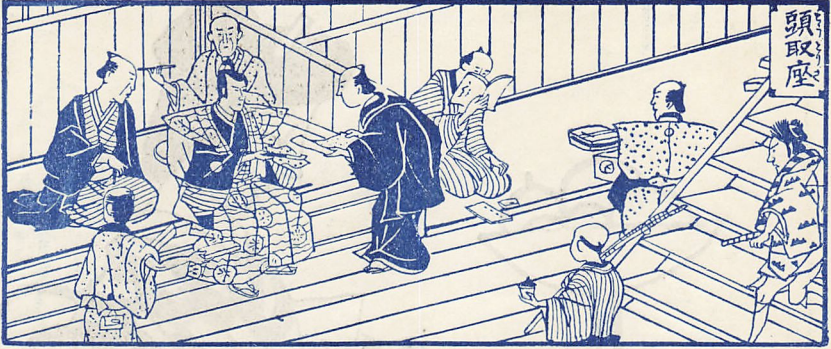
○「近江源氏先陣館」鷹治郎の盛綱○征韓論の錦繪○「西郷と大久保」内閣々議室の舞臺面  
 延若の西郷、壽三郎の桐野、福助の大久保利通○「近江源氏先陣館の舞臺面」○「伊勢音  
 頭戀寢及」古市油屋の場○「修紫田舍源氏」長三郎の光氏、扇雀の黃昏○同古寺の舞臺面、  
 魁車の凌晨○「壺坂」右團治の澤市、我童のお里○「伏見人形」の舞臺面○浪花座「水夫に  
 なるまで」の舞臺面○文樂人形淨瑠璃「假名手本忠臣藏」の舞臺面

◇扉……………(近江源氏先陣館)……………

中

- 回西郷と大久保(戯曲物語)……………素木宗一(一)
- 回近江源氏先陣館(芝居物語)……………山上貞一(八)
- 回修紫田舍源氏(あふむ石)……………(三)
- 回伊勢音頭戀寢及(芝居物語)……………松鼻莊主人(四)
- 西郷と大久保……………山本有三(三)
- 「西郷と大久保」に就いて……………濱村米藏(三)
- 鷹治郎の盛綱……………渥美清太郎(六)
- 平凡人の盛綱……………高安吸江(六)
- 持ち度い叔父さん……………丸山耕(〇)
- 身不肯なれども福岡貢……………石割松太郎(三)
- 伊勢音頭雑話……………高谷伸(四)
- 「伊勢音頭」問答……………高原慶三(三六)
- 鷹治郎の場合……………富田泰彦(四〇)
- 盛綱の型……………美田眞滿雄(四五)

座



□喫煙室……………高橋 蓼雨(四八)  
 □喜劇新人座奮戦録……………内山惣十郎(五〇)  
 □辨天座人形浄瑠璃……………編輯部(五一)

◇五月の芝居◇  
 □性的に見たる「春色梅曆」……………伊藤 晴雨(五六)  
 □南座の吉右衛門を觀て……………豊島扇三郎(五九)  
 □浪人の群……………京極 利行(六〇)

□俳句……………(煤 蓑 選) (五二)  
 □芝居短歌……………(山上貞一選) (五三)  
 □劇評……………(編輯部選) (五四)  
 □讀者文藝募集……………(四四)  
 □劇評募集……………(四四)  
 □伊勢音頭思ひ出いろ／＼……………久保田泰次郎(六〇)  
 □劇話會第二回開催……………(六二)  
 □伊勢音頭戀寝及(あふむ石)……………(三九)  
 □樂書帖募集……………(三七)  
 □寄贈雜誌……………(四三)

角  
 回時鳥雲間月(芝居物語)……………津守凡太郎(六六)  
 回壺坂(あふむ石)……………(六七)  
 回長崎の鶏(芝居物語)……………松本泰三(七二)  
 回冥途の飛脚(芝居見たまき)……………内山惣十郎(七六)  
 回一寸一言……………藤井紫影(八四)  
 ◎延命院秘事漫言……………行友李風(八五)  
 ◎冥途の飛脚のことども……………Y 生(七九)

□延命院秘事(角座上演脚本)……………行友李風(八〇)  
 □編輯後記……………朝 郎 生  
 □挿畫・カット……………大塚 克 三



お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

新鮮な初夏のお献立が

お待ち申してゐます



梅園

お芝居でのお食事は食堂にて……………  
お歸りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを……

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁  
電話 南六二二七番

細紋原梅

三原梅

梅

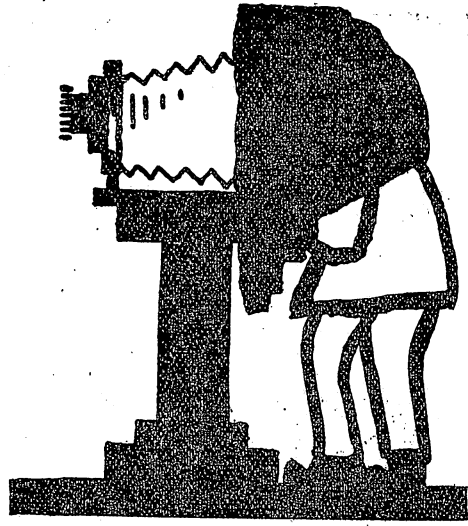
梅原商店

神戸市

梅社西門

番五一六一町元

電話



青葉、若葉の候！！

潑 瀨 の

お 姿 を ！

優秀の技術と迅速が

當館の有つ定評です

只今の一葉は後の深き

印象を歡起する。せひ。

高津郵便局東

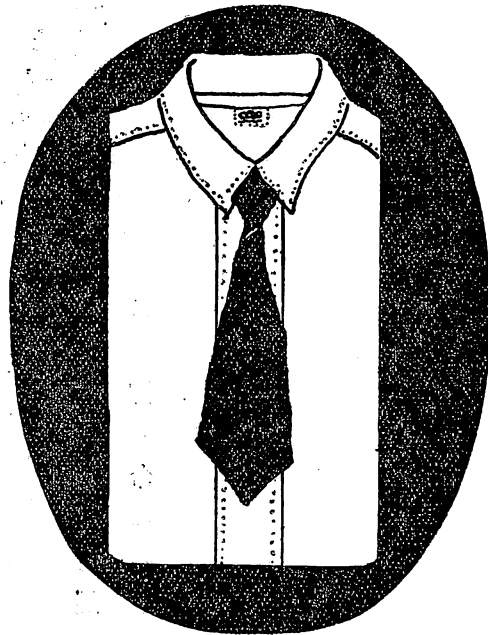
山崎寫真館

電話南四二四四番



すつきりとしたお姿を

一段引立たせる



井上のワイシャツ

# お誂のワイシャツ

お好みの柄・タビと合つた快心

しめやかな品と変らぬ安い値段

御報下さいば直様お伺致す



絹綿布

ワイシャツ

カハラ

大阪天王寺区筆崎七七  
東成区道町四八九

本店  
工場

## 井上勝美

商標 (福)

萬袋物製製造問屋

大坂市東區博歩町電停前

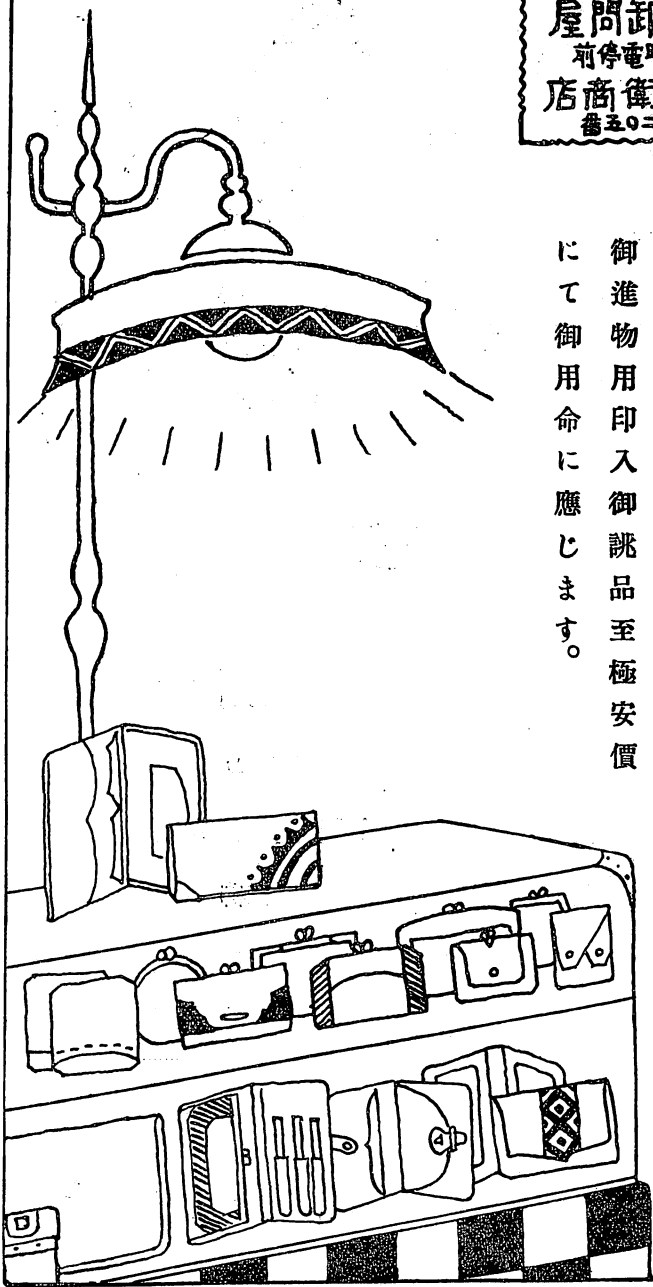
福本又矢衛商店

電話三二〇五番

# 只一回の御取引で

堅實なる取引。品質の優良。絶對安價等の  
主要問題が譯もなく解決されます。

御進物用印入御詠品至極安價  
にて御用命に應じます。





● いつでも御期待下さい ● 近日封切 ●

初夏映畫界の明星篇！松竹キネマの陣容

週刊 連載

池津勇太郎氏作 島津保次郎監督  
"マルセイユ出帆"  
蒲田超特作品 龍田 靜枝主演

主婦の友連載 吉屋信子女史作

空の彼方へ 川田、柳主演

高尾光子の "神への道"

五所平之助監督作品

栗島すみ子主演

夫婦

池田義信監督

栗島すみ子の

京の女 池田義信監督

蒲田超 特作品

富岡先生

國木田獨步氏原作より  
野村芳亭監督  
井上正夫主演

長 二 郎  
"煙血の劍"

東京都 特作品

大江戸の最後

阪東壽之助主演

の門衛太右川市

門衛左郎十野水

〇〇 社會式株マネキ竹松 〇〇

# スキナ 脂取紙

あぶら

芝居、雑誌、

『道頓堀』は

讀者、未曾有の、

歡迎雑誌

何んで.....

## 道頓堀進行曲

スキナあぶら取

もう買にゆこ

化粧品や、又は、賣店へ.....

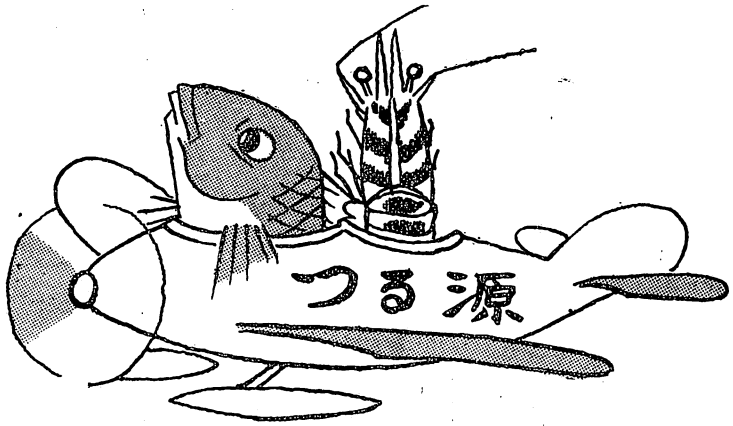
道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり  
お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ



現品縮圖  
スキナのあぶら取紙

“GREASY SWEAT ABSORBER”  
Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

本 舖  
ス キ ナ 屋 號  
中 田 商 店  
大 阪



**鯛の空中輸送!!**

内海の本場で取り立ての鯛が一時間餘りで皆様の味覺に觸れます

**新鮮さと板前の**

**妙手は大阪一番**

と御評判下さいます

**御進物には生き**

**たまゝを**

ピチくご跳ねかへる鰯や鯛を是非御利用下さい

若葉時の御散策や芝居のお歸へりには!

**是非**

.....(法善寺境内 電話南五四二五番)  
(心齋橋北詰 電話船場三〇六番)

つる源へ!!

◇自動回轉式

お座敷天婦羅

の 本家

◇當店獨特の

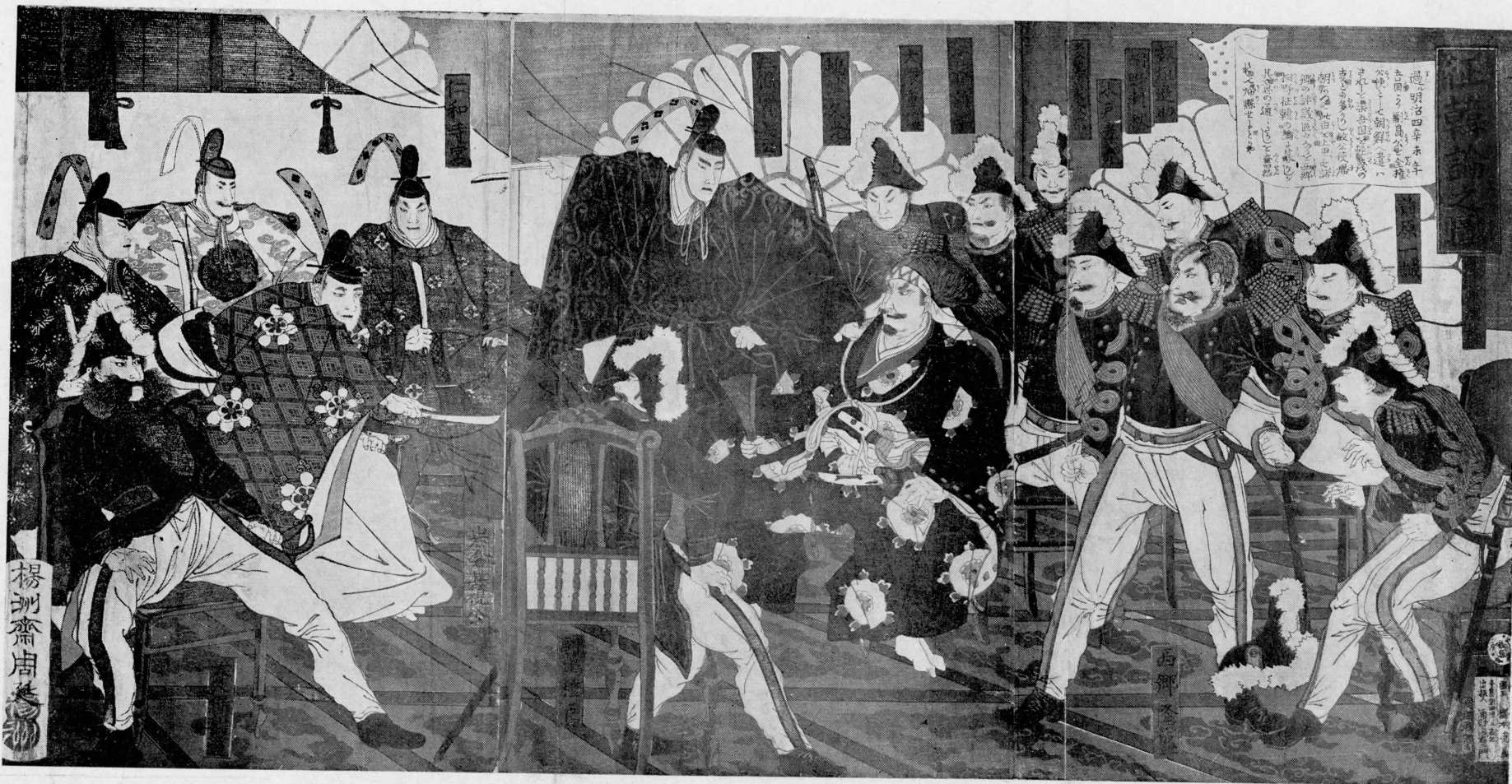
風呂田舎

四季料理

〔館陣先氏源江近〕 幕中行興月六座中

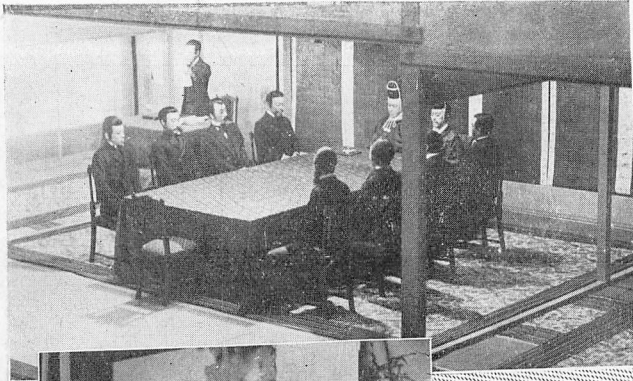
綱盛木々佐の郎治鷹





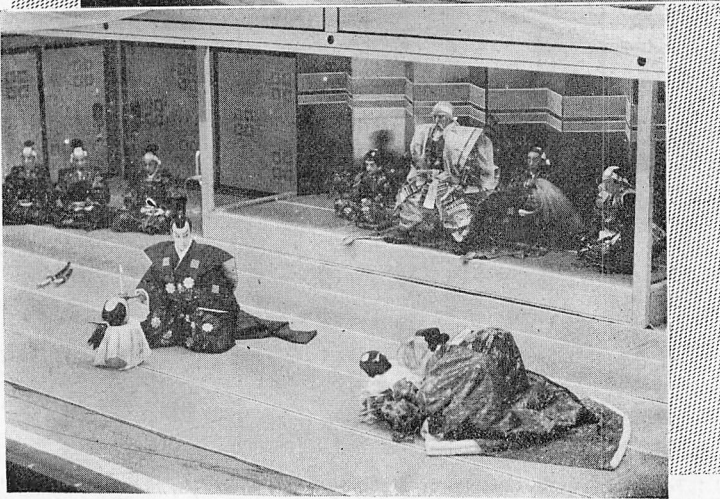
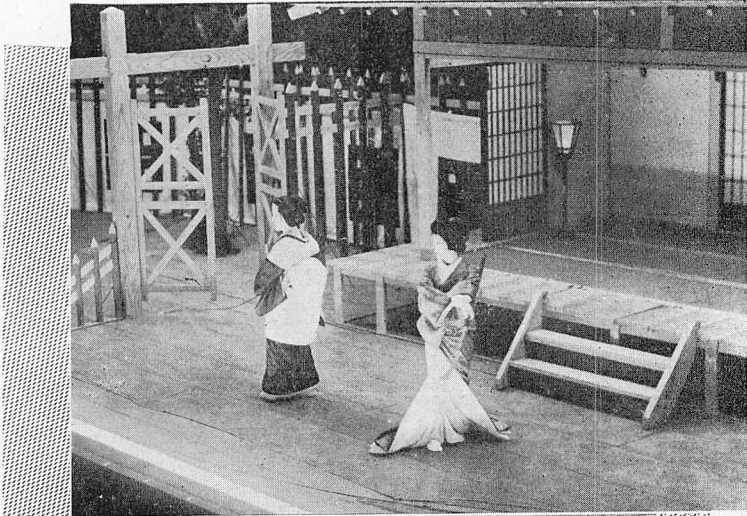
繪 錦 の 論 韓 征





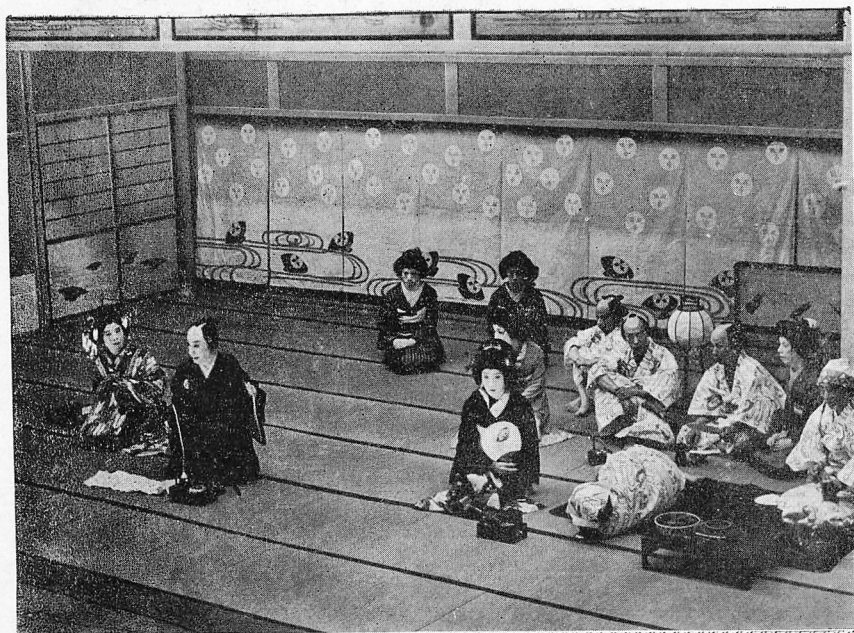
行興月六座中  
 [保久大と郷西] 目番一

面臺舞の室議閣閣内…上  
 野桐の郎三壽右・郷西の若延左…中  
 通利保久大の助福…下



中 座 六 月 興 行

近江源氏先陣館の舞臺面



中 路 六 月 興 行

二 番 目 [伊勢音頭戀寝] 双

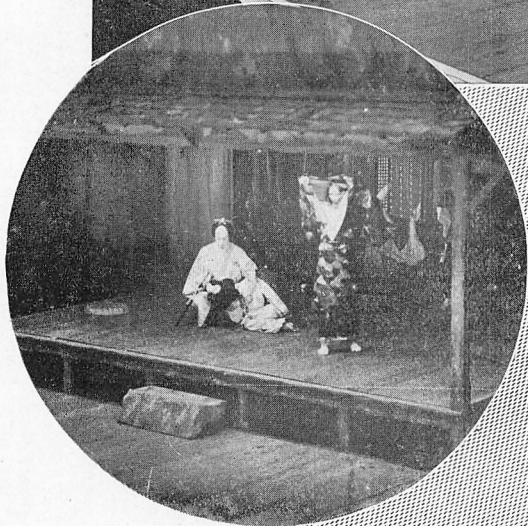
古 市 油 屋 の 場



中座六月興行

淨瑠璃「**修紫田舎源氏**」

上……長三郎の光氏 扇雀の黄昏  
 下……古寺の舞臺面 魁車の凌晨





六 月 興 行 角 座

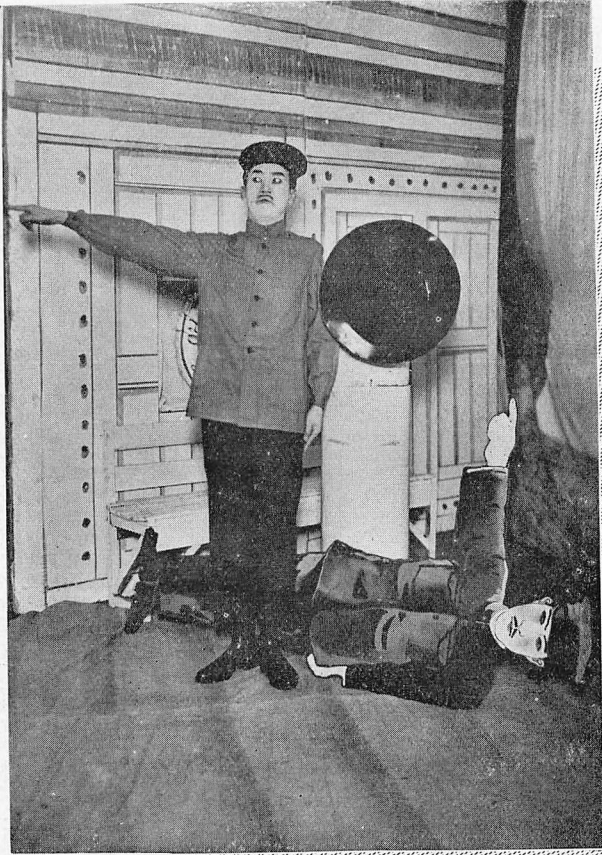
〔坂 壺〕

市 澤 の 治 園 右 … 上  
里 お の 童 我 … 下



角 座 六 月 興 行

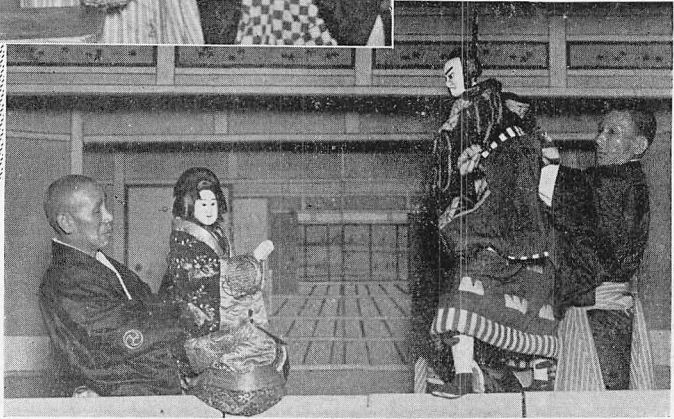
面 臺 舞 の [ 形 人 見 伏 ]



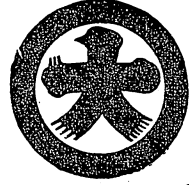
劇海淡家廻賀志の座花浪  
面臺舞の [でまるなに夫火]

六月興行の辨天座（文樂の人形浄瑠璃）

「假名手本忠臣藏」の舞臺面







緑陰を懐かしむ

夏の訪づれ

御家庭用に

御衣裳に

夏の御準備は

只今

月曜

休業

夜間  
営業



# 大丸

大阪

心齋橋

# ユニオンビール

最高級 純獨逸式

宮内省御用達  
日本麥酒釀泉株式會社



第廿一輯

# 雜誌·新劇演·刊月 通 類 編

第三年

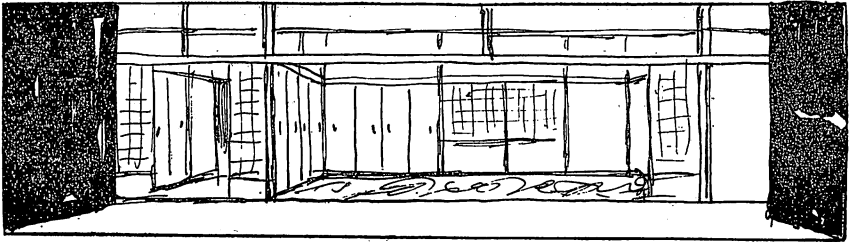


(館陣先氏源江近)

中座六月異行上演 (山本有三氏作)

戯曲 西郷と大久保

素木宗一



「即今重大切迫の事件、山積してをりますのに、木戸さんは御病氣、あなたには參議を御拜命にならぬことあつては、三條、岩倉兩公の御心痛は如何ばかりでせう。」

伊藤博文は口を酸くしてひたすらに説き伏せやうとじてゐる。西郷の征韓派に對立して是に反對論を提唱しやうにも大木、大隈の兩參議ばかりでは、手の下しやうがない。是非大久保利通を立たさうと努力したのである。

「いや、私をそれ程までに御信任下さるごきは身に餘る光榮です。しかし、折角ですが、これはお断りい

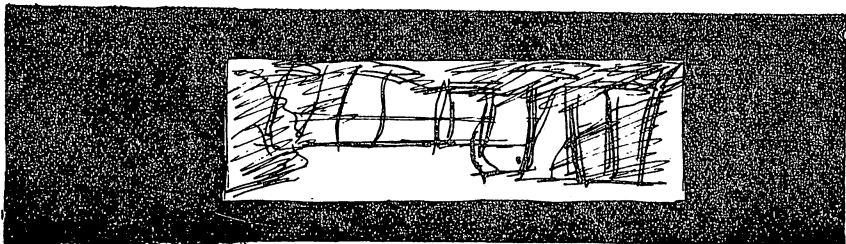
たします。

黒田清隆は双方から圍み打ちするやうに説き落さうとしたが散々熱辯を振はせてをいて、やつと、口をひらけばこれだ。大久保は頑として應じない。

「さうしても、不可ないのですか？」

伊藤博文が一度念を押す。押されるまゝに黙つてうなづいてみせるのだ。所詮、方策は茲に盡きてゐる！二人はしみじみ途方にくれた顔付をする。「弱つたな」ミ、その嘆息も心底から洩れてひびくやうだ。もう、それ以上、語るにも言葉が出ない。三人ながら互ひに置き忘れたやうに、息苦しい無言がつづく。その白ちやけた座敷へ桐野利秋が訪れた。

「この切迫した大事件を、さうして放つてをくごまが出来ますものか。大久保さん、日本が東洋に雄飛するには今を措いて外にありませんぞ。文明の、開化のさいふ連中は、外國のごまをいふごま兎角尻込みして、因循論を唱へたがるが、何も恐る、



「この訪問客も頻りに征韓論を熱心に唱へる。」

「桐野さん、私も西郷の説には不  
同意なんですぞ。汝のいつてるこ  
こはそれは何だ  
政治筋ではない  
か、軍人が政治  
に口を出すさい  
ふ事があるか。」

「苦り切つた大  
久保の顔が殊更  
に至んでみえた  
桐野は憤然ミ座を蹴つて歸つてしま  
ふ。歸るミ又、黒田、伊藤の二人が  
説きす、めるのである。寂しく笑ひ  
ながら三條、岩倉兩公の肚が定まつ  
てさへ居るものなら、お引受けして  
も……この述べがフト洩れたので、  
その夜、遅く、この二人は三條ミ岩

配	
参議陸軍大将西郷隆盛	延若
大藏卿参議大久保利通	福助
右大臣岩倉具實	魁車
陸軍少将桐野利秋	壽三郎
工務卿参議副島種臣	橋三郎
外務卿参議黒田清隆	銀三郎
参議板垣退助	吉三郎
西郷の僕小牧新次郎	九團次
参議江藤新平	政治郎
大久保の書生	

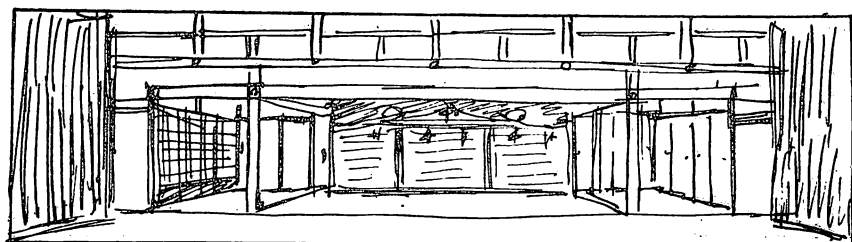
倉公の御連署を手にして再びこの座敷へ現れたのである。  
「ぜひとも参議御拜命願ひたいと存じます。」  
「ごこまでも二人は火を吐くやうに思ひ詰めてる容子である  
が、大久保は諾を見せたもの、何處やらに心にそぐはぬ沈痛  
な色がほのかに漂ふてゐる。」

この話から四五日経つた日——内閣閣議室には火華のミび散

るやうな激烈な争論が湧出したのである。  
征韓論者の諸説を一ミわたり聴きすまし  
てから、のやうに、大久保は靜かに起つて  
次のやうに言つたのである。

「大使派遣の儀について段々の御議論拜  
聴いたしました、その可否を論議する前  
に、諸卿は少しく國內の事情を御考慮にな  
る必要があります。これは考ふ  
ることに依つて、その當否もおのづから定まるもの、小官は愚  
考いたします。」廢藩置縣、等の大變革を行うた直後、未だ人  
心の安定を見ぬうちに外國へ手をつけることが非常に考へもの  
だ、と言ふのである。

「進取積極、自主強硬、これは素よりわれわれの願ふところ  
です。併し、強外交を唱ふるには、その裏面に十分の準備がな  
くてはなりません。併し今外國ミ事を構ふるに當つて、單に財



政の一點のみを取つて考ふるも、その然るべき所以を見出すことが出来ません。今日政府の費用莫大でありまして、歳入常に歳出を償ふ能はざることは諸卿も十分御承知の筈に存じます。殊に内外の債務既に三千二百萬圓、しかもその償却の方法に至つては未だ確たる定算がないのであります。かくる内情にあるにもかゝらず、禍端を開き、兵を出す如きは……」

「大久保さん、おはんは内を顧みよ、内を治めよ、こいはれるが、それなら征韓の一舉こそ内治策の最良のものではありませぬか。」

西郷が口を切る。

「何です、これは異な事を承はる！」

大久保も屹然と見返す。

西郷の説に従へば、食糧を没收された四十萬の士族——その路を失つたものに進むべき道を開いてやらぬ

のだ、と言ふ。その内に鬱積したこれらの人心を外に向けやうはしないのだ、と説く。

「もそつと親身に四十萬士族の方向を考慮するのが當然ではないか。」

「私の頭には三十萬人の國民の方がより深く響いてゐます。四十萬の士族のために、三十萬の國民を犠牲にするこゝは斷じて出来ません。」

議論ばかりに便々時を費して、大局を制することを怠るならば必らず悔ゆる日が来る。今でなくては時機を失する。

「どうあつても私の議がお用にならぬとあらば、私は參議の職を辭退するより外はありません。」

遂に岩倉公の前で此處まで西郷は言ひ放つたのである。

「辭職呼はりをするこゝは、太政大臣を威嚇するも同然ですぞ。」

大久保が言ひ募る。そこで參議一同を退出させて三條と岩倉公との對談になつた。

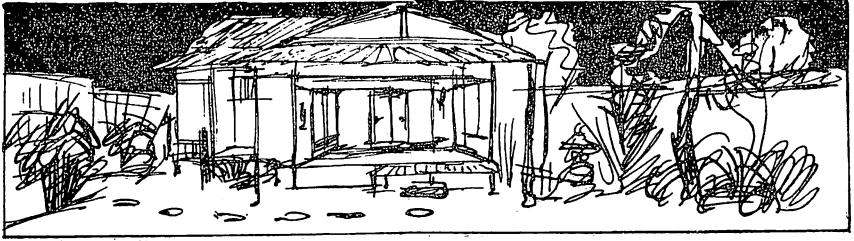
しかし裁斷に苦しまずに居られぬので、大久保を改めて呼んで妥協の方策を講じやうとしたが、彼は斷乎として撥ねつける。

「大久保がああやうでは、もう融和の道も絶えました。」

三條公は痛さうに吐息をする。

「兩方とも、さうしてあのやうに我を張るのでありませう。」

大久保なら西郷と何にか折合ふ術もあらうと思つてをりました



のに……」

岩倉公も首を重さうに沈めた。

結局、西郷を呼んで彼の主張に同意はするが、暫く時機を見計つてくれるやうに、懇談しやうさうさうこみに意見が落ち合った時、すでに西郷は居なかつた。歸つてしまつたのである。

「西郷は御内勅を楯に取つて動きませんし、大久保はまたこの間の書付のこみを以つて迫つて來ますし、鷹は實に進退に窮しました。」

「言ひながら突然、三條公はゲタリミ卓上に俯伏してしまつた。蒼白い面を上げた時は決心があつた。使節を差立より外、いたし方がない。」

「こ言ふのである。そこで再び參議連が招集されて是を聲明するに、大久保が黙つてゐない。」

「左様に御治定になつた上は、最早申上げのことはございませぬ。併し、それでは奉職の目的が相立ちま

せんから、私は只今限り斷然辭職いたします。」

三條公の顔は大久保の退席と同時に死人のやうに青くなつて啞のやうになつた。左右から上奏を急ぎ込まれるに、居耐れず、急にガツクリミ昏倒してしまつた。

岩倉公が眞先に驅け寄つて、

「さうなすつたのです。」

「抱き起した。が、顔は死人のやうで唇ばかりが微かに顫ふ。參議連は忽ち密集して介抱するばかりであつた。」

×

「伊藤君。重大な事件はもう過ぎてしまつたではありませんか。」

虫の音が頻な夜中に伊藤博文の訪れを受けて冷然と大久保は言ふのであつた。

大使派遣御治定は、三條公の爲に上奏手續も行はれてゐないし、御裁可にもなつて居ない。此間を巧に立廻るならば、今日にも未だ施すべき術策が残つて居るやうな氣がする。伊藤は説くのである。一こわたり諺々々説きひらくのを聞いた大久保は急にそれを制した。

「分りました。あなたのいふことはそれだけですか。」

「さうです。併し、これだけはいひますが、これを行ふ段になるに。」

「伊藤君。君のいつたこみはもう既に手をつけてあります



よ。」  
 大久保は岩倉公に大政大臣代理になつて貰ふことを考へて既に手配をして居たのである。折から、その使者に立つた黒田が立歸つて趣を傳へた。

「明日は聖上、病氣お見舞として三條公のお邸に御行幸になりますので、大分その御歸途を以つて、岩倉公のお邸にお立寄りに相成り、大政大臣代理を御勅命になるやうの運びに至りますと、拜察いたされます。」  
 「そうか、それで私もほつちした」  
 それから三人が額を集めて密々何事かを囁き合つた。

「では、岩倉公にその點をくれぐれも。」  
 大久保の聲に心もち晴やいだ色めきが窺はれる。

X

越後屋の寮の釣堀で西郷は編笠を被つて黙々釣針を垂れて居る。

黒田清隆が背後から「先生」ミ呼びかけて多む。

「黙つてゐてくれ、魚が逃げてしまう。」

少時、手持ぶさたに呆然と衝つ立つて居たが、魚の話の漸く繼穂を見つけて語り出した。

「今度の事件に就きましては、先生として、いろいろ御不満もおありでせうが。」

「おはんは己を引留めに來たか。」

「はい、是非とも御在職を願ひませんで……」

「己は伊達に辭表は提出しませんが。」

こへもなく黒田を追ひ歸してしまふ。

落葉が時々肩に散りかゝる中を漫歩しながら、懷紙に詩を書きつけてゐるミ、桐野利秋が現れた。

「ぢや先生は……こんな態になつても、口惜しくはないのですか。」

「ごこまでも遺韓大使説を踏張ろうとする桐野を冷やかに見流して、」

「おい、半どん、まあ、ちよつち立つて見ろ。」

「何です。」

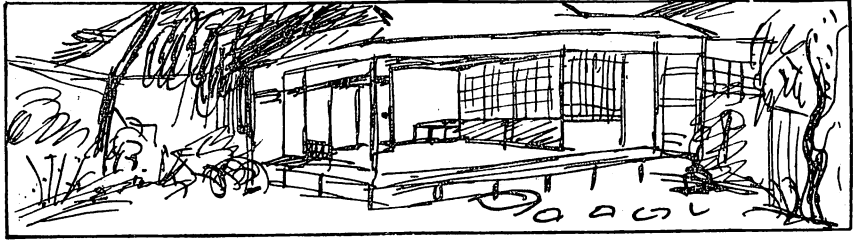
「向ふを見い。」

西郷の指さす所にひろびろとした天空がある。

「何があるんです。」

「よく見るがい。」





「己には何にも見えません。」  
 「その何にも見えん中に何かを見ろ。」

「見えません。」

「眼を据えてじつを見る。」

「何にも見えません。」

「いゝ天氣ぢやないか。汝にはそれが分らないか。」

桐野は好物が横行する限りはいつでも吐鳴るこゝを止めぬ、と言ひつゝ空に向けて腹立ち紛れにピストルを弾つ。

「汝は馬鹿だな。」

「しかし地上の腐敗に憤慨して、太陽にピストルを放つた馬鹿者があつたことを知つたら、お天道さまも。」

「汝もたうたう天を相手にするやうになつたな。」

言はれて見れば、桐野も寂しく笑はないで居られなかつた。西郷は相變らず悠然と漫歩をつゞけてゐる。

×

「私はいつかはかういふ日の来ることを臆けながら豫期してゐました。私と西郷とは兩立し難い人間です。例へば冬と夏とのやうなものです。二人は當然離れるべき運星なのです。」

征韓論を提唱した西郷が死所をそこに見つけやうとして居たのは、夙に大久保が観破してゐるのであつた。

「人生の事、思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。私は西郷と死なうとして死ねなかつた。西郷がいつか私にいつたこゝがあります。人間は死なうとして中々死ねるものでもなく、生きやうとして案外生きられないものだ。それを聞いた時には、それほぎにも思ひませんでした。私は今その言葉をしみじみ思ひ出します。」

書生が出て西郷が國へ歸つたこゝを告げる。

伊藤博文は岩倉公へ復命する爲に座を起つた。

書生を呼んで掛物を掛け變へさせる。

「何でもいゝ。南州のものを掛けてくれ。」

—— 盡人事竣天命 南州書

「これで宜しゆうございますか？」

「ウム」

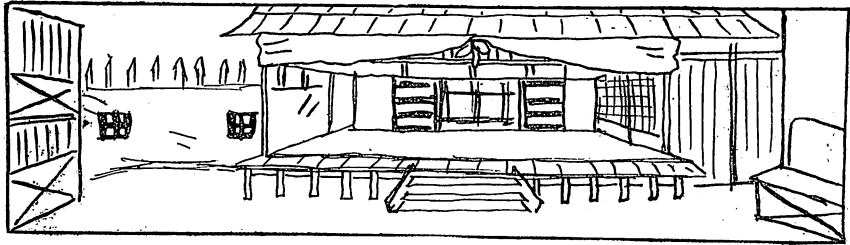
うなづいて床の間に寄つてそれを仰いで見る。

焚く香の煙がしづかに立ちのほつて夕暮の氣配が障子の西日から、登音を偷んで近づいてくる。大久保利通はかうしていつまでも黙つてゐる。

終

# 近江源氏先陣館

山上貞一



四ツ目の紋所ある幔幕は正しく佐々木盛綱の陣所だ。腰元達まで襷をかけて長刀を持つてゐる。

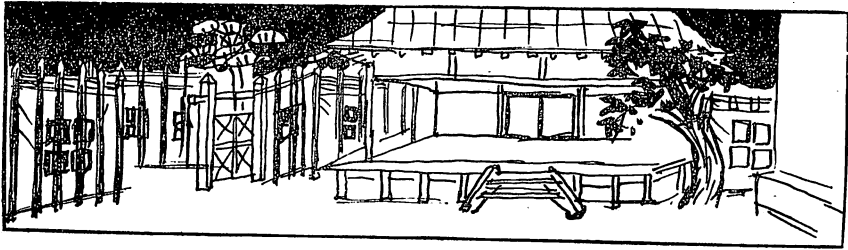
その源は近江路の比叡山嵐隔てられ便り片田の雁越えて武士の義は石山や月の弓張り矢叫びの矢走の歸帆、陣幕もひらめく比良の陣館

腰元達は盛綱の一子小三郎の初陣の手柄を知りたく思つてゐる。盛綱の妻早瀬も天晴手柄のあるやうに神へ祈つてゐる。そこへ物見の軍卒が味方の勝利をつたへ、小三郎が敵方高綱の倅小四郎を牛捕つたこみや盛綱が石山の御陣所へ出仕したから追

付歸陣すると言ふ。早瀬は大喜びである。早速三母親へ知らせやうと立上るに、母の微妙が一間より手柄話を聞くべく出て来た。早瀬は小三郎が軍功も相手と同じ孫の小四郎では嬉しいのミ悲しいのミ片目がわりの心を察すると言ふ。微妙は不所存な倅高綱が音信不通の中に出て来た小四郎の顔を見た事はない。それに敵味方ミ別れた上は涙かけてよいものかきつと言つた。そこへ『旦那の御歸り』と盛綱が小三郎や郎黨を引連れて歸陣した。小四郎は繩にくゝられて出て来た、微妙は孫かミ顔を見初めに胸をおざらせた。

盛綱は小三郎が大敵高綱の倅小四郎を捕虜にしたのは拔群の高名ミ時政公から益ミ感状を賜はつたこみを言つて微妙に悦んでくれといふ。早瀬は出かしたく産んだ母まで肩身が廣いミ悦び一同ほめそやした。微妙もほめたがごこやらが濟まぬ。小三郎は四人小四郎の首討つ事無用といふ上意を告げて、小四郎の無念さを察した。小四郎は父の教へに勝負は軍の習ひ早や





時節を待ててこの事か三戸の隙間から中を見るに、微妙は子高綱に別れて十三年、孫があるを聞いてゐるが、見

るが始めての小四郎をいたはつてゐた。ばゞの引出物だに差出された上、下三九寸五分を見て小四郎は切腹をしなければならぬ自分を子供心に悟つた。生きてゐては父高綱が武勇の妨げになるからして死を勧めた。外では篝火が驚いた。あまりに氣強い

ばゞ様と思つたが、芦垣が隔てゝある小四郎は自分の命一つで父や伯父の手柄になる事なら死ぬが、初陣に敵に牛捕られたことが口惜しい。父母に一目あつて雑兵の首を一つでも斬つてから死にたいを願つた。微妙はその未練を吐つて介錯は此ばゞがして、直ちに自害なし三途の川を手を

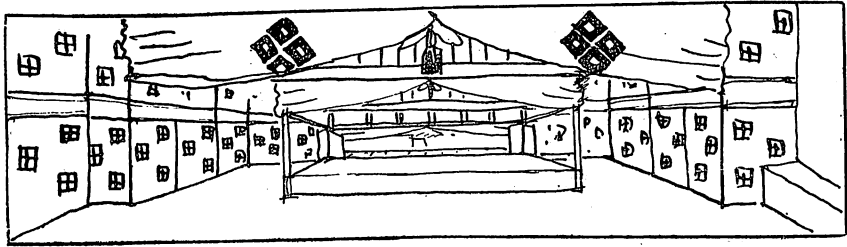
曳て渡らうと抱きしめた。小四郎は尙も両親に逢ひたいと言ふ。篝火は堪らなくなつて木戸の口から呼んだ。小四郎は駈寄りうとするのを微妙は

卓怯者で怒つた。小四郎は母の聲を聞いて一倍命が惜しくなつたのである。微妙は立派な最期をしてほめられてくれと手を合せて孫に頼んだ。

はるかに陣太鼓の音が聞える。微妙は遠寄の物音に小四郎を奥の間へ連れ込んで入つた。早瀬が長刀をかい込んで走り出でやうにして篝火に出逢つた。相嫁の初見参である。そこへ四の宮太郎が注進に來た。味方は勝利、諸葛孔明と呼ばれた四郎左衛門高綱を榛名十郎討取つたり、三聞くより篝火は夫の首を渡さじと行くのを早瀬がさどめる。『時政公のお入り……』二人はきつとままりあつた。

陣屋の奥の間である。北條時政が近習古部新左衛門、佐々木盛清を従がへ召替の鎧櫃を持たせて御座に着く。そこへ竹の下孫八が和田秀盛に酒を強いて酔伏せ居間の四方に金鋼を張つておいたが天井を打抜いて白旗を奪つて立退いたと言上した。時政は高綱を討取つたので腹心の害を拂ふたが高綱は將門に習つて影武者を使つてゐるので眞偽が解らぬ。兄盛綱實檢せよと命じた。盛綱はじつと首桶をあけた。

『やあ、様か、嘸口惜しからう、私も跡から追付まする』三腹へさし添を突き立てたのは小四郎である。盛綱は何故の切腹か聞いた。父を先立て何まごゝ生恥ぢをさらそう。親子一緒に討死して武士の自害の手本を見せると言ふ。微妙は



今更いまさらに孫まごの立派りつぱな心掛こころかけに驚おどろいた。時政ときまさは實檢じつけんを急いそいだ。

「矢疵やぢに面體射損めんたいしやせんじたれき弟佐々木高綱おとうまが首くびに相違さかない。聊あやか相違御座さかなく候まう」

盛綱もりつなの言葉ことばといひ小四郎せうしやうの切腹せきはらで時政ときまさは首くびの證據しやうこを明白めいはくに知しつた。枕まくらを高くして寝ねられるのも盛綱もりつなの働はたらきさ着替かきかへの鎧よろいを當座あてざのぼうびに残のこして萬歳聲裡ばんざいせいりに本陣ほんじんに引上ひきあげてゆく。

盛綱もりつなは改めて篝火かきびに小四郎せうしやうの最後の暇乞ひまごを許ゆるした。微妙びまうは偽いつはりせ首くびを知しつて時政ときまさに渡わたしたのは京方きやうかたへ味方あじかたする氣きかき聞きくミ、變心へんしんはせぬが高綱たかつな夫婦ふうふが計畧けいりやく、父ちちの爲ために命いのちを捨すてる幼少せうしやうの小四郎せうしやうが神妙しんめう健氣けんきさに不忠ふちゆうし知しつて大將たいしやうを欺あざむいたのは弟あにへの志こころざしであつた。身替みかりを仲々ななな喰くはぬ大將たいしやうも小四郎せうしやうがやれ父様ちちさまかき駈寄かきよつたので眼力がんりきをくりますこが出來たのである。小四郎せうしやうの忠義ちゆうぎにくらべては高綱たかつななきは百千腹ももせんはらを切きつても及びおよびもつか

ない。

『そちが命いのちは京鎌倉きやうかまくらの運定うんぢやうめ、母人ははびとほめておやりなされ、女房にようばうほめてやれ、ほめて、ホ、ホ、』  
 篝火かきびは小四郎せうしやうにそなたの命いのちを捨すてたので高綱たかつなの忠義ちゆうぎも立つまいふおほめの言葉ことばを未來みらいの引導いんどうに迷まよはず成佛ぶつたうしてくれと言いひ聞きかせた。小四郎せうしやうは死しの本望ほんぼうに喜びよろこび、伯父おぢい祖母おばあ、母はは逢あひながら現在げんざいの父ちちに逢あへぬこを悲かなしみつ、死しんだ。盛綱もりつなは實檢じつけんを仕損しげんじた申譯まうじやくに切腹せきはらしやうとするのを和田秀盛わだひでもりが呼びかけて止とめた。屏風びやうぶをこれば湖水こすいの唐崎からさきが遠とほく見みえる。盛綱もりつなは秀盛ひでもりを召捕まわらうとした。

『此この和田兵衛秀盛わだへいゑひでもりが習なひ覺おぼえし南蠻流なんばんりゆうの懷中鐵砲ふせこころづつぱううけて見みよ』  
 こねらつて打うつたのは鐵櫃てつこで、中なかでは棟名むねな十郎じやうが苦くるんでゐた北條きたじやうの隱目いんめく附つきも盛綱もりつなの手てにかゝつたのではないから不忠ふちゆうではない。それに佐々木高綱ささきたかつな爰こゝにありと言いつて出でる時に切腹せきはらしても遅おそくはあるまいとさした。盛綱もりつなは自分おのれの誤あやまりを知しつて

『此このま、生なるは弟あにへの情なさけけ、一つには甥おとこへの寸志すんし』  
 ミ秀盛ひでもりは京方きやうかた、盛綱もりつなは鎌倉かまくら方かたミ秀盛ひでもりは白旗しろはたを持つて出て行く盛綱もりつなは陣中じんちゆうに味方あじかたの武士ぶしを討うつたる曲者まが、返かへせ、ミ呼よばはつた『ちなみは兄嫁あによめ小姑せうこめ、孫まごよ甥子おとこの亡骸なごみに『憂事うれし三井みやうの暮くれの鐘かね、消きえゆく子こより親心おやこころ、』わが唐崎からさきの夜よの雨あめ、父ちちにはひミ目め栗津あづきづの嵐あらし』

さらば、ミ別わかれ、に此この世よに生なきてゆくのである。

中座六月興行上演(食滿南北氏新作)

淨瑠璃

修紫田舎源氏

(あふむ石)

(夕顔の巻)

清元連中

役	配
娘	黃昏
足利	光氏
僧	眞念
舞指南	長三郎
凌晨	政治郎
	魁車
	扇雀



光氏 これはおふ備いろく、忝のふムつた。  
 眞念 マア、今宵は御ゆつくりなされませ  
 黃昏 ありがたうムリます。  
 眞念 扱お客人見らるゝ通りの此古寺、秋に  
 なつても藪蚊が多くいぶしがのふてはかた  
 ときぬられず、一寸ひと走りだんかへ行  
 枯木を貰らふてくる間、暫らく留守をたの

みます。  
 光氏 それは御苦勞でまる。  
 眞念 暫らくの間まつてゐて下され。ハテナ  
 兄妹じやと云ふてゐれどたしかに様子はめ  
 をと連れ。  
 二人 エ、。  
 眞念 イエ一走り行つて参ります。ハテ見お  
 とりのない美しくしき。

小首かたむけそよりぶし  
 仇人は狐狸かしら化のあ  
 んな兄妹唐にもあるか、  
 人も、あらうに名僧を、  
 はめていなしてしつぱり  
 と、もしやきやつなら、  
 眉につば、エ、畜生めと  
 枯柴の、いぶしもとめに  
 はしり行く。

黃昏 どうやらたつた一人の御所化様もいて  
 しまはれたさうな、このマアひろい古寺に  
 何ちややらこわいやうでムリます。  
 光氏 ハ、ハ、ハ、こわいといふはあのしの  
 め。  
 黃昏 エツ。  
 光氏 イヤ東雲までは二人りでかうしてのう  
 黃昏。  
 黃昏 ハイ。  
 眞念 なまいだくく、なまいだ。  
 黃昏 誰が唱ふるかあの唱名、氣味の悪い事  
 でムリますな。  
 光氏 さりとはは氣の弱い、何も恐るゝ事は  
 ないぞや。  
 眞念 いたはり給ふ御なさけ。  
 黃昏 そのおやさしいお言葉に引かへて五條  
 の宿りへ引入れて殿様をなきものと恐ろし



い母様のたくみごと。

光氏 ハテもうその事はいふまいぞ。

黄昏 いエ〜お情うけたこのたそがれ。

露のやどりにぬれし身は、ほんに  
女子の冥加とも、思ふ心をうらう  
へに、あの母様のどうよくな、そ  
らおそろしいたくみごと。

姿ばかりか心までいやしきものと  
おみかぎり、受けし此身はなんと  
せん、かなしいわいのと泣しづむ

光氏 ハテ心にとめる事はない、そなたをう  
とむ程ならば、何で今宵五條の宿を手に手  
をとつて出やうぞ。

黄昏 そんなら母さんと一つでない  
と心の奥をお察しあつて。

光氏 オ、何のかわらぶ、コレ黄昏

黄昏 うれしうムんす。

折からあなたに怪しの音

黄昏 アレー(と氣を失ふ)

光氏 コレ黄昏々々(と介抱して)。

アリヤ鼠が位牌を落としたのぢや  
コレ黄昏々々。

とやせんかたへを見かへ

れば、位牌にそなへし茶とりの佛  
器、介抱なして引起こし。

光氏 コレ黄昏、氣をたしかにもて、黄昏々々。

黄昏 オツ殿様。

光氏 氣がついたか。

黄昏 ハイ。

光氏 もう九ツに間もないに、あのおふ借は  
どうしたか遅い事ぢやの。

あんじる折から吹おくる夜風と共に  
鳴動し。

黄昏 アレー。

光氏 コレ(と制する)

三つの車に法の道火宅の門

や出ぬらん。

夕顔のや。のやれ車、やるかたな  
きこそ悲しけれ。

次第上

うき世は牛の小車の〜めぐる  
や報いなるらん。

凌晨

君の寵愛劣ろへし二葉の上の怨靈なり

光氏

ナニ二葉の上とか。

凌晨

これまであらはれ出たるなり。

ウタヒ

あらはづかしや今とても忍び車  
の我姿。

清元

佛のおしへひきかへて。

ウタヒ

もとあらざり〜身となりて、  
葉末の露と消えもせば、それさ  
へことに恨めしや、夢にだにか  
へらぬものを我ちざり、昔かた  
りに成りぬれば、猶も思ひはま  
すかどみ、其面かげもはづかし  
や。

清元

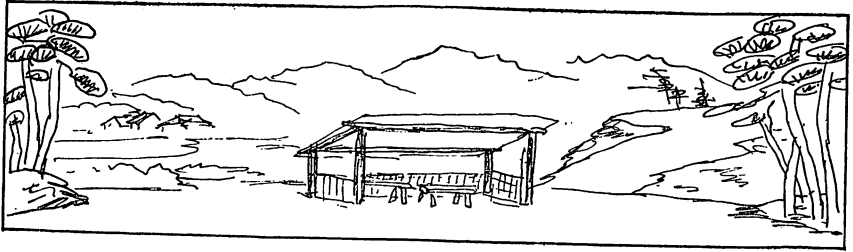
まくらに立てる、やれぐるま。

亂拍子

うちのせかくれ行かふよ。

ウタヒ

うちのせかくれ行かふよ。



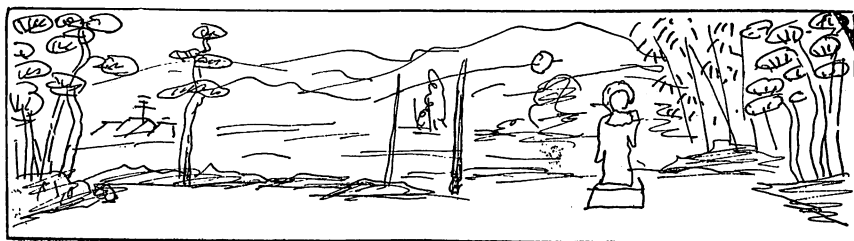
(中座 六月興行上演)

芝居 物語 伊勢音頭戀寝及

松鼻莊主人

寛政八年七月二十五日初日、大阪角の芝居に立作者近松徳三の筆に依つて上演された脚本で、大喝采を博したものである。當時の役割は福岡貢が中山文七、女郎お紺を芳澤いろは、料理人喜助が嵐雛助、萬野を中山文五郎、今田萬次郎を重太郎が演じてゐた。仲々の際物の脚色であつて事實はその年の五月四日の晩、伊勢古市の料理茶屋油屋徳右衛門方で宇治浦田町の醫者孫福齋官が馴染の茶酌女お紺を相手に酒を飲んでゐた所へ、阿波の藍玉商人岩次郎、孫三郎が芝居歸りに立寄つて、矢張り茶酌女のお岸やお鹿を相手に酒を飲み出した。お紺もつひその一座へ呼ばれて行つたので齋官が立腹して、歸るさいひ門口まで出て脇差を受取るや下女の萬を斬り、あれ狂つて即死二人負傷七人、つまり九人斬りを演じたのが實説であつて、齋官は常から酒亂のたちであつたさいふのが早飛脚で大阪へ傳はるゝ徳三が僅か三日で脚色したものだ。『伊勢土産川崎踊拍子』や『伊勢十人斬』や『千穂色音頭新唄』などは同巧異曲のものである。さて——見たま、やも當今は勉強をしたものでこれだけの豫備智識をもつて見たものを、次に書きつらねる事とする。





伊勢國の相の山は流石に神の山に近いだけに一面の杉林である。松の葉造りに有名なお杉お玉の小家がある。お杉お玉は三味線を引きつゝ客の投げた銭を受け止めて音色に少しも亂れをみせない。それが名物だ。参宮の善男善女がいつもこの小家の前で賑ふのも妙でない。比久比がびんさら杉をふつて踊るを、……大阪はなれて……木やりが聞えて来る『島さん、こんさんなかなりサ、あちらの姉さんこちら坊さん姿ばかりぢや、ヤテかんせ〜』

「お杉お玉は盛んに稼いでゐる。女郎のおきし、つたのが仲居の千のや禿のみよしと揃ひの浴衣がけで参宮の装で出て来る。彼女達は伊勢に働いてゐるが一度も道中をした事がないので参宮の趣向もある。一見淺間と遊山してみるに疲れた。此處で客を待合そうし、お杉お玉に銭を投げつゝ、客を待つた。そこへ阿波の國

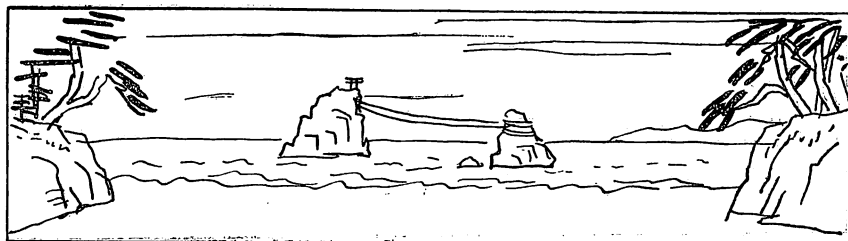
家老今田九郎右衛門の息子の萬次郎が大藏三丈四郎に駕をかがせて出て来る。「エツサツサ」「さや豆こ」「枝豆こ」「オット汗ぢや」と来る後より林平は奴の装で柳樽ささけ重を肩に割つてやつて来た。萬次郎らの風態を見て遊びに事欠き眉を蹙めた。だがそれは参宮人への施行黨の真似で女郎仲居は参宮人のまねをさしたからには悪く洒落れたものだ。現に今先きに乘坐した娘は風俗さいひほつみりしたよいきりやうだ。萬次郎は惜しげに後をふり返つてみた。おきしはかつきなつて萬次郎をつめつた。はては胸倉をこつてのらんちきだ。さあ仲直りの酒だ。ささけ重が開けられそうになつたので驚いたのは、店先きをふさがられたお杉お玉だ。あんまりださいふ聲の下から又四郎が小判をくれてやつた。お玉お杉は今更に萬次郎の色男振りをつゝえた。

『あれなら女があつちから、する／＼べつたり……』

「笑ひつゝ、敷物を出して敷いた。林平は行儀を正して萬次郎に下坂の刀の在否を聞いた。

『さあその刀は買取つたけれ茶屋の入用金に詰つた故、山田の町人肺脈の金兵衛さやらいふ者に質物に入れたが、其者は出奔して行方知れず、それで此様によう去なずに居るのぢやわいのう』

「萬次郎はすつかり困じ果てゝゐた。林平はもし後見役の藤波左膳様が刀のこきをお尋ねなされた時はさうするのかと問ひ



詰めた。萬次郎はそれも氣にか、つてゐるが然し折紙を持つてゐるので今はさうかして刀さへ取戻せばよいのだと思案した。そこへ主鈴がなでつけのつぎの上下に大小をたばさみ御師の装で家來をつれて出て來た。それこそ違つたのはかねて國家老を陥れんとする徳島岩次である。ゆきづりに顔を見合せて、山田の佐野屋善兵衛方に寄宿なさる御浪人かミ主鈴が聲をかけ、自分は御長官の支配下で黒上主鈴に申す者だミ名乗つた。

『貴殿には此度名作の刀をお求めなされるミ有つて手前所持の下坂の刀を判金五十兩に所望致させ呉れよミ、佐野屋善兵衛段々の頼みゆへ只今持參仕る處でござる』ミ路傍の人達にも聞えよがしに言つた。萬次郎は聞きなりあの刀を取り返してくれミ林平に頼んだ。二人がでは宿元で金子ミ引換えやうミ立

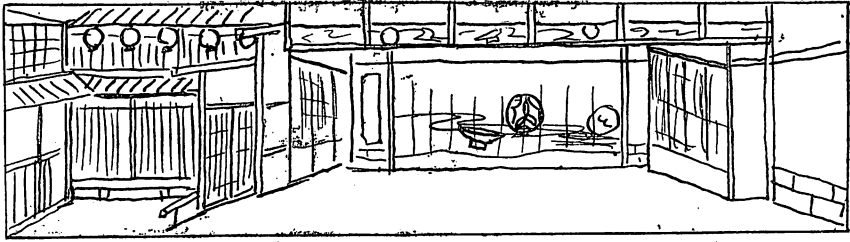
去らうミするのを林平は呼び止めた。その青井下坂の刀はミ自分の主人が遠國から來て買つたが、仔細あつて人手に渡したがそれを他へやつては主人の命にかゝはるから自分に賣つて貰ひたいミ頼んだ。岩次も主鈴も素直にその頼みを聞いた。では御刀拜見ミ萬次郎がすうりミ抜いてみるミ、それは眞赤な傷ものである。主鈴は偽物でない證據があるミ折紙を出した。萬次郎が折紙が二枚ある筈がないミ懐中より出して見せた。林平は主鈴に下坂をいつ頃から所持してゐるかミ聞いた。主鈴は三年前ミ言つたので贋物であるミが判明した。逃げやうミする主鈴を引捕へて岩次は五十兩のかたり奴、大盗人奴ミ言ひつゝ萬次郎が出した折紙を自分の懐中へ入れた。だが誰も知らない。主鈴は一人の母の病氣故ミあやまつた。萬次郎は親孝行ミあれば許してやれミ岩次を止めた。岩次は憎い奴だがミ折紙を二枚萬次郎に渡して主鈴を許した。そこへ藤波の家來が主人左膳が待つてゐるミ萬次郎を迎えに來た。萬次郎は林平をつれてその迎へに立去るミ、主鈴ミ岩次の様子はがらりミ變つた。そこへ大藏ミ丈四郎が出て來た。四人は顔を見合つて笑つた。

『首尾はさうだ』

『まんまミ折紙は摺り返へて此の通りぢや』

總ては狂言であつた。黒上主鈴ミはあんなの宅悦で、衣裳を脱ぐミ肩あての着物ミなつて金包ミを貰つて歸つて行つた。折





は丈四郎、大藏を捕へ、林平に萬次郎の件をさして立退かした。いまは一時も早く密書の宛名を讀みたいと思つてゐるに、丈四郎、大藏が性こりもなく暗に大刀をふりかざしてはすかを切つた。鳥が啼く。

「うれしや、日の出……」

喜ぶ貢の聲に、そつと近よる丈四郎の手をねじあげ、大藏を踏まへるに、二見の岩の中央に眞赤な太陽が上がつて来た。

「宛名は徳島岩次殿、蜂須賀大學より……」

貢は二人を見事に投げた。

「よめた……」

古市油屋の座敷である。赤毛氈を敷き列ねて客の次郎助、丈八、定七の三人は仲居の千のやよしのを相手に話してゐる。今夜は奥座敷で舞の會がある。葵の上、保名の物狂ひ、最後が總踊りの音頭である。次郎助

達が奥へ立去るに門口へ萬次郎がやつて来た。奥より出て来たおきしはばつたり顔を見合せた。逢ひたかつたわが女から聲を掛けたのを見るに深い仲である。萬次郎は貢の世話になつてゐるのでこいふにおきしは聞かない。此四五日行衛が知れぬ貢が心配して氣狂ひのやうに尋ねて来たのである。萬次郎は自分の放埒から下坂の刀はもこより折紙まで盗みさられたので貢に苦勞をさすまいと伊勢はもこより鳥羽へも探しに出向いてゐるのである。おきしは今に貢が尋ねて来るから待つてゐよと言ふ。奥から千のおきしを呼びに来た。では大林寺の裏口で待つてくれと二人は別れた。千のは萬次郎が逃げそ、くれて小かけへ隠れたのを見て見ぬ振りをした。晝は顔出しがならぬ身の上で夜になるさうろくする聲めが萬次郎にあてこすつた。萬次郎は怒つたが女に止められてほゝかむりをして大林寺の裏口へ立去つた。奥から葵の上が聞えて来る。貢が黒羽二重の着附に黒ちりめんの單羽織に下坂の刀をさして足早やに出て来た。貢は刀が手に這入つたので毎晩萬次郎を探して歩いてゐた。おきしは眼さきく見つけた、そして萬次郎を大林寺の裏門に待たしてあることを告げた。貢がそれでは出掛けやうにするにおきしは行き違つてはいけなから此處で待つがよいと止めた。それは阿波の客がおきしとお紺を身請けして國へつれて行くと言ふので何か思案はないか聞いた。そこへ仲居の千野が出て来て無理におきしを連れて行つた。

『先達藤原様のお心添へで伯父蜂須賀大學殿の謀反に加擔の武士徳島岩次、まつた監玉屋北六いふ町人共の人相骨柄、聞いたるこは抜群の相違、何にもせよ折角手に入れた此下坂の刀も折紙なくては何の詮なきなまくら同然、その折紙はまさしく岩次云ふ侍か。こりや今宵は爰は動かぬわい』

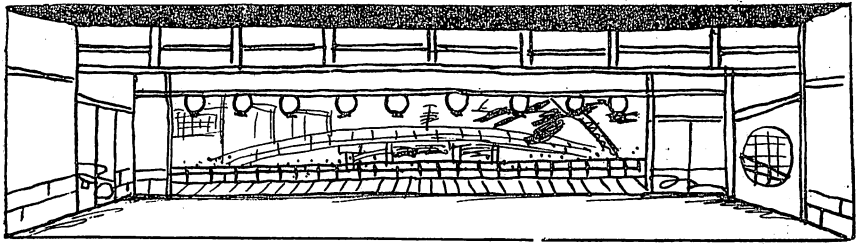
貢は一人思案にふけた。そこへ仲居の萬野が出て来た。此間中阿波のお客で座敷が放れられなかつたしそれに今夜もお紺は成らぬと斷つた。貢が少しでも逢はしてくれよと頼むと、客は阿波の侍で無粹者のゆえちよつこの首尾も出来ぬから歸れと言ふ。では待合す人があるので此處で待たしてくれと言へば、かわりの女郎を呼んでくれ、それにお遊びなら腰の物を預る言ふ。貢は困つた。そこへ料理人の喜助が奥より出て来て、『貢様も今でこそ御師、以前はお侍、男が男にあづけるを何のいなごもおつしやるまい』

貢引受けた。その喜助こそは貢の親に仲間奉公をしてゐた者でふとした間違ひから同家中の仲間を殺めて手打になる處を助けて貰つた事がある。それでこうした傾斜の地へはあまり足踏みをしないやうに注意も添えた。貢は今更に喜助の忠義をめで、此の一腰こそ本國阿波より今田萬次郎が殿の御意をもつて求めて歸れとある青井下坂の刀であることを告げた。そしてその折紙を欲しさに此の邊りをうろつく譯を話した。貢も喜助が奥へ這入るに違つて岩次が自分の刀を貢の刀を兩手に持つて

現れた。目釘を抜き刀の身を入替へやうこいふのである。喜助はその有様を見て驚いた。岩次が奥へ這入つた後でまたその中身を取替へておかうと思つた。喜助も入違つて貢が出て来た。女郎のお鹿がお紺の代りに出て来たのである。お鹿はこれまで度々貢に文を遣つてゐた。その返事も度々貰つたこいふがそれは貢の知らない事である。お鹿はもう貢がお紺を見捨てて自分の者になつたま信じ切つてゐたが、貢には迷惑至極なことであつた。お鹿は貢の無情さに泣き寄つた。岩次もお紺が手を引いて、北六おきし、次郎坊おきぬ定七、丈八、仲居の千野よしの等を連れて這入つて来た。貢はお紺の不實を責めたが却つてお紺は自分以外の女を相手にする男の浮氣を罵つた。皆も貢を筆客と笑つた。貢は萬次郎と待合したい今夜のわけをお紺に告げたが、今度はお鹿が怒り出した。お鹿は貢に剛愎して艶書をつけたが、それに對して貢からはいつも嬉し返事が來てゐた。それに遂に一度も客にはがれた事はないが、貢のために客へ無心をいつたり、着物や櫛まで工面して二兩三兩と用立て來てゐるこわめき立てた。

『大がいな事は女子と思ひ聞捨にもせふが、大勢の中で貢に金をやつたまはそりや、いつさういふ事で金を寄來した。聞捨てにならぬ』

貢は大いに怒つた。お鹿は慥かな證據があるま手箱を持ち出して無心狀を讀みあげた。その間にも貢はお紺の顔色をうか



がつたがお紺はつんこすましてゐた  
おきは氣の毒に思つてゐた。貢が  
無心狀を見るこいづれも偽筆であつ  
た。お鹿に仲立は誰かき聞けば萬野  
だき云ふ。奥から萬野を呼び出して  
聞くに萬野はお鹿の言ふ通り二兩三  
兩五兩貢に渡したと言つた。貢は  
覺えがないと言切つた。萬野は無心  
狀が貢の手跡か人に書いて貰ふたも  
のか知るものか貢の顔に打つけた  
貢は堪へかねて刀に手を掛けた。お  
きしが留める。

『お、こわ貢さん、おまへゑらう力  
んでいやしやんすな、こりや私を  
さうする氣かへ、お前はどの達、  
私は姫御前、サアさうなミ〜』  
ミ憎々しげに萬野は身體を突き付  
けた。貢は怒りをじつこく堪えた。北  
六は伊勢は無精に金を欲しがらる所こ  
聞いたが、お山をだまして金を取る  
こはこさも呆れ果てた。次郎助は御  
師の中でも薄い奴らは錢金を見るこ

ぶり／＼ふるひさらす、大方あれが伊勢乞食かこ笑つた。皆も  
口を揃へて伊勢乞食大笑ひした。お鹿は貢に武者ぶりついた  
『身不肖なれども福岡貢、女をだまして金をころふか、何を馬  
鹿な事を……』

貢はお鹿を突き放した。お紺はお鹿に無心狀を出すのならば  
せ私に言ふてくれぬ、女郎は互にはりの有るもの、皆の前でだ  
まされてゐたのが解つては消えて失ひたい泣いた。貢は國へ  
歸ればそなたを交出して武士の女房にすると言ふのを、お紺は  
侍が嫌だこ断つた。お紺の父がもこは侍で朋輩さすれあつて  
永々浪人で、常々に侍こは二世の約束をすな言つてゐた言  
ふ。貢は今更に女の變心を憤つた。お紺は侍を止めて町人にな  
れば貧しくこも得心するこいふ。貢は嫌な侍によく今迄つきあ  
つてくれた。これが別れぢやこ立か、れば萬野はきり／＼去ん  
で貰はふこ言ふ。貢は腰の物を喜助から受取つて行きか、つた  
『貢さん、これぎりでごさんすぞへ』

お紺はにべなく言つた。お鹿は貢に走り寄つて袖を握れば、  
放せさばかり顔をた、かれ鼻血を出した。貢は無念げに家を見  
返り萬次郎に逢ふべく急いだ。岩次は今まで寝た顔で聞いてゐ  
たのだ。岩次こは眞は藍玉屋の北六で、北六こそは徳島岩次で  
あつた。お紺は岩次に懐中の大事そうなふくさ包みは何かき聞  
き二階にあるこいふので急いで立ち去つた。萬野は岩次北六の二  
人に貢の腰の物だこ差出した。だが抜いて見ればそれは違つ

てゐた。喜助のはからひで貢の下坂の刀は貢の腰に納つてさし  
て行つたのである。そこで喜助に走らせて取かへて來さそうこ  
思ひ立つた。喜助は何にも知らない岩次らを嘲笑ひながら貢方  
へさ急いだ。萬野はその後で喜助が貢の家來筋であらうことを思  
ひ出した。今度は自分で一走り取かへて來よう急いだ。岩次  
と北六は奥へ去つた。川崎音頭が賑かに聞えて來る。貢が顔色  
をかへてやつて來た。お紺が二階の障子を開けて退狀だと言つ  
て巻紙の中へ折紙を入れて投げるなり障子を閉めた。貢は折紙  
を知つて喜んだ。退狀を見せたお紺の手紙の中には萬野とお鹿  
が馴合つての狂言も阿波の客に纏まれて自分の愛憎をつかさ  
やうさたくらんたこと、お紺が侍はいや見せかけたのは折紙  
を取返したかつたため、岩次は眞は北六で悪人の廻し者である  
ことなさが書かれてあつた。貢は更に刀の違つてゐることに氣  
になつた。萬野が走つて返つて來て刀がかわつてゐる故返して  
くれといふ。では自分の腰の物を返せ貢は争つた。そして散  
々に萬野を刀の鞘のまゝ、殴りつけてゐる中に、鞘が割れて萬野  
を斬つた。萬野は血だらけな自分を見て人殺しを叫んだ。貢も  
驚いた。もうこれまで萬野を殺し、寝さほけた次郎助を斬り、  
北六を胴切りになし、岩次の首を切り取つた。お鹿の首も衡立  
の前へ轉つた。

油屋の奥庭には紅提灯が美しい。川崎音頭の踊の掛聲が面白  
く聞えて來る。貢は血刀をさけて、手持燈を持つおきしと出合

つた。あつとおきしの驚くひまに定七、丈八が切りさけられた  
淺黄幕がきつて落す。奥庭の遠見だ。柴垣、手水鉢、雪見燈  
籠なさが松の間に見える。お紺と貢が行き違つた。貢は刀をふ  
り上げたがお紺だ。解つて手水鉢の水を求めた。お紺は早く落  
ちてくれといふ。

『お紺、そなたのおかけで折紙は手に入つたが又下坂をすり替  
へられ、こても承らへて萬次郎様へ申譯がない』  
貢は切腹をしようとした。そこへ喜助が走つて來て、

『お心を静めてまつくり御覽なされませ、その刀が眞の下坂  
でござります』

『なに是れが……、まことにこりやこれ、青井下坂、此二品の  
揃ひしはちえ、忝けない。此上はちつとも早く萬次郎様へ御  
手渡し申さん』

そこへ萬次郎とおきしが出て來た。二品が手に揃ふた上はち  
つとも早く歸國をしようといふ。おきしはやがて成就する本望  
を喜びお紺も共に喜びあつた。忍んでゐた次良助が、

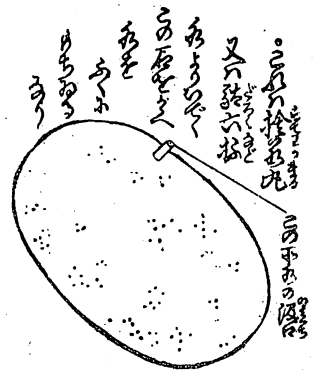
『それをこつちへ……』  
と取りにかゝるのを貢は見事に斬つた。

『刀の斬れ味……』

『見事……』

『はあ、いざ御受取り……』

と目出度幕はしまつた。



# 西郷と大久保

山本 有三

自分が「西郷と大久保」を書いて見たいと思つたのは學生の頃からである。年月は記憶にないが、十五、六年前「中央公論」に池邊三山氏の「大久保利通論」が出たことがある。私はそれを讀んで刺激を受けたのが、そもその動機である。

併し何しろ兩者とも史上の大人物であるから、その事蹟や周圍の事情などを調べはじまるに、調べるに、その事が既に十分自分の興味をひき、それに引きづられる形になつて、筆を執るにこまはよく遅れるばかりであつた。それでも昨年の四月にやうやくこの一篇を書き上げることが出来た。偶然のこゝではあるが、去年は西郷の五十年祭が行はれた年であつた。そして今年は大久保の五十年祭に相當する。その時にこの作が上演されるのは一奇である。

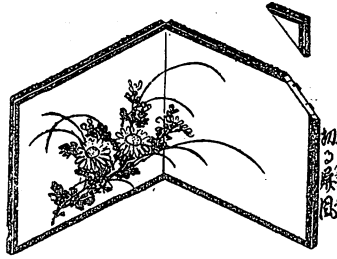
私にはこの戯曲の外に薩藩のこゝを取扱つたものがなほ二篇ある。「同志の人々」と「嘉門三七郎右衛門」がさうである。

二作とも西郷、大久保の事蹟を調べてゐる間に遭遇した材料を基にして執筆したものである。いはゞ、「西郷と大久保」の副産物であり、小手ならしのやうなものである。併しそれ等は史實そのものが模倣してゐるので、私は大膽に事件を創作した。けれども「西郷と大久保」の場合に於いては、出来るだけ史實を重んずるにこした。前作と違つて、これは事蹟がかなり細かに分つてをり、しかもその事實に多くの變更を加へずともそのまゝ戯曲になり得るに信じたからである。

近頃ある種の人々の間には、史實を思切り打壊して、史上の人物に新しい解釋を與へるにこを以て優れりみなす風潮があるやうである。例へばナポレオンを弱虫にしたり、ワシントンやうでふにしたりするやうな類である。奇抜さいふ點からいつたら、それは奇抜である。そして場合によつてはさういふ試みも亦面白いに相違ない。併し殊更史實を變へずとも、その中に劇



的のものを見出した時、それを打壊はす要はないやうに思ふ。史實を史實のまゝに生かして、その間に於いて劇的に盛り上げて行くことが、私は史劇の正道だと思つてゐる。拙作「西郷と大久保」が敢てそれに當るさはいはない。たゞこの作を執筆するに際して、さういふ心構へで當つたといふにさゞまる。(史實を重んずるといつても、時間や、場面に關して嚴しい制限を受けてゐる戯曲にあつては、必ずしも史實と一致しないのはいふ迄もない。史劇は歴史ではないのだから。私がいふのはその



## 「西郷と大久保」に就て

濱 村 米 藏

「西郷と大久保」は山本君が去年の五月の「文藝春秋」に發表した、三幕六場の本格戯曲である。一寸讀んだところでは、女氣が一切ない、この場面も議論ばかりしてゐるのだから、舞臺ではさうかき考へさせられる。それが山本君のやうな人氣のある作家で、一年一作と云はれる位だから、脚本の出る度毎に非

大本についていふのである。

初期の計畫では、この「西郷と大久保」は五幕ぐらゐのものにする豫定であつた。そしてこゝに收めた部分は略、その第一幕に相當するものであつた。併し途中で變更して今のやうな形に改めることにした。従つて本篇は全體からいふと、第一部、征韓論の部もいふべきものになるのである。が、これだけで獨立したものと見做しても差支へないと思ふから切離して發表したのである。

常な注目を惹いてゐるにも拘らず、今日まで手の出なかつた譯だらう。

それからもう一つ、西郷と大久保と二人のほど同じ貫目の俳優が必要で、それが作にも書いてあるが、夏と冬位違つた性格なのかも知れないが、明治維新以後の英雄といふ點で何となく

似てゐるやうな先入観念がある。これも私はかりかと思つてゐたら、さうでもないらしい。今度もこれを帝劇でやるころだつたに聞いてゐる。さうするに無論幸四郎三左團次でやる豫定だつたらう。大久保がごんな人物だつたか、私はまるで知らないが、脚本にあるやうな瘦せぎすな男だつたといふ氣がしない作もそれを可憐に書いてゐるが、その割にピンシ來ない。やはり讀んで了つた印象を云ふに荒削りな所謂英雄式な人間が残つてゐる。私に先入観念があるせるか、それも多少あらうが、作の方に大久保といふ人間をえぐつて見せたところはなほ思ふ。西郷も大久保もはつきり大きく描けてゐるが、何となく新聞の第二面に出る大臣の行動のやうに、第一公式で親しみがなほい。つまり押出しの立派な俳優で、兎に角西郷らしく、西郷さんの方は特長があつて芝居でもお馴染であるが、その西郷さんにつまかふだけの俳優で、これも見たところ大久保らしく、いいふこになれば、さうく一座のうちで、二人の適任者を見出すことは、前にも云ふ通り一般に偶像視されてゐる近世の偉人だけに、そのはまり役を見出すことは難しい。それに押出しの點はい、として、西郷や大久保のやうな文化史的背景のある早く云へば一種の思想人のやれる俳優は歌舞伎にさう澤山ない帝劇でも座附の一座では出来ない、結局左團次の加入を俟つて議題に上るといふ風である。が、この脚本を人間臭く、云ふのは一九二八年式新劇風に演出するといふ見方を取れば、いつ

そ又別問題だ。二八年式まで新しく行かなくつても、話の出した序だから帝劇で云へば、勸彌の大久保といふ案を立てれば立てられないことはないが、何と云つてもこの脚本は理想的な最大級の演出を期待させるものがある。

「西郷三久大久保」を表現派式脚本乃至映画の手法を取入れたテンポの早い八幕四十何場云ふやうな最近流行の脚本に比較するまでもなく、これは非常にクラシックで四六駢儷體の文章を讀むやうな觀がある。題材のせるもあらうが、いかにも磨きに磨きが掛つてゐるからである。

そこで一寸見はいかにも一般向きではないが、何しろ構造はしつかりしてゐる。仕事にごまかがない。さうして手が込んではないやうでゐて、實に技巧としては細かいタッチが層々重なつてゐる。即ち嘘のない作品の美しさがあつて、さういふものは地味で、百貨店のシヨウ・ウインドウ式ではないが、見てゐれば幾世紀の手練を経た美しさだけに、誰にでも分る。その點で先づこれが案外一般向きである云へる。

その上、この作者だけに舞臺の實際を考へて、なか／＼その方の用意を怠つてゐない。第一幕の幻影の場、これなごは全體の感觸から云つて甘いと思ふ位である。其の外、第二幕第二場の虫の音、第三幕一場の渡鳥の聲だとか、落葉の雨、第二場の西日を受けた障子の松の影といふやうなもので、幾つかのいゝ風景畫が出来る。それだけでも一通り持つてゐられると思ふ

そんなことは詰らない云へば詰らないが、渡鳥の聲や、落葉の雨や、西日の障子の影もその時その場合では、その聲、そのひびきを耳にしてゐるだけで、何とも云へない美しさを感じるのである。障子に當つてゐる夕日を見詰めてゐても、實際我々は近松の道行の文句を讀んでゐるよりも恍惚することがあるから、さう莫迦にしたものぢやない。こんな風に説いて來るに、「西郷と大久保を讃めてゐるのだが、くさしてゐるのだから分らなくなつて了ふが、眞正面から云つて、この作のクライマックスである第二幕第一場の内閣閣議室の場は、全體が議論で成立つてゐるからさうかと思はれるのだが、これでこの場が案外一般向きである。それが舞臺では更にさうだと思ふ。西郷の軍服、他の人々のフロックコウト、三條や岩倉の烏帽千直垂で見た目が第一劇的である。それから甲論乙駁の議論だが、實に分りのい、議論で、ちつとも難解なところが無いから聽いてゐても、滑かに劇的昂奮を萬人が萬人共得られさうだ、蕪雜な議會の言論でさへあれだけの人氣がある。こつちはちつとも無駄のない平明な議論だから、無論立派な効果が得られると思ふで、その問題は何だと思へば、誰でも知つてゐる征韓論だ。

それから一方脚本を讀んで行くやうな心掛けの人々には、西郷の征韓論といふものが、二、三十年の未來を見通した意見ではないかといふことまで考へられる。

大久保の意見は條理が立つて、至極尤ものやうではあるが、

諸論の爲の議論、當時の新智識をひけらかすやうな氣分がないでもないと思ふ人があるかも知れない。

又脚本では、この場の大久保の議論が征韓論から日本を救つたのでなくつて、大久保の後の暗中飛躍が効を奏してゐるのも皮肉だ。

その邊は、近頃の内閣改造騒ぎや、政治の實際を考へる參考になつて、この脚本の上演は興行價值から云つて、名案だとも云へさうである。

普選の世の中になつて政治が、一般人の最上ではないだらうが最大の興味になりつゝある。且つ征韓論を中心にする西郷の運命は、日本の近世史に於ける大きな感奮的事實でないか。だから「西郷と大久保」は史劇としてもかなり一般向きであると思ふ。

併し私が「西郷と大久保」を讀んで感心するのは、以上のやうな史劇としての見方でない。西郷でも大久保でも誰でも、友情に就て考へさせられる點である。

自分の信じてゐる友達に反對されるこゝが、そんなに淋しく腹立しいものか、それを私は第二幕の閣議の場て考へさせられる。あの場合無二の友達に反對されたのでなければ、西郷もあゝまで昂奮しなかつたらうと思ふことである。

それにしてもお互に對手の友達を疑はないで、能く信じ合つてゐるこゝである。その點は大久保が能く描けてゐる。第三幕

第二場で大久保が伊藤に向つていふ、  
「伊藤君、西郷は死にたかつたのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです」

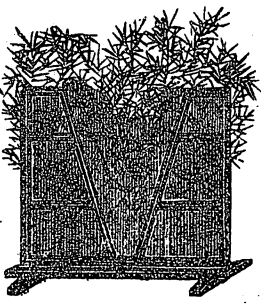
これには打たれた。

「何でもい、南州のものを掛けてくれ」

この言葉にも打たれた。この幕切の前後は實に能く締めて書いてある。

二幕目の大久保にはさうも策略があつて面白くない。三條や岩倉の言質を取つて置いて、い、氣になつて西郷等に反對するのが、さうも大久保の人間を疑ひたくする。なぜ大久保は直接

初巻の  
教壇と  
衆の圖



# 鴈治郎の盛綱

渥美清太郎

鴈治郎の盛綱は既に鑑定付きの藝である、我れ若輩者が何をか云はんやだが、お求めによつて巧いと思ふ所を二三箇所並べる。

元來、盛綱といふ人物は、可成り不完全な書き方で出来上がつてゐる。理屈を云へば型無し同様かも知れぬが、只情の人」

西郷に逢はないか、さういふことまで考へさせる。さこまで友情があつたか、さうして遂に友情そのものまで疑ひたくなるやうな氣がする。

それが第三幕になつて、友情の美しさがさんさんとして光つてゐるのを見る、そこに心を惹かれた。死んだ芥川氏や、菊池久米、山本諸君の友情も云ふものは、文壇の誰もが羨望するところだ。山本君のやうにい、友達があるもので、始めてかういふ美しい友情が描けるのだなさいふ氣がした。死生を誓つた友達に離れて行く淋しさ、さういふものを私はこの脚本から一番多く受けた。

ミしては實に上手に書かれてゐるので、それに眼が眩んで外の缺點は、それほご眼につかない。さうして鴈治郎も、その「情の人」ミしての盛綱に、ウンミ力を注いでゐるらしいのは、當然かも知れぬが恰好である。そして、犠牲の小四郎にたいする「情」よりも、前の母に對する「情」の表はし方にわたしは多く

打たれる。それは「聞分けてたべ」の彼の技巧である。あの甘つたれるやうな恰好をして、少しもおかしくなく、敬愛する母に心から縋る。母を騙すのでもなければ、いゝ加減な出放題を云つてゐるのでもない、眞實心から母に縋る気持ち——氣丈は知りながらも老の胸を搔き亂す苦しい気持ち——母ならやりまけてくれるだらうといふ稍安心の気持ち——同時に小四郎を不惑がる気持ち——そして勿論弟の身を氣遣ふ気持ち——主人を裏切る一種不安の気持ち——それが軍中の陣屋の出来事である落ちつかぬ気持ち——さうした複雑な感情が、あの甘つたれるやうな技巧一つに溢れてゐるやうに感じられる。下手な役者があの型をやつたら、悪落ちが来るだらう。鴈治郎はそんな恰好をして看客を感激させてゐる。全くあの、親孝行な、弟思ひな、誰れにも隔てのない愛を注ぐやうな盛綱、その人間があの技巧一つで見せられてゐると思ふ。あれでこそ微妙も、立派に承知する事が出来ると思はれる。尤もこれは鴈治郎の、先天的な柄や持ち味から来る點もある。併し、あの技巧は、鴈治郎獨特で、あの技巧がうまくなければ、いくら持ち味があつても盛綱には成り切れない。あの技巧から溢れる情味は、全く温かい、なつかしい、愛らしい盛綱を作りあけてゐる。わたしは鴈治郎の盛綱で爰が一番巧いと思つてゐる。

「思案の扇」の落し方も、さう凝らぬやうでゐて、矢張り凝つ

た技巧がほの見えて面白。首桶を明ける前がい。弟可哀やの気持ちが出つてゐるからである。それと首實檢の悪長くないのも有り難い。鴈治郎の盛綱は注進受けを抜いても猶二時間五分ばかりかゝつた。さうかゝりびざく伸びる所があるのだらうと思ふが、この首實檢は割合に短かい。それでゐて、あの時の錯夾した気持ちは充分出している。

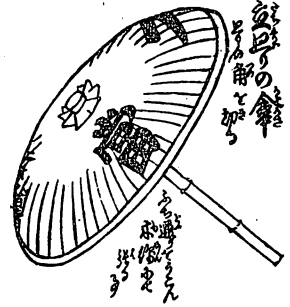
押出しは勿論第一だ。院本物特有の味や風情は、そこは京阪の俳優だ、遺憾なく出してゐる。總體に、ねつこりこした、濃い味はひのある所が有り難い。

## 樂書帳募集

- ▲樂書帳を募集いたします(所謂讀者通信)
- ▲樂書帳には好きなことを御自由にお書き下さい。
- ▲個人攻撃は御遠慮願ひます。
- ▲出来るだけ澤山採用いたす心算ですが、頁の都合が取捨は當方にお任せ下さい。
- ▲原稿は二百五十字以内で認めて下さい。
- ▲封筒には必ず(樂書帳在中)と朱書して下さい。
- ▲宛名は

大阪市南區久差衛門町(松竹合名社内)

道 頓 堀 編 輯 部



# 平凡人の盛綱

高安吸江

鷹治郎の近八が出るそうな。大正以來四回出て、又かと思はれた梅忠も同じく、まだ三回目でありながらそれに似た感の起るのは、此役が忠兵衛同様鷹治郎の當り藝で、特に深い印象を一般に與へて居たからであつて、實際東都に於ける羽左衛門、吉右衛門と共に當代での代表的盛綱役者であることは今更云ふだけが野暮であらふ。

是まで鷹治郎は此役を何回勤めたか、又その初演はいつであつたか、そしてその中を私がいかに見たり聞いたりして確に記憶しないが、覺えて居る中での最古は明治四十三年一月の中座で其前年の十月に東京の歌舞伎座で八百藏(中車)の微妙を相手に勤め、十二月の京顔見世にも出したのを更に大阪へ持越したものである。次は大正九年二月で中座改築披露に引續いて上演したものの、第三回は同十三年五月で、それから今回が第四回といふことになる。

四十三年の時もそうであつたが、今回もそれと同様東京土産とも云ふべきで、それが兩回とも一般の好評にひきかへ所謂専門の劇評家連が他の役程に激賞しないのも妙である。一體鷹治郎の盛綱は東京の水にあはぬのか、抑の初上りからケチがついて居る。それは明治二十三年の五月であつた。彼が初めて上京した時の御目見得として新富座の大切に此近八が出たのであるが、芝翫(先代)の時政、福助(梅玉)の微妙、秀調(先代)の篝火などで、お貞に團、菊兩人が注進の御馳走といふ段取であるから、新進の若者にまつて此上もない榮譽を歡喜したのも束の間そこは有爲轉變の芝居道にて種々ミゴテがはいり、いつも時間がないミカで眼目の首實檢は出す仕舞、やつと和田兵衛(先代左團次)の出會で打出しになつた。是では評のしやうもないであらふ。饗庭箕村翁(當時はまだ若かつたは翫雀の俤があつて若年の利ケ者)だけ云ひ、六二連の評判には「押出の人體は

都て故宗十郎張りにて調子もソツクリ聲色を遣はれ升た、拵へば天鷲絨の生々の臺にて紋切形の好みゆる難する處なし」に記して居る。

それから二十年を経た四十三年には彼も相當の年配になり、踏襲した末廣屋の藝風の上へ種々自身の工夫を附加へ自信あるものにして發表したのであらうが、惜むべし其苦心は一二の識者から認められたに過ぎなかつた。是は當時尙崇拜の的であつた團十郎に、彼の師とする宗十郎との異つた藝風に因ることも考へられるが、寧ろ新入者に對して常に嚴酷である東都人通有性の發現といふのが主なる理由ではあるまいか。それから又十數年後の今日、當時まだ若輩であつた羽左や吉が今や完成期に入らんとして居るのに對する所謂土地最負が、もはや爛熟し過ぎた彼にまつてかなりの大敵であり得る事も考慮に入れなければなるまい。

院本の時代物、殊に出雲や宗輔以上に技巧の爲の技巧に捉はれた半二なきのもので、到底求むべきでない深味を、元來が技巧の人で形式美にその長所を有つ鴈治郎に求めやうとするのは無理である。又彼が孜孜汲々として努力する所謂工夫研究なるものも多くは皮相の理屈に過ぎない。是がよく非難せられて居る。成程彼が陣屋の隅々見廻す時、下手の總で足をトンミ打つ型なきは私も賛成は出来ない。併しそれ等は多く枝葉末節で、其爲に此役全體を失敗さしてケナしつけるのはあまりに當を得ない。此れは歴史を無視して一切の過去を、その美、その善も

共に破壊し盡さねば承知が出来ないといふ無分別な現代人に似て居る。後進を誤らしめない様に、缺點を攻めるのは必ずしも悪いことは云へないが、それよりも圓熟した彼獨特の長所を評釋して後進を指導するのが斯道に忠なる、そして權威ある評者のなすべき務であらふ。

彼が是まで蒙つた非難について、私は一々こゝに辯解する暇はなく、また其美點を詳しく説明する程の専門的知識をもたぬが、唯此役の中で私が尤も美しいと感じた一二の箇所を指摘しておく。

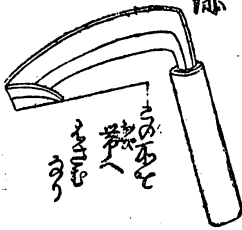
彼が情の盛綱であることは既に一二の論者から説かれて居る元來此役は總領の甚六で、弟の高綱程に鋭くない代りにそれ程に冷酷でなく、苦節を守る弟や、父母の命に柔順である甥の爲に一命を捨てやうと決心する位深い愛情をもつて居る。此故によしその主君を欺く様な罪を犯しても一般の同情を失はず、又和田兵衛や小四郎即ち高綱から翻弄せられ、母や君から疑はれても、見物からは少しも侮蔑の眼を向けられない。それで武士にして二心を怪まれても、平凡人として人間味に富むこゝに於て共鳴者を見出し得る、つまり半二は技巧に過ぎたる結果、武士を描かんとして失敗し凡人として成功(?)したわけである。鴈治郎の盛綱が情愛尤も濃やかなる處は、云ふまでもなく「聞きわけてたべ母人」に小四郎に腹切らすべく懇願する條である私はいつとも先年物故した彼の老母——長年辛苦を共にして互に深く相愛して居たそのママを憶ひ起さずには居られない

かつた。恐らく彼自身も此場合其實母を心に描きながら演つて居るのであらふ。そして世話過ぎるこの評も或はこんな事に原因するのであるまいか。

次に無類の贅辭を呈してよいのは「褒めておやりなされ」も切腹した小四郎を讀める前後で、此處には是までから誰しも異存はないやうである。しかし子供に對する情愛は近年一層著しくなつたやうで、近くは布引の太郎吉に對する態度でも推測せられる。恐らく彼獨得の軟かい線の中に含まれた情味は今回の演出に於て一層豊富になつたであらふと、心ひそかに期待して居る。

子供云へば今度久しぶりに故雀右衛門の遺子章景が出演するに聞いた。丁度大正十三年五月に篝火ミ毛剃の小女郎をふ

後抑の縁



## 持ち度い叔父さん

—— 雁治郎の佐々木盛綱に對する感想 ——

丸 山 耕

られた京家が、其總稽古におくれまいと大急ぎで歸阪の車中で脳溢血の第一回發作を起したのである。父の役が篝火であつたから、其遺子に小四郎を演らせる云ふのなら面白い因縁で、申分のない好紀念劇なるのであるが、今は劇界の孤兒である不幸な章景に、そんな贅澤は云へない。小三郎にした處で、當代隨一の盛綱と共に登場し得る慶びを思ひ、慎重に此一役を勤めおとせん事を陰ながら祈つておく。

盛綱に就てまだ「書くべきことが無いではないが、一切が迫つて居るので是位にして擱筆するにあたり、我が雁治郎君に君が周到なる注意力を、上ツ面ラな理屈や悪寫實の一掃に用ゐ大味な時代物の妙趣をより完全に出す事に一層努力せられる様との苦言を呈しておく。(了)

『近江源氏先陣館』盛綱陣屋の境は、全編の八つ目だが、この一幕だけが珍重して繰返されるのは、最も傑出してゐる場面だ

からであらう。事實に於て、底に底があり、變化に變化を重ねる構想の巧妙さ、登場人物の配合さ、規模の立派さ、



花やかさ、情も涙もあつて而もいや味がない處、申分のない戯曲さへよう。少くも、僕が大好きな芝居の一つである。大好きなは僕ばかりではない見え、看客は誰も此劇に對して苦情を云はない。大満足で歓迎する。その代り重大視される事も一層で、この盛綱に對しては誰が演つてもその解釋や演出にいろ／＼な議論が出る。ヤレ首實檢の腹が違ふの、道具を二杯にするに陣屋でなくて御殿になるの、可なりうるさい事でもある。俳優も亦それ／＼に見解を異にして、問題の種を拵へてゐる。尤も見解が個々別々になる譯で、元來盛綱といふ人物が、戯曲の中心には相違ないのであり立派な役にもなつてゐるのだが、冷靜に考へるに、それ程の智者でも英雄でもなく、大人物でもないのである。高綱、篝火、小四郎、弟一家が申合せての、苦肉の計略に引かゝり、斷腸の思ひをして煩悶する。殊に小四郎を大死させまいと、その計略を成功させた後で、主君への申譯に切腹しようとして、和田兵衛に輕卒を止められたり、益々感服出來なくなる。九代目團十郎は、實盛、盛綱の役を二心だといつて嫌つたそうなる。淺く片づけて了へばそうかも知れない。然しそこに劇の上の人物としての面白味があるので、元より劇の盛綱は實在の盛綱とは違ふ。此戯曲の作者が、此一場の構想を組立てる都合上、こういふ性格の人物にしてつたのである。而して此劇に於ける盛綱その人は、實に氣の毒な立場に置かれてゐる。尤もこれが興味をも深め、同情をも惹く原因

なのであるが、一言にしていへば、盛綱といふ役は、人間味の豊かな情の人である事に於て誰も異論はないようである。故に俳優もその心を以てこの人物を表現すれば、即ち成功する譯である。その點に於て鴈治郎の盛綱は、實に適材適所のはまり役と言はざるを得ない。況んやこれを助くるに、堂々として立派なるその風采を以てするのだ。悪からう筈がない。誠に當代第一の盛綱である。

細かい仕草の角々には、看る人によつて異論があらうが、總體に叮嚀なる演出さへ一言を以て盡きると思ふ。一例をあければ首實檢に當り、小四郎の方へ父に別れを惜まされる心で、よく見へるように首を向ける。小四郎がヤア父様腹を切る。盛綱始め一同が驚く。こういふ順序を誰にもわかるよう鮮かに運んで演つてゐる。つまりこういふ複雑した難解な筋や人物の心情を、如何にしたら何の看客にもよく會得されるように見せる事が出来るか、念には念を入れ、かんで含めるような演り方であつて、徹頭徹尾、親切が溢れてゐる。この親切は演出の上の親切だが、これはやがて鴈治郎その人の性格なのであらう、その性格が、盛綱といふ役を透して、温情が充分に現れる。情の人としての盛綱を、鴈治郎が演じて成功するのも偶然ではない。情味の溢れた鴈治郎の盛綱は、小四郎ならずとも、持つて見たい叔父さんとして、懐かし味親しみを感ぜずには居られぬ即ち、評言にこれを題した所以である。(三一五—二六)



# 「身不肖なれども福岡貢」

石 割 松 太 郎

「女を欺して金をさらうか」と、伊勢だけに、御師の福岡貢はいつてゐるが、全く「身不肖」の男は、福岡貢の宇治浦田町の孫福齋宮である。實説によると彼は醫者であつて、この構事のあつた寛政八年の五月四日は、二十七歳の無分別盛り、その上酒が悪かつた。芝居でするやうな、刀の崇りや認識は、お芝居事だが、酒の上の悪かつたこゝは事實だ。彼は醫を京都の吉益東洞に學んだといふことだから、多少の教育のある方だが、酒亂の末がこの九人斬をしてしまつたのだらう、この當時の記録から、芝居の舞臺に役立つと思ふことだけを抜書してみるこゝまづ齋宮の人相書だ。

- 一、二十七歳
- 一、せい五尺二寸、中肉
- 一、顔面長頬、但し色白く柔和

- 一、密髪厚き方
  - 一、眉毛濃く目尻上り二重まぶた
  - 一、鼻筋通り高き方
  - 一、口小く齒細に、言舌さわやか
  - 一、刀鏢 鐵のべつたり柄黒鞘黒
  - 一、當時の衣類 木綿鼠小紋袷、裏縞花色裾掛
  - 一、帶琥珀ニ萌黄薄紫の立縮
- こゝある。これで見ると美男子であつたらしい。おこんは當時十六歳の茶汲女であるが、これは殺されなかつた。文政十二年まで生きてゐて、四十九才でなくなつたこと傳へるが、齋宮の色の戀の關係は、通り一邊で、殺傷の原因は金にあつた。當時の茶汲女の風俗を知るために、殺された茶汲女のきしの風俗を抜書してみるこゝ。

一、花色細袷、但裏紅絹

一、帶縮緬あさの葉小紋

一、肌着縮緬花色絞り

一、下帯緋縮緬

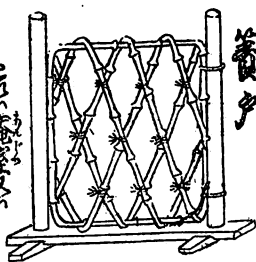
さある、その風俗の一斑が窺へる。このおこんが前垂をしめて帯に挟んでゐるのは、相の山の掛茶屋の茶汲女の風俗で、客の席へも出たものだといふが、古市の茶屋の入口には、茶釜が置いてあるのはこれに起源し、この茶汲女が、遂に女郎にまで變遷したのである。

この伊勢油屋の九人斬が、大阪に知れる芝居で、事件後の五十二日目即ち、寛政八年七月廿五月初日で、「伊勢音頭戀寢劍」が上演され、貢は二代の中山文七、おこんは芳澤いろは。作者は近松徳三。これに十日遅れて京の南の芝居で、「川崎踊拍子」が出来た、作者は奈河篤助、遠山齋宮は二代目嵐三五郎、おこんは山下八百藏で、この方が實説に近かつたが、貢の大當りは中山文七で、「伊勢音頭」の甘のこの狂言が、今日に残つた。これを江戸へ持つて行つたのは、三代目の坂彦で文化元年の夏頃である。この坂彦の系統が今日に及んで、夏狂言の音羽家畑のものが、近年の福岡貢になつてしまつた。

鷹治郎の道頓堀での福岡貢は、久しぶりだ。この人も音羽屋畑の詮鑿から、丸に三ッ鱗の五ッ紋といふ羽織に、白餅の着附だらうが、五代目は御師といふところを見せようとして、惣髪で演じたこゝがあり、好評であつたやうだが、芝居は、お芝居ミ事實の相の山だ、見た目は惣髪よりも、青額であらうものだと思ふ。只芝居の性根では、武士でなく、町人でなく、和事でも濡事でも、實事でもないところに役どころがある。九人を斬すにしても、十人を斬すにしても、腕が冴えてゐるのではない、刀の祟りで、我人知らずにズバリ／＼と斬れるのだから、初めは、萬野を殺して、よく斬れるのに自分ながらに驚くといふのがこの役柄だ。

狂言の筋は、誰れでも知つてゐる甘い、縁切り後の殺しものだが、一つに貢の形によさで見せる芝居である。踊りはなくとも、好い形を見せる成駒家は、二見浦でも、殺しても、愛想盡しでもい、形を見せるこゝだミ期待する。が、淨りりでは、この狂言は、すつミ後に手摺にか、つてゐる、即ち天保九年七月稻荷車の芝居で出したのが初めで、古市油屋の段は島大夫、大隅大夫の語り場である。が、この淨りりは、近世では組大夫の得意の語り物で、この人がこの淨りりを大成したのであるといつていゝ。その後、今の土佐大夫が伊達大夫時代から十人斬で

賣込んでゐる、その三味線の手は、名人團平の苦心の作曲で、團平が五人まで斬るころまでは、何なく手がついたが、こゝで行詰つて、あゝの五人が斬れなかつた。この作曲の改作稿を懐ろにして、團平は地方巡業の旅に上つた、そして團平は、寝る間も忘れて、この十人斬りの手を考へてゐるが、出雲の松江の旅の宿で、行燈にかいた「お前まちく」の落書を見て、ふと心に浮んだのが、この「お前まちく」のウラを見て、十番斬が完成されたのである。これが淨りりの今日の油屋の十番



これに庵を造りて  
百枝の世後落  
ゆせりらる

## 伊勢音頭雑話

高谷伸

舞臺のいろりの美しさが時代物の誇りであれば、お囃子のおもしろさは世話物の誇りである。下座の合方の賑かさにつけ

きこえる。舞臺では貢が萬野を生命をかけて争つてゐる。鞆の

斬であるが、芝居はさうこの場を演ずるか、鴈治郎としては近來に珍しい殺しである。この淨りりの殺しの三味線は、伊勢音頭の手であるチンチンテンテンツンツンといふ音頭の間拍子を使つてゐるのが、團平の工風の味噌であるといふことだ。

この狂言については、まだく述べたいこゝがあるが、中座の蓋があいてから、こんきの舞臺を見てから述べたいと思ふ。

ま・萬野を毆る。鞆が割れて糊紅がべつこりつく。人殺しの叫び。それからはじまる十人斬。

舞臺は廻る。伊勢音頭はつとく、踊り子まで見える。それたちがまちに修羅場となる。そこへ俗に血達塵といふ、血にまみれた若い衆の鬘をひきやつて貢が出る。貢の白い着附に、赤い

手形がにじんである。頬のあたりも赤く彩られてゐる。

伊勢音頭を聞きながら見る人殺し、それはその筋ミやらの疝氣の種、惨忍さではなく、赤ミ白ミの色彩の舞踊である。

陰惨なるべき人殺し、それを美しく見せるのが舞臺効果の要諦である。

この芝居でもではあるが、賑やかな、または、しめやかな三味の音が、それだけ舞臺上の醜や悪を、美や善に轉化するこゝか、むかしの人の苦心もさこそ思はれる。

伊勢音頭變寝及の音樂的効果はこの殺し場だけではない。劇場により俳優によりお囃子へのあつらへは一樣ではないが、相場の山、幕あき幕切に使ふ與作の一節、「伊勢は津でもつや、箱根八里」、林平、大藏丈四郎の立廻りに使ふ心猿の「赤いものにさりてはなんばからしに唐がらしよいよいよまだも赤いかな」の賑やかさも耳にのこる。

萬野の出には戀の山田か、秋の七草を使ふたり、刀のすりかへに奥で唄ふ心で保名の「夜さの泊り」、お鹿の出に「いやミ飛のくのを無理にミつつかまへて入れてなかせる齋斯」を使ふなごも、それぞれ情景を助けてゐる。

鴈治郎の貢は大正五年九月南座で福助のお紺、市藏の萬野なごで見たきり、かなり久しいものである。

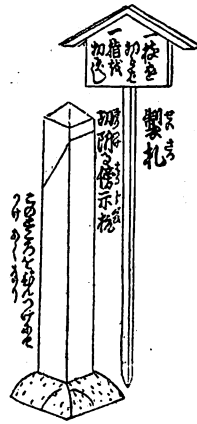
二見の浦の「うれしや日の出」ミ手紙を開いた裏むきの形から、大藏を抑へ丈四郎をねぢあけての幕切の形、その前のだん

まり模様で萬次郎を脊にかこひ手紙を啣へての見得なご皆定式の演所である。

こゝにうける所は、お鹿に金を貢いでもらつたさいふ話を満座の中で言はれ、その仲人は誰がしたさいふ事から、萬野のからくりミ知り、「萬よべく、萬のよべ」ミ兩手を羽織の襟にかけ、羽織を肩からすべらし、片膝浮かせてのきまりである。先年羽左衛門がこの貢で、二度目の出に羽織をぬいでしまつたために、この形のつかなかつたのは、首肯できぬころであつた。俳優としての演所もあり、舞臺面の變化も多く、夏狂言の中でも屈指のものである伊勢音頭は、寛政八年七月二十五日初日で道頓堀の芝居で二代目中山文七の福岡貢、芳澤いろはのお紺嵐雛助の喜助なご演ぜられたのが書卸して、作者は近松徳三、名題は今通り「伊勢音頭戀寝及」ミし、相の山、山田旅宿、二見の浦、正太夫の内、古市油屋、伯母の内、四幕六場であつたが、殆んど同時に京都南の芝居で「いせみやけ川崎踊拍子」ミ題し、宮川舟渉、御石螢見、油屋大寄、宇治屋敷、二見ヶ浦道行、鳥羽出養生さいふ今年都踊のやうな場割で上演された。この作者は奈河篤助、役割は二代目嵐三五郎の遠山齋宮、山下八百藏のおこん、中山來助の料理人宇吉なごであつたが、僅か十日のこゝでも先手をうたれたせいか「川崎踊拍子」の方は湮滅してしまつた。

このやうに同時に京阪で演ぜられるほどの事件も事實を洗へ

は、ほんの些細な内証事で、その年、即ち寛政八年五月四日の晩、伊勢古市の油屋へ宇治浦田町の醫者孫福齋宮といふ二十七歳になる男が馴染のお紺といふ酌女に一盃飲んでゐる所へ、芝居歸りの阿波の藍玉屋岩次郎、伊太郎、孫三郎の三人が來おはせお岸お鹿なごの酌で飲んでゐる内、お紺をその席へ引きこんだのが間違ひの因、貢が歸る歸るに野暮をきめこみ、仲居のまんなから預けた脇差をうけとるに共に、急に暴れだし、まんをはじめ九人を殺傷し、伯父の神職藤浪方へ行つて自殺をしやうとして仕損じたが、十日の後その傷が元で死んだといふ、際物を脚色されたもので、貢は岩次喜多六より野暮な男だつた位で



## 「伊勢音頭」問答

高 原 慶 三

あるのを、面白く書いたものである。この實録には異説もあるが大同小異である。

従つて上演の場合あまりに實説に囚はれると失敗するこゝが多い。小道具の一つにしても油屋寫しの朱塗の煙草盆を出して貢の使ふ手附の煙草盆とちぐはぐになつたり、定式の萬野が水團扇、お紺が深草團扇といふのを避けて伊勢團扇を用ひて、かへつて情緒を殺いだりしたこゝもある。

さうしだ點にも注意を拂つた上、上方の世話狂言の味を充分發揮されたら、伊勢音頭戀寝及は、丸本物以外の上方狂言にも面白い物のあるとを示す代表作として、確に適當なものである

△……「伊勢音頭」について何か話して下さい。但し雁治郎の出し物にして……。

○……鴈治郎が道頓堀へ出るに、何か僕の方へお鉢が廻つて來ますね。一つ鴈治郎一手販賣といふ看板でも出さうか知ら

……これは冗談だが……折角ですが、僕は鴈治郎の「伊勢音頭」について語る資格はありません。

○……恥かしい話ですが、鴈治郎の「伊勢音頭」を見たのは二

十年も昔です。たしか十六、七の頃でした、まだ中學時代でハッキリした記憶がありません。梅玉の喜助、故人多見藏の萬野、成大郎時代の魁車のおしか、雀右衛門？がお紐をしてたやうに思ふが……「油屋」一幕が出た切りで……それ以來不幸にして鷹治郎の福岡貢に接しないのです。

△……それでは、その古い時代の福岡貢の追憶ごいふやうなことを話して頂いたらいいのです。

○……それが、何分芝居意識前期の記憶ですから甚だ不確かなものです。それより「盛綱」を語らして下さい。「盛綱」なら大に自信があるんだがな!!

△……だつて「盛綱」は定評物です。今更あなたなんかが、ミヤかう仰有つても珍しい意見も吐けますまい、是非「伊勢音頭」が願ひたいのです。

○……困りましたな!! それちや鷹治郎に囚はれず「伊勢音頭」雑談をやりませう。

△……それで剩けておきますから、何でもお話しなさい。

○……まづ、改めて「伊勢音頭戀寝及」は近松徳三の作で、書卸は大阪角座で、福岡貢は中山文七、お紐が芳澤いろはなることは誰でも承知してゐることでありますが……

△……そんなこと位は判つてゐますよ、道頓堀の角座の本家の二階にある角座沿革史の額にチャーンと載つてゐます。

○……そう話の棒を折つて貰ふに困りますが、僕が何時もこの

「伊勢音頭」の芝居を見て不満を感じる點を申上げませうか。

△……結構ですな!!

○……まづ第一に不満なのは省畧の仕方、この頃は「油屋」一幕か、せい／＼省畧しない時でも「相の山」から「二見浦」へかけて直ぐ「油屋」を二幕三場へ過ぎませんが、これは一度ゆつくり「相の山」「山田の宿屋」「二見の浦」「孫太夫の内」「古市油屋」「烏羽伯母の内」を四幕六場、所謂上方狂言の二番目物にしてやつて見て欲しいのです。

△……だつて今の時勢にそんなダラ／＼と長い狂言なんか出されやしません。結局、演つて見たところで折紙と青江下阪のゆくへで筋を運ばせるだけではありませんか。

○……それは判つてゐますが、單なる筋を運ぶだけの興味ではないのです。この「伊勢音頭戀寝及」に一貫された郷土色といふものが僕は實際に舞臺の上で見たいのです。要するにこの狂言に現はれたものに何が一ばん特異なものか? 考へるに僕は眞先に、参宮風俗の舞臺化を叫ばざるを得ないので折紙や刀の證義などは敢てこの狂言に求めなくとも他に幾らでもあります、まづ第一に「相の山」では仕出しがお杉お玉に伊勢比丘尼がびんざらを鳴らしてゐて、「大阪を離れて」の木遣で幕明くなき作者は注文を出してゐますが、この幕明きの仕出しだけでも一篇の風俗詩ではありませんか。

△……成程、だん／＼われ／＼の世界からかけ離れてゆく追憶

の夢ですな。

○……そこへ古市の女郎が参官の趣向にいいふいでたちでお岸が現はれるなんか頗る氣の利いたゆき方だし、或は、當時古市の遊客が徒然にそうした趣向を考へ出したことこそ思はれるではありませんか、それから萬次郎、林平なさが施行駕といふ意味でこれも戯れに「雲助ご」をやつてるなんか當時の参官風俗とも見られます、今の芝居ではこんな件りは筋に關係ないからサツサミ省いて了ひますが、僕は實に残念です。

△……そう序幕から話が低徊すると困ります。さうぞ進行して下さい。

○……よろしい。第二場の「山田宿屋の場」これは滅多に出ません、或は舞臺に上せてもそう大して面白いものではありません。たゞ代官の熊本角太郎といふものを點出して、當時伊勢の神領一萬石、神領以外の志摩藩の領民が常に軋轢を生じて、その間代官もが神威を藉りて賄賂收受を行ふた……といふ徳川政府が神宮に對する尊崇の念がこもするご意り勝ちだつたごいふやうな社會學的な觀察が出来るのです。

△……オヤ、大へんむつかしくなりましたね。モツミざつくばらんに話して下さい。

○……承知しました。その次は「二見の浦」です。これは二見の日の出を畫面にした面白い舞臺です。貢ミ大藏丈四郎が暗がりに密書を奪ひ合ふミ、夜明鴉が鳴いて、四間餘りの紅は

りの朝日がノツミ出る。その朝日の光りで密書を讀むなんかなか、昔の作者は頭がよいと思ひます。羽左衛門の貢はこの場で大へんよい形をしましたね。

△……延若もよかつたらしうございますね。

○……さやう延若も悪くはありませんでした。さて二幕目は孫太夫内の場です。これは御師の宿で、今では宇治でも山田でも「太夫さん泊り」にいふやうなことは流行りませんが、昔は相當幅を利かせたらしうございますね。猿田彦太夫、正直正太夫なきい御師は即ち當時の御師の墮落状態を曝露したものでせう。神宮を賣り物にして悪事を働く、國家の賣り物にして暴力を用ふる今も昔も變りませんな。

△……亦むつかしくなつて來ましたね。

○……イヤさうも柄になく慷慨しましたね。この「孫太夫内の場」もやはり當時の風俗描寫として、代々神樂を舞臺に見せるのも面白いですが、福岡貢もお紺の色模様も相當面白くかゝれてゐます。情人を伯母にして、貢が家へ引入れるところへ本物の伯母が来るところは、本家の近松の「長町女腹切」から作者が思ひついたのでせうが……僕はこの場だけでも獨立した一幕物として上演が見たいと思ひます。筋よりもむしろ福岡貢が役者の演ぎころの上に於て随分複雑多彩を極めてゐるのです。魁車級の人には適當した出し物でせう。第三幕は御存知の「油屋」です。こゝでは伊勢音頭を舞臺に上せて



その間に殺し場を點出したのが作者の働きです。そうして又物のすりかへなごも却々複雑で面白い趣向です。

△……只今の芝居でやるさあの及物のすりかへがそ 場で喜助が現はれて貢が持った刀が本物の青江下阪いふこが判つて悪人ごもは殺され損でめでたし々の喜劇に終つてゐますが、原作はモット複雑なんだそうですね。

○……さやうです、原作では「油屋」の次に「鳥羽の伯母の内」の場があつて、貢が夕立を冒して伯母に最後の暇をひにゆくそして自分の持つてゐる刀が飽までもすりかへられた贋物と思ひ切つてゐる。貢は折角の折紙をお紺の盡力によつて手に入れながら、肝腎の刀が手に入らぬものだから舊主の藤浪左膳や、伯母に責任を問はれて……一寸「忠臣蔵」六段目の勘平のやうな立場になつて、貢は切腹するのです。ミころが遅ればせに喜助が来て、貢が贋物と思ひ切つてゐる刀こそ本物の青江下阪だといふこが判つて、貢が切腹したこが犬死になるのです。こ、らは勘平をつくりです。

△……成程、福岡貢も、モウ少し落ちついて中味をよく調べればよかつたのですね。

○……まづたく早まつたのは勘平そのまゝです。ミころがその青江下阪たるや、貢の父祖三代にたつて、恰度父祖も死んだ日も五月の五日と月日も同じで、一種の運命悲劇に作者は取扱つたのです。こ、らは却々悲壯な西洋の運命悲劇を思

はせませます。大分長くなりました。これ位のミころで切揚げやうではありませんか。

△……有難うございました。「伊勢音頭戀寢刃」の新しい解釋として、多少ドグマの感がないではありませんが、謹んで傾聴いたしました。では失禮します。

### 伊勢音頭戀寢刃（あふむ石）

福岡 貢 鷹治 郎

お こん 福 助

貢 身不肖なれども福岡貢、女をだまして金を取らうか、何を馬鹿な事を、

お こん イ、エそうけつぱくには云はれますまい。

貢 そりや又なせに

お こん サイナ、お鹿さんミ譯もなし金からしやんせぬおまへが何で今夜お鹿さんをよばしやんした。

貢 それもアノ萬野奴が

お こん さいなア、今夜お鹿さんと呼ばしやんしたばっかりでお鹿さんミ譯もあり、無心状をやらしやんしたも皆おまへぢや〜



## 『鴈治郎の場合』

東京の諸劇評家の懐らざる態度と  
『私達の歌舞伎』の健全なる保存の爲に——

富田泰彦

私は今こゝに『鴈治郎の場合』を云つた變挺な題下に、劇評家としての態度や、歌舞伎劇に對する疑義までも云つた——謂はゞ一種名狀し難い不安な感情に支配されつゝある老名優の藝術價值に向つて、眞に公平なる立脚地にある天下の好劇家に厳正なる批判を求めつゝ、俱共研究して見たいのである。

勿論東京の或一部の劇評家——云ふよりも寧ろ劇感家（恠麼言葉は妥當ではないかも知れぬが）の如き郷土的偏見に阿諛して、大いに大阪人の同感を求めよう云ふのではない、實際鴈治郎氏に取つても松竹の白井社長に取つても迷惑になるかも知れない。しかし私は、敢えて『鴈治郎の場合』なるが故に云ふ負最の引倒しに終るやうな愚擧はしない積りである。飽迄『歌舞伎劇觀賞』の一研究資料とする意味に於て、『鴈治郎の場

合』なる問題が提示したのである。此點鴈治郎氏は勿論一般讀者諸君に對して誤解なきやう、豫め斷つて置く——。

◇ — ◇

私は事實の有無は、保證出来ないが、東京では鴈治郎を悪く云はねば一人前の劇評家になれぬのださうな——斯かる馬鹿氣きつた道聽塗説が、「或點までは本當かな」と思はする節のあるのは、全く我が歌舞伎劇の存續性を毀損するのみではなく、亦一面眞に尊敬すべき藝術家を遇するの道ではあるまいと思ふ。鴈治郎氏は、滞京二箇月、兎に角興行上には、相當の好成績を收めたことには、間違ひないが、その間彼の十八番物から慎重に、撰擇された謂はゞ極めつけの狂言たる『岡崎』の政右衛



語らんに座を構へ」なき、床に説明さす場合の多い竹本劇である以上は、而もそれを誇張すべき表現に依つて、型なるものが古來から成立してゐる以上は豈「鴈治郎の場合」にのみならんやと、一矢酬ひたくなる。

◇ — ◇

次に偏見家の總大將さも見做すべき三宅周太郎氏の「文藝春秋」誌上の評を紹介する。「政右衛門」の珍——ミ題して、袴わらじなしのばたしの政右衛門、そして十能、赤ん坊のかちん、幕切れの合掌、蓋し四つの珍型である。年代記ものである——ミ、例に依つて獨斷的嘲罵を加へてゐる。

鴈治郎は、いつも最初の出にかゝるさんつけて出るが、今度は何故に着けて出なかつたか、その理由は私も知らない。勿論今度のその舞臺々見ず、本人にも會つて居ないから——しかし、かゝるさんを着けようが着けまいが問題でないと思ふ。要するに舞臺上での形態の問題である。袴をつけなくとも政右衛門として立派に通つてゐればこそ、此點咎め立てをしたい批評は未だ一度も見ない。取りわけ草鞋を履くはかないに至つては、三宅氏の歌舞伎に對する憤念からして疑ひたくなる。

その草鞋を咎めた口の下から直ぐお谷への焚火に、十能を持つて行つた鴈治郎のリアリズムを笑つてゐるのは、評者としての矛盾擡着を自ら暴露したものであるまいか、要するに鴈治

郎の微瑕(是れをもし瑕とすれば)をのみ拾つて、「岡崎」の政右衛門にしての大局に目を注いでゐられないのは不思議であつた

◇ — ◇

畏友山上貞一氏が、「舞臺評論」誌上に、三宅氏が近著「演劇評話」中の「引窓」の十次兵衛に於ける鴈治郎、吉右衛門の演出論に基だしき偏頗な解釋のある點を、完膚なきまでに極めつけてゐる。

由來三宅氏の劇評は、一にも二にも吉右衛門中心論なのである。吉右衛門の場合には、斯うだつたから斯くあるべきだ云ふ論法なのである。——一例、吉右衛門の「岡崎」の道具は二重から直ぐ平舞臺だつた。「鴈治郎の場合」はこれでなかつたから不可ない云ふ理屈は何處にも立たない。

◇ — ◇

「盛綱」なきも、吉右衛門第一に、羽左衛門、鴈治郎云ふのが三宅氏の獨斷的順位である。「石切梶原」亦然り。

鴈治郎、羽左衛門、故又五郎はいづれも本文の「星合寺」の場合を使ふ。吉右衛門だけはいつも「鶴ヶ岡八幡宮」の場面になつてゐる。當時は神佛混合さか云ふ話であるだけに、いづれでも差支ない筈であるが、單に場面として見れば「鶴ヶ岡八幡宮」云ふ吉右衛門好みが「石切梶原」の芝居にふさ

はしい。

他の三人はいづれも花道から出る。が、鴈治郎だけは参詣をすませた心で舞臺の奥から出てくる。無論、花道から出るに限る。而も「然らば御免」三花道のあの白にはつきりとした抑揚を聞かせるのは吉右衛門一人である。これなき吉右衛門の石切梶原が調子一つでさへ、諸先輩を投げ倒してゐる例の一つである。(演劇評話)

私は敢へて、是れ等の言に對して、あけづらう勇氣も挫けて終つた。たゞ聰明なる三宅氏の心理を忖度するに苦しむと共に吉右衛門自身も、眞に歌舞伎道を解し居らば内心慥たるものがあらう。

国民新聞の合評會での島田青峯氏は斯く云ふ。

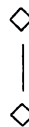
今度の鴈治郎は非常に世話味が勝つてゐた。その點に於て非常に人情味があつて面白いと思はないではないが、いはゆる型物としてのきまりが、きつぱりしない、私が寧ろその型物としての立派な型を面白いと思ふ方だ。その點に於て寧ろ東京役者の演じ方をさる。



中村吉藏氏は、島田氏の評に對して、合槌を打らながらも道

に、鴈治郎氏としての藝格を認めてゐる。

鴈治郎は島田君の説の如く世話味が勝ち過ぎて純然たる一個人情劇にまで引下けてしまつてゐる憾みがある。其處に鴈治郎の特色があるを辯護すれば辯護出来ないことはいないが、矢張り世話物役者の時代物である。これを見ても鴈治郎が大きな役者であると云ふ事が肯づける。



次に『週刊朝日』誌上の平山蘆江氏を紹介しよう。

最近に盛綱で當てた人に吉右衛門がゐる、羽左衛門のも評判がよかつた。そして鴈治郎はこの二人よりも先だつて盛綱を得意の出しものにしてゐる人である。羽左衛門の盛綱は清秀にして濕ほひ深く、吉右衛門のは氣骨ありて情厚く、鴈治郎のは率直にして涙多し、三人それ々に特長を持つてゐて、只觀る人の好ききらひによる味はひの相違があるだけで、たゞさへば羽左衛門のを綱の刺身に見立てるゝすれば、吉右衛門のは鯉のあらひ、鴈治郎のは鰻のかばやきでもあらうか、それは兎も角何れにしても、小四郎の生捕りから始めて一時間三十五分の長時間を、少しのたるみもなく、相當に場内觀衆の涙を絞らせたのはすばらしい。

斯うした苦勞人の批評もある。中村氏云ひ、平山氏云ひ「鴈治郎の場合」を最も善意に……イヤ全く此態度こそ眞の劇評

家として學ぶべきではあるまいか、實際私として云はんとする處も、畢竟各優各自の長所を認めるに云ふ點を高唱したいのだ其處に今後の『舊劇の見方』の目標を置きて、我が『歌舞伎劇の保存』に叛逆する人々の暴言には、一切耳を傾けないことにしたい。況して郷土的な偏見に囚はれたり、その色盲的な俳優最負に墮するやうなことは、誰しも避けたいと思ふ。



私は茲に強ち斯かる史的考察や、所謂芝居道の階級觀念に囚はれたる謬見をなす者ではないが、抑も『盛綱』が明治初頭東京劇壇に移された阪彦の演出や、その梅玉、歌右衛門の型を阪彦に傳へた鴎雀(鴎治郎父)や宗十郎の傳統者である鴎治郎は實に東京人が神の如く崇拜する圍十郎が、茶筌頭の鑑、姿に云ふ珍型盛綱に對して、彼が初御目見得の土産狂言として東京の檜舞臺に上したものであることを教へたい。——だから鴎治郎の盛綱は年代的考證に依つて羽左、吉右の兩優に對し勿論絶對的のものであるこの獨斷せない。猶白璧の微瑕として、今度も東京での非難の種となつた『注進受け』せぬ事、更に神經質に云へば「陣屋の隈々跡前見廻はし」で縁へ出て足踏みをする點なごは、改むるに如くはないが、さりとて濱村米藏氏の評中にあつた「足袋も白でなく草色、羽左の如く五分金」でなくとも軍扇で差支なく、鴎治郎は鴎治郎の獨特の『盛綱』を見せて呉

れれば可いのであり、其處に鴎治郎の『藝格』の閃めきを十二分に感受し、私達はそのユニークなものとしての貴さに満悦を吝まない者である。

要するに『鴎治郎の場合』であるに云ふ、狹量な一種の敵愾心に等しい——批評家として最も避けねばならない不純な意識に禍ひされつ、あるその例をかい抓んでここに擧げ、若し私は『鴎治郎の場合』ならば斯く一般好劇家の公平なる判斷に訴へんとする意味に於て、本誌今月號の責を塞ぐこととした。

若し八方美人宗と云はる、『鴎治郎の場合』に此一文が、忌避に觸れて没になることも、また悔ゆる處はない。(三、五、二八)

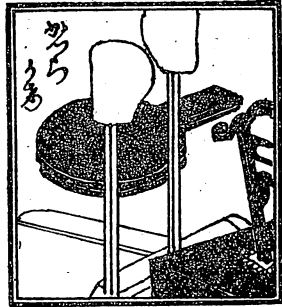
## 劇評募集

劇評は、松竹經營各座の名優と言はず新名題と言はず或ひは劍劇、新劇、新派のあらゆる俳優演劇を各自勝手に選んで公開状なり批評なり御自由に投稿して頂きたいのです。◎應募原稿は(廿字二十行以内毎輯十七日締切)大阪市南區久左衛門町(松竹合名社内)道頓堀編輯部

## 讀者文藝募集

- ◎短歌俳句を募集します。
- ◎用紙は必ず官製はがきに限りませう。
- (但し一葉のはがきに三句或は三首以上認めないこと)
- ◎原稿は出来るだけ判りよく奇麗に認めて下さい。
- ◎入選者には粗賃を進呈いたします。
- ◎原稿には必ず住所姓名を忘れては不可ません。
- ◎應募原稿は左記へお送り下さい。

大阪市南區久左衛門町(松竹合名社内) 道頓堀編輯部



# 盛綱の型

美田眞満雄

「立歸る佐々木盛綱」で成駒屋の盛綱は例の好みの衣装で、悠々と出で、出迎へた母に「禮し、左足から二重に上り、刀の大を抜き、袴を捌いて下手寄りに座し、右手で、軍扇を抜いて微妙に向ひ、「悴小三郎初陣の手始め」と小四郎を捕虜にした初陣の功名を褒め「此處へも盃、彼處へも盃」で右左の手を丸味加減に指し延べ「先アツ御喜び下され」と云ふと、早瀬や女達が小三郎の事を賞めそやすので、小四郎は細目の恥に堪まり兼ね「早首打つて下されいおう」と云ふ。折から、此處へ秀盛が来ると注進が出る。盛綱は軽く頷き、「母人には暫時この場を」と左手を上げて「禮するを、微妙が」とは云へ」と云ふので、遮ぎるやうに、「先アツ先アツ」と云ひ、引立

つて女達は上手奥に入る、跡につゞいて小四郎の這入るに目を配る、ト揚幕にて「秀盛お入り」で、其方を見詰ると、和田兵衛の出て成り、双方七三にて黙禮し、同時に盛綱は下手に居住まゐをし、秀盛も二重に上つて座し双方體を斜め向に一禮し、秀盛は軍扇を抜いて膝に立て、形を改め、「儲も此の度の合戦」云々で小四郎を取返しに來たと使者の口上を述べる。盛綱も同じく軍扇を右膝の上に突た儘「此れは存じの外の御ん事、自身に馬を向けられしは、珍説、珍一説、事可笑しう存する、ハハハハハハ」と大きく笑ひ、秀盛が「其の代りには此の和田兵衛の首を進上する」と云ふので、上目で笑ひ、少し正面に開き直つて「儲も、弟高綱は——俵に迷ふ」と

長く落し「未練な性根」で思入をし「あれしきの小童、如何やうとも」で和田を見「……と申したけれど……時政公より預りの囚人、わた、くしには計られず」と延ばし「ならば踏ん込み」で急に強くなまへ「盛綱其の座一寸も逃しはせぬぞ」と右手で大刀の反を返してかぐり、右肩を落して和田兵衛の方に氣込み「其の義はそなたの心任せ」で右手で持った刀を斜に、左の手で柄頭を押へ、とど石山の陣所に案内申させんと呼ぶ聲に、上手下手から軍兵が出て、秀盛に槍を突き付ける、とハテ仰山な案内者」で、盛綱は「其の儀、氣遣ひ召さるゝな——随分御酒を」と軍兵に目を配り「……心得たか」と軽く云ひ「案内太儀」で秀盛は花道で肩衣を正し、軍兵を追うて大脱みに入る。

盛綱はその形の儘和田兵衛を見送り、細目の小四郎の方にじいつと目を付け、軍扇を両手で握つた儘膝に突き立て、考へ込み「思案の扇からりと捨てて」でハツと心付いた様に軽く右手を放すと、軍扇をバタリと落とし、又障子内を見込み「母人其れにおはするか」と問ふと、母の聲がするので、下に突て居た

両手を上げ、體を半斜に、耳を上手寄りに開いて、頷いて笑ひ、體を正して微妙の出て来るのを迎へ、左足を進めて一禮する。淨「陣屋の隈々」で正面襖を右から左を開いて氣を配り、下手二重下も注意して、母の前に摺寄り兩手を突きながら「親の役目を子が勤むるは順なれど——申さぬ先から御誓言承り度し」で、微妙が「仔細は知らねど心得ました」と云ふ。盛綱は「ハッア」と一禮し「早速の御承知千萬、忝なし」と體を斜向に起して「最前の囚人「拙者の爲めには甥、母人の爲には」で微妙の顔を見「孫」と云ひ、微妙が「殺すなどの御説ならずや」を冠せて一步膝を進め「サササササ御説故尙以て殺さじやなりませぬ」で笛の合方になり「辯舌を以て人を懐くる北條殿」云々を云ひ、味方に付けんず謀鏡にかけて、現はれた一りで上顔に「御苦勞ながら母人——殺すを却つて情とは」と顰元を握り、母と顔を見合し、潤み顔になつて「敵は明なり味方は我子」「劍を合す血汐の瀧、修羅の巷の攻太鼓」と右膝傍の軍扇を右手にひねり氣味に振り上げて胸を叩き、左から右膝を進めて、前に摺り寄り、笑ひ顔に母と顔を見合して、手を丸く揉む調子に、顔

を稚な笑ひにしてジタ／＼と後ずさりして、「ハア」と一禮し、微妙が「可愛い孫なれども思ひ切つて切腹さして」で左の手を落し、「見せませう」と云ふので膝をボンと打ち「オオ出かじなされた」と喜び、微妙が「佐々木兄弟の苗字を汚がすか」盛綱「名を上るか」で本釣が入つて、母の「氣遣ひめきるな後れはせぬ」で、盛綱は「必ず氣強う遊ばせよ」と云ひながら、右から順に左膝を進め、小刀を渡して「言葉番うて」で顔を見合し、中央で左右に別れ、微妙は上手障子内に、盛綱は襖を手にかけ一枚締めて顔を斜上方向に身體を薄く見せ、母を窺ひ送つて襖を閉ぢる。此處で小四郎と微妙の愁歎場があつて「折からさつと山風」で、早瀬の「待つた〜、高綱のおかもじ、此りや何處へ」「知れた事、我子の小四郎取返す」「ならぬ〜」で一寸擲みがあり、とど揚幕の「時政公の御入り」で兩人揃みの見得があつて舞臺を廻す。面面、四ツ目の紋の襖に金屏風を立て廻し大欄間をおろした常足の二重、總て陣屋廣間の體、舞臺納まつて、盛綱は崩黄地「白抜きに、金糸縫腕斗目付の長上下の對服、時政公を迎へる腹にて上手から大を提げながら出で

下手に座し、刀を置いて頭を下げる。「一陽の春を待つ」で時政は家來を引き連れて本舞臺に來り、正面の二重上に居並ぶ。折から竹下孫八が「和田兵衛が隠し火矢を以て屋根を打抜き、御座の間の白旗を奪ひ取り立退いて候」と注進に來るのを、盛綱は正面で此れを聞いて居り、時政の「汝等が手に合ふべきか」で思入をし、時政が「誠の佐々木か、腰首か」弟の首、よも見損じはすまじ、兄盛綱に賞檢させよ」で、家來は首桶を舞臺正面に供へ盛綱を見て「賞檢召され」と云ふ。盛綱は黙しながら一禮し、上目で首桶を見込ふ「是非もなき對面や」で、腹で泣きながら左膝を少し立て、時政に又丁寧に一禮して、首桶に目を付けながら進み寄つて、仰向いて目ばかり、靜に又目を閉じて兩手を蓋にかけ、右膝傍に置き、容向に緋布でぐるんだ死首を手先で靜に退けると「引き開く首桶の二目とも見も解らず」の床があり、小四郎が「父様さぞ口惜しかる」と云ふのでぎつくり驚いてボンと首桶の蓋をすと「わしも跡から追付き」で切腹する、一同も驚き、盛綱も下手向に腹で泣き、小四郎に「何故の最後なるぞ——ヤレ、母人、御留めなされ、何故の切腹か、仔



細を云へ、仔細を云へ」と體を屈み加減に小四郎に問ふと「叔父様とも覺えませぬ——父様に逢ひたさ」で、盛綱は心で泣き「武士の自害で」頷き、時政の「猶豫はいかに、早質檢一で「ハッア」と辭儀をし、小四郎を些つと見、袴の袂を取つて首桶の前に壁り寄り、「御説意に疵口」は、最初包んである布を取つて、兩手で頭上から順に鼻筋へかけて手で撫ぜ、右手で懷紙を出して右手で左面から拭ひ左手で拭き替へて、拭つた紙を丸め、右手で左袂の袖口を押さへて左の袖に入れる。それから順に、首を右手に、自分の顔を斜に首の方へ投げて、目を閉らき、右膝を立て氣味にして、抱へた首を次第にジツと見詰め、軽く不審な顔付をし、愈々顔首だと思つて心でギツクリし、驚いた調子で正面で思入をする又其の目を軽く首の方へ返し、頬から順に目元まで笑ひを含ませ、腹で笑つた顔を小四郎に向け、又ギツクリと愁ひ顔に思入泣をする「矢疵に面體損じたなれど」で一吋句を切り「弟佐々木高綱が首に……相違ない」と早口に軽く「いさゝか相違御座なく候」で左肩越しに時政の方に向け、目をつぶつて右向に顔を背け、手早く顔を時政の方に供へジタ

と下手に直り、懷紙を右膝傍にボンと置いて一禮する。時政は此れを見て「枕を安く寢るは盛綱が働き、我着替の鑑一領」云々で、一同と共に立ち歸るを上目で見、涙を拭いて、時政が「返すくも過分なるぞよ」と云ふので、丁寧に會釋し、其儘ジツと見送つて、稍氣を替へ、盛綱は小刀をさし、大刀を左手に持つて又附際で揚幕を見込み、其の儘丸く左向に小四郎を眺め、其の目を下手に移すと、下手奥の襖に篝火が居るので、目で知らして招き入れ「計略の贖首」云々「不忠と知つて大將を欺きしは弟への志——山奥に姿を隠し、不意に討たんず謀」と氣を入れ「贖首を見て父上よ」とを軽く「大地を見抜く」と大きくはづませ「眼力をくرامせしは教へも教へたり」まで早く云ひ「覺えも覺えたり」を時代廻し「何んと大死させられよう」で泣き落し「甥が忠義に比べれば、伯父が此のはいら」で軍扇の裏の方で左から右へと切腹の眞似をし「其方の命は京鎌倉の運定め……母人褒めておやりなされ」と字切り臺詞の様にかにかまへ、篝火や早瀬にも「褒めてやれ、褒めておやりなされ……褒め、褒め、ほほ、

め」と盛綱も潤み聲になつて「出かしたな」と兩手を上げて、床に合して、後すり氣味にさし招き「實檢を仕損じたる鎌倉への申訳、母人去らば」で中膝に首を少し垂れて、切腹せんと刀に手をかけると、二重奥から金屏風が取れて、和田兵衛が「敵を見かけて自害とは後れたるか」との聲に「……歸らば其儘かへさんに」云々で云つて、下手に袴へて足を割り、大刀を少し斜めに向けて、用意する。秀盛が「南蠻流の懷鐵砲受けて見よ」で、左に持つた刀を丸く、顔の前から順に、和田兵衛の方へ除ける調子で身構へすると、秀盛が意外にも鐵櫃を打つので、下手を見返ると忍びの棒谷が彈丸に中つて苦しんで靖鈴返りを打つ顔を見て、倍はと頷いた心を見せ「見よや、如何に盛綱」云々から「表は京方」「鎌倉方」で、盛綱は花道を見込み、附際に「ヤア、盛綱が陣中にて、味方の武士を打つた曲者、返せ」と上手向に秀盛と顔を合して、床の「我からさきの夜の雨、父には一目栗津の嵐」で、盛綱は中央に左手をもろみに指し上げて、小四郎の死骸の方へ、斜に首を落し、和田兵衛は下手で白旗を搦ませ、大きく睨んだ見得で幕になる。(完)



へには血脈二百を算したとあつて東愛子の心配一方ならず、毎日兵頭醫院へ行つて腕をまくり、血脈をはかつてもらはぬと日が暮れぬ。

巡業中は大阪まで電話かけて診察うける『モシ、』、妾、東愛子です、名古屋へ来てゐます、唯今妾の血脈百二十位でございませうか』なんて醫者を困らす。

いんまに、邊鄙の芝居へ行つたら往復へガキで診察うける。

△ 醫者と葉書といへば、ラヂオは津々浦々まで普及して、岡、大森、保、九富といふ郡部モダン、三球を備えつけて妻子眷屬ラツバの前へ集り、眉毛ひとつ動かさなで聴耳立てる。

アナウンサーの説明で一應は判かるものゝ、隣に馴染がないから穿き違えることもある。

……、強い、つよい、強はものぢや……お腹が空いても、ひもじゆうない……『あれが義直の政岡で、これは巖笑の千松……』と、間違ひだらけの役割で耳の正月。

近所の人、眼を丸うして『役者は役者だけあつて、文久生れの人でさへ、あんな稚い聲が出る』

△ 我輩門人我久之助の女形は、顔形から聲までが、新町の姉、大西席の秀壽と瓜二つの姉、芝居がはちまると、弟のこと

が苦になつて足が地につかぬ。『我久さん、何んぼ芝居かて、藝妓になつたら、左の棲を斯ういふ工合に持たんとあかへんし』

抱つこすれば負んぶ『衿は斯う折つても構やへんのんか』姉弟相よりヒソ／＼話の同胞の幸福比するに物無しと合部屋の若い役者から羨望の的。

この若手、實の姉より他人の妹がほしくせに。

△ 津太夫、古靱はじめ、文樂の總勢百何十人が大和の壺坂へ大入のお禮まわり。駒太夫を澤市に勾欄の文五郎をお里に變装させて土佐町を練る趣向は中止、せめて

詠歌のひとつもあげたいと竹本相生大夫先陣を承はる。

『岩をたて、水をたゝえて壺さかの……』吹き流しの鯉のやうな口を開けてやつたが淨瑠璃そのまゝなので間の延びること夥しい。

△ 西國巡禮の老女その節廻はしを難じ『あ悠長では谷汲まで日に暮れる。』相生、赤眼を釣りあげ『在所の見物は柄が悪い』

△ 延若に、舖田といふ床山がついてゐる、上から三十枚目位に札がかゝつた山村派の踊り手。

一ばあきこしめしたら、劍舞の詩吟で紀伊の國を舞ひ、阿呆陀羅經の木魚の音を合方として、因州因幡の鳥取でと踊るなんか到底、否、絶対に他の追従をゆるさぬものがある。

このほど、隣りの蓄音器に『この浦船に帆をあげて』の謡がかゝつたら、汚い手拭で煩冠り謡にあはして『権兵衛が種時きや烏がほぢくる……ボンペラ／＼』

# 喜劇新人座奮戦録

内山惣十郎

喜劇新人座も、出陣して一ヶ月を経た——狂言にして三の替り、僅か出産して一十月にしては豫想外の反響があつた。とに角毎日大入り、到所のカフェーで喜劇新人座は話題にのぼつてゐる。それは、第一回第三回とに、カフェーの女給が出演したからだ、そればかりによつてではないと思ふ。喜劇新人座の芝居が、花柳界の人氣を目標とせづ、カフェーに集る人々の階級を目標として脚本を選んでゐる點、又演出をもそれ等の階級の人々にびつたり來る様に、いはゆる從來の芝居が、花柳界の人々に受ける様に演じてゐたのに反して、近代的——進歩的である所以であらうと思ふ。

ジャズバンドのお囃子——踊りにダンス——新流行唄——等々——近代人の趣味なり感能に一致してゐるが故であると思ふ。此の、從來の型を破つた新演出は、確かに近代人の嗜好に適して、出産僅か一ヶ月の喜劇新人座が、かくも到所に於て噂の的となる最大原因であると信じてゐる。

だが、それにしても、此の一十月の新人座一黨の苦戦奮闘は、全く濟南出征の兵士以上の惡戦苦闘であつた。先づ第一はその脚本である。何しろ十日間毎に五つづゝの新作物を上演しなければならぬことだ。しかも、それが、一つ一つ、違つた色彩のもの、例へば一番目は華かな若々しい氣持を持つた現代劇二番目は舊喜劇で、三番目は深刻な内容ある現代喜劇、四番目は舊喜劇でも二番目物とは異つた味の物、五番目は最もモダンの氣分を持つた素晴らしく明るいジャズやダンスや歌の入つた現代喜劇——といふ様な譯であるがさて此の色彩の各々違つた五つの脚本を十日毎に揃える苦心は一方でない。

第一喜劇を書く作家の少ない故になか／＼脚本が集り難い。その集り難い喜劇脚本の中から、一つ／＼特長あるものを選んで列べようとするのであるから、五つの脚本を選ぶにはどうしても十冊以上の脚本が必要である。それに時間の關係、配役の關係——等々を考慮すると、とても苦心である。が、兎も角も

此の一十月は此の難關を突破して來た。そればかりではない、既に六の替り迄の脚本の豫定はちゃんといつてゐるのだから、とても偉いものである、と一寸威張らして貰ふ。

それからの苦心は稽古である。稽古の順序は毎狂言とも左の様に決定してある。

初日 休み(皆んな疲れてゐるので)

二日目 本讀み

三日目 讀合せ、一、二、三番目

四日目 讀合せ、四、五番目

五日目 一番目立稽古(鳴物入り)

六日目 二番目狂言 (同)

七日目 三番目狂言 (同)

八日目 四番目狂言 (同)

九日目 五番目狂言 (同)

樂日 歌稽古、ダンス、踊り振付

以上の通りでも分る様に、初日以外は一日として稽古のない日は無い。しかも、一つ狂言は一度立稽古したら二度とはしない。——

いやする時がないのだ。そしてそれも皆んな閉場後十一時から二時迄。だから俳優も演出者も慢性睡眠不足に襲はれてゐる。歌やダンスや踊りなどは、樂日に一二時間の振付で直ぐ翌日初日といふような、實に大膽極まる急造稽古なんだから振付の方も教はる方も、と

ても想像のつかない程の努力苦心である。恐らく何處へ行つても、一二時間の振付で（しかも踊りやダンスの下地のない連中）直ぐ舞臺にかけるなんて、こんな大膽極まる所はあるまい。だが、それで初日は立派に皆んな踊るのだから、感心々々と褒めてやつて欲しい。

とに角、連日連夜、一日中舞臺で奮闘した連中が、又二時迄火の出る様な猛稽古をするのだから、全く文字通りの寝食を忘れての奮闘努力で、その努力と苦心あればこそ、喜劇新人座は面白い。熱心だ。若さに瀟灑としてゐる——といふ讚美を受けるのも當然だと思ふ。

然し乍ら、僕達は、その讚美に對して慢心はしない。自惚れもしない、小さな拍手で満足する我々ではない。あらゆる芝居を征服してみせる！社會の人氣を悉く一身に吸集してみせる！といふとてつもない野心を持つてゐる。それには努力だ。奮闘だ！だから今後、尙、此の苦戦奮闘は續けてゆく——いや今日以上の悪戦苦闘は一同も充分覺悟してゐる。

慢性睡眠不足——勞動過度の慢性疲労——身も心もヘト／＼になつてゐる。だが皆んなの戦闘意志は少しも減退してはいない。最後

の榮冠を戴く迄、我々のファイティング、スプリットは燃えてゐる。

勝利はベストによつてのみ得く——といふ言葉を、我れ等は確く信じ、そしてそれに向つて邁進してゐる。僕達は、此の努力と奮闘の種が、必らづや近き日に、美しい花となり實となつて收穫の時のあることを信じて疑はない。

諸君よ！どうか、我々の此の雄々しい武者振りに、拍手と聲援を與へ給え！！

### 辨天座の人形淨瑠璃

辨天座六月興行は二ヶ月振りに巡業展りの文樂人形淨瑠璃が歸演、狂言は前「假名手本忠臣藏」大序より九段目までの通しに切「戀娘昔八丈」鈴ヶ森の段を上場する「忠臣藏」の通しは大正十四年三月御靈文樂座時代に上場素晴らしい人氣を博した、この時は仇討の段までをずつと通して見せたが今度は切に「鈴ヶ森」を出すので忠臣藏は九段目までである、辨天座では去年四月興行に七段目一力の段までを上場非常に好評を取つたものである、尙切「戀娘昔八丈」は大正十四年五月同じく御靈文樂座で上場この度は四年振りの道頓堀初演である。因に此の度の大夫割は

- 前「假名手本忠臣藏」(大序より九段目まで)
- 「大序鶴ヶ岡兜改めの段」(淀路太夫、稻丸)
- 「戀歌の段」(源福太夫、友作) 桃井郎の段
- 口(越名太夫、綱右衛門、猿太郎、友衛門)
- 清二郎) 奥(つばめ太夫、勝市) 「殿中刃傷の段」切(大隅太夫、道八) 裏門の段(相生太夫、和泉太夫、歌助、友之助、友造、八助、友平、友若) 扇ヶ谷の段」切(古鞆太夫、清六) 「霞ヶ關の段」(綾太夫、廣太郎、猿二郎) 「山崎街道の段」口(鏡太夫、團六) 「二玉の段」奥(文字太夫、勝平) 胡弓、福太郎、小庄、友駒) 「早野勘平住家の段」中(駒太夫、戈治) 切(土佐太夫、吉兵衛) 祇園一力の段」由良之助(古鞆太夫) 力彌(つばめ太夫) 重太郎(和泉太夫) 喜太八(相生太夫) 彌五郎(富太夫) 仲居、播路太夫) おかる(鏡太夫) 仲居(綾太夫、仲居(辰太夫) 亭主(源路太夫) 丸太夫(貴鳳太夫) 伴内(鏡太夫) 平右衛門(大隅太夫) 系(新左衛門、道八) 「道行戀の初旅」(源太夫、島太夫、越名太夫、源路太夫、千駒太夫、長子太夫、仙糸、芳之助、淺造、寛市、可太郎、吉左) 「山科閑居の段」中(鏡太夫、新左衛門) 切(津太夫、友次郎) 切「戀娘昔八丈」鈴ヶ森の段」中(源路太夫、清二郎) 切(朝太夫、猿糸)



# 芝居短歌

山上貞一選

五月の道頓堀

生きの身の生きましあらむこはらからが沈む御船  
 になほあらそひつ 雄 三  
 人は武士花は櫻の散りぎわをあたけがせし平の  
 宗盛 米 坊  
 槿花一朝榮華の夢のなほ醒めで人のいまはのいこ  
 に見ぐるし 米 坊  
 おみなわれ戀を得たりまほゝえめるその美しき櫻  
 兒の頬 徳 子  
 勝間田の池の夜更けに友を得て喜びいさむ天平の  
 おさ 定 男  
 國分寺の開眼供養に刺されける玄昉丈のむらさき  
 の衣 かほる  
 一人は戀を獲たり一人は榮達を得て笑みて別れり  
 二 郎  
 人の性は善にこそあれ義にいさむいがみの權太の  
 かなしき最後よ 米 坊  
 兄妹が戀ま妻子を犠牲にせし忠ま涙の釣瓶すしか  
 な 銀 杏  
 前垂れの赤き紐にもひみすじの戀こそ匂へりかな  
 しきお里 勝 菊

いくそたび眼になじみたる河内家の權太にあれき  
 なみだごめなし 克 巳  
 若葉かな六代かなやさいだきよる維盛卿の前髪の  
 あこ 春 子  
 百薬の長に酔ひ痴け戀巴いこあぶなけにおざりけ  
 るかな 春 子  
 豊國の繪をぬけいでし梅曆いろをきそひてあくな  
 き人々 春 宵  
 深川の夜雨にほぐる戀もえ辰巳こさばのすみて  
 ひゞけり 銀 杏  
 みされつゝ右に遠去りき舟の上なる君まわれ  
 かな 定 男  
 ふきあゆるすだれのかげにさゝやける桃割の子に  
 似たる君かな 正 直  
 天紅の文のもつれになやみけるあなねたましの丹  
 二郎こそ 鶴 廣  
 ぬつこ出でにつこみ笑みけり大休の人なつかしき  
 顔のよろしき 彦 次 郎  
 もろもろの化生は闇に浮かれけり金平ならでは生  
 命堪えなむ 時 造

## 次號課題 『六月の道頓堀』

(狂言にても俳優にてもよろし、又新派舊派の別なく隨意隨感のもの)

# 劇

# 評

編輯部選

## 五月中座興行感

### 中在家漁人

延若、魁車、我童等が、皁月の中座に出演してゐるのは、痛快な事である。元來、中座は一流俳優、浪花座は少し落ちた俳優と云ふ風な、使ひ分けがあるなら、五郎などの喜劇俳優が中座に出張つてゐて、福助や、魁車や延若などが、浪花座に出演してゐるとしたら變な現象と云はねばならぬ。好劇家は忿怒さへ感ずるかも知れない。

常々感じてゐることだが、大阪人はスターを養成せぬ。劇評家乃至文藝雜誌類の少い爲でもあらうが、東京であれば、何でもなく人氣を贏ち得る人でも、大阪では仲々、人氣者になれぬ。

こんなことを云へば、多くの人は一笑に附するかも知れぬが、それならば其人は、唯だ、人の批評ばかりを聞いて、自ら公平に觀察した人でないと思つて過言でない。即ち、菊五郎や吉右衛門や左團次と云へば、日本の名優

とも思はるゝか知れぬが、角力をとらすれば、大阪の我童、壽三郎、右團次位とよい勝負だと思ふ。若し見劣りがすると云ふならば宣傳の機關の完備、不備の相違のみと信ずる又、羽左衛門、梅幸、幸四郎に對しては、大阪の福助、魁車、延若がある。此の比較は現在では確かに、大阪方の旗色がよいと信ずるが如何。然るに、福助一座、魁車一座の未だ組織されぬのは寧ろ怪異なことである。

鴈治郎は我國寶である。現今鴈治郎に最適すべき俳優は東西を通じてない。仁左は老い歌右、中車は其敵に非ず。

斯く觀すれば、大阪方が東京方に比して優勢のやうに思はるゝに、宣傳人氣は妙なもの名優鴈治郎をさへ、菊、吉、左、乃至羽左あたりと同格位に並べやうとしてゐる。延若邊を除いた大阪俳優は噓にも上されないのは、無禮も甚だしい。

福助一座、魁車一座、それが變に閉へて、菊五郎一座、左團次一座が不思議でないなら鴈治郎より百々之助を羨いと思つてる輩と同

じ錯誤と云はねばならぬ。長三郎を知らずして長二郎を知れる連中と好一對なのだ。

吉右衛門や猿之助より、壽三郎、橘三郎あたりの方が良い位に思ふがね、どうして大阪人はスターを養成し得ないのだらう。實力家は東京に出て名を賣り、大阪へ歸つて来て湯仰さるゝと云ふ現象は面白くない。

この意味で、五月中座を應援せざるを得ぬ。どしどし斯うした興行をやつて貰ひたいものだ。

重ねて云ふ。鴈治郎は東西名優の上位に位置する我國の名優だ。羽左、梅幸、幸四郎などゝ福助、魁車、延若とを比して寧ろ大阪方が優れる感がある。菊、吉、左一座があるならば、大阪でも、我童、壽三郎、右團次一座があつて何等遜色なしと斷ずる。まア冷静に比較して見て呉れ。名ばかりに——宣傳乃至批評家の作つた名ばかりに迷はされずに、白紙になつて彼等一座を何度か見て見るが良い。併し俳優の數に於ては大阪方に確かに遜色がある。右の如く考へて來て、借而その次はと云ふと東京の方が勝れてゐる。巨頭連には負けないが次に續く人氣者に乏しい。これも何々一座の少い爲であらうが、秀綱と、松萬だけは大阪俳優に奪取したいものだ。



兎に角、鷹治郎と云ふ巨星、否太陽に、隠れてゐた大阪俳優の一流行が一座してその實力を發揮する機運が作られたことは喜ぶべき現象と推賞して擱筆する。

尙ほ昨年七月歌舞伎座で上演された梅曆より、此の度の中座の方が優れてゐる。梅幸、宗十郎に依つて演ぜられた仇吉、米八は、寧ろ、否到底、我輩、魁車の敵ではあるまい。半次郎も、訥子より勿論長三郎の物だ。丹次郎は、延若と羽左では延若損な立場にあるがその器用さを感心させられるだけで、引けを取るとは云はさない。寧ろ、延若の方が軽い味を出すことゝ期待さるゝ。唯だ壽三郎と中車の藤兵衛だが、これとて壽三郎の方が苦いだけ、キビ／＼してゐらあ。さう云へば徳三郎と源之助の政次だつて同じこと、若いだけ此方の徳だ。霞仙と家橘のお蝶と來れば、勿論遠慮なく霞仙に軍配を上げる。

### 歌舞伎座五月興行感想

小泉 阿南

一番目 平清盛 二幕 中宮徳子の御出産  
當時に於ける清盛の心理描寫を主題とした松居松翁氏の新作で清盛物專賣の中車には荷が

輕る過ぎる位容易な役である。東京福助の佛御前は色氣も品も十分、秀調の巫子は歌右衛門張りで相當に妖氣を出して居る。大阪福助の宗盛は立派に演つて居るが同化し得ない恨みがある。

中幕 近江源氏先陣館 一幕 型の華麗は羽左衛門に劣り、深刻なる腹藝は吉右衛門に及ばねど鷹治郎の盛綱は情の人として完歸の妙技を示して居る。中車の微妙及び正太郎の小四郎は當代無比。福助の篝火、幸四郎の秀盛、友右衛門の時政は役其の仁に適し、千代之助の藤太は儲け役、吉三郎の早瀬は型は良いが口の動きが見苦しい。

所作事 當世舞 一幕 岡鬼太郎氏が古風な所作舞臺を借りて現代の世相を諷刺せられし新舞踊劇で幸四郎の振附けには可成り新味があるが幕切れの五色の絹を使つた振りには河合ダンスを見る様で過ぎたるは及ばざるにかずの感あり。

二番目 榎久末松山 二幕 玩辭樓十二曲の内でも筋は随分甘いが技巧の人鷹治郎の眞面目を味へる面白い劇である。酒亂になつてから福助の松山大夫を見上げるポーズに何とも言へない妙味がある。中車の嘉右衛門は實直な番頭として場を引き締め、遊女のおよしは伴の犠牲になる慈愛深き母として申分無く

東京福助のおさん、幸四郎の主膳等も適材適所、然し初演以來當り役と言ふ箱登羅の柴田には感心しない。

大切 上の巻、浦島 幸四郎の浦島太郎は下の巻、端午前半の若者としての派手な踊りと後半の白髪翁とを巧みに仕分けて居り、吉三郎を大將とした澤山の子役の五月人形の所作は潑瀾として愉快である。(五、十八)

### 平家の人々と天文劇

ち ど り

「若い人々」は今の所、新らし物好みで大てい活動や澤正黨で見に行かないし(此人々には別に説あり、いづれ其内……)

「年寄つた人々」はてんから解らないと云ふし、それに兎角見物席のくらがり場が多いので大困りだし。

「中年の人々」は役者に藝をさみず、下座も使はず、あの生悟りの生々しいせりふをしかも長々としゃべられるので陰氣臭くてうんざりするし。

とすると此芝居一體全體たれに見せる積りだ役者の藝を尊重する、お芝居の分る、お囃子の解る作者(敢へて脚本家とは言はない)が欲しいネ(それがあるまで新しがない事)。

# 性的に見たる「春色梅曆」

(中座五月興行  
關西大歌舞伎上演)

伊藤 晴 雨

同じ千本櫻のすしやを出しても大阪のいがみの權太ミ江戸のそれミは扮装も解釋も異なる如く江戸で出来た世話物の脚本を大阪で大阪俳優が演じる場合ミ。これミ正反對に江戸に於る同上の場合ミは。脚本の解釋は同じであつても表面的には格段の相異が出来る。舞臺装置然り、扮装また然り。

假令ば同じ藝妓屋の縁起棚でも東西の區別が神前の提灯一つにもハッキリ現れて来る。

過去の事は老人臭いから云はず現在飛行郵便のある世の中にも拘らず芝居の方は小道具の火鉢一つにも東西の別があるのは面白い。

一事が萬事で。物を喰ふ爲に出来て居るかと思はれる大阪の芝居の看客席ミ、マゴくすれば叱られ相に見ゆる東京劇場のそれミはよしや天地月階程の差別こそなけれ。壽司ミ天麩羅位の區別はある。僕は元來悪口ミ皮肉を商買にして居る譯ではないが區役所の塵掃除の人足か又はそばやの出前持見た様な形中の仕事師も少しは交る東京方の「め組の喧嘩」ミ衆童揚りが仲仕になつた様な大阪方のめ組の喧嘩の芝居ミは大變な開きが有り相で實はぎつちにも軍配を擧げ兼ね所詮は地方色の結晶ミ時代の罪ミやら申すものであらうミ逃げを張る奴は甚だ賢明なり。

× ×

春色辰巳の園、大阪生へ抜きの俳優ミ舞臺裝置家がさういふ風に之れをこなすか興味の中心點で書き卸しの歌舞伎座ミ一々比較するは野暮の骨頂、なれきも云はざれば腹ふくるミ手習双紙にあらぬ原稿用紙。性から見たる女ミ男やつさもつさの見た所勝負、さア片つ端しから出ませへ。

## 序幕 向島三圍堤同川中

舞臺一面色の褪せた三枚續きの錦繪の感じ至極よろしいつて此錦繪決して糊ざらしてはない、正面下手寄りの吾妻橋を除けば跡は上出来なれき屋根舟の障子は餘りに粗末な骨組、こんな舟は江戸には一艘もない、三圍の大鳥居に額がないのは同情しておく、此場は東京の時より自然でよし、これは大阪の芝居の構造が大變全躰を助けて居る、此場へ出る丹治郎は性の疲れがアリくミ現はれ女三人の中ではお蝶が一番喰へ頃な女性に見え米

八三仇吉は二三日丹治郎と御無沙汰らしく、「い、男だねへ」の幕切れは見物に聞こるよがしの様にて色氣がなし。

## 二幕目 深川尾花屋入口

### 同奥座敷

舞臺の全體は廣重や國貞でなく、明治初期の清親らしく江戸よりはチト明治初年に近し、一番の出来は上下の張物の堀立ち木、奥座敷は美しい雪景色乍ら出来合の金屏風襖は深川らしくないが全體の出来榮へは此場へ来てグツツ見直したの舞臺装置も俳優も残らず大出来々々々なり、仇吉も米八も性問題を露骨にせず立派に見物に得心させたのは流石に東京は違つた味があつた。

## 三幕目 丹次郎の佗住居

舞臺の建築全部大阪風なれば文句なし愚圖々々云ふ方が野暮なり、但し下手の油障子はさう割引して見ても困る、マサカ

町内の寄合茶屋から外して来たものではあるまい、これ丈けはチト頂き兼ねるが此場で一番性慾味タツブリなのは藝妓の政次で殊によつたら丹次郎は一番此政次が好きだろうと思はせる程妙に色氣がある。其代り米八の方がツンケンする計りで色氣が薄いから差引き勘定はついて居る、次手乍ら此場へ出る鷹童の讀賣はチト悪聲にて六段目の狸角の親類らしく小道具の瓦版も誇大に過ぎた。今少し瓦版らしく出来ぬものか。

## 四幕目 深川松本離座敷

此場へ来て舞臺装置は國貞の芳瀧邊りに急轉直下するがこれは跡の幕を引つ立たせる手段として、方法だ、それが意識してでもし無くてもきつちでもい、所詮は結果の問題だなき、妙に力む奴さ……此場の女性の内では一番やつぱりお蝶が色氣がある。此お蝶段末の幕へ行く程年が若くなつて来てそれで居乍ら丹次郎に

關係が度々あつたように見へた。

## 大詰 洲崎堤から仲町裏

此二場の舞臺装置、一寸見れば複製の名所圖繪の様だがよくみるゴオフ、セツトの複製品だ、仲町裏の場は江戸でなく水郷潮來さいつた風だ、而して正面に並んだ藝妓屋(?)は素敵に棟の高い家斗りで江戸時代こんな建築をすれば町内から火事の展望を妨げるさいつて苦情が出たものである。それから此劇全體に深川のシムボルさも云ふべき材木置場が背景に一個所もないのは損だ……こは云ふもの、これは望蜀の何さやらである。此場の仇吉米八は満たされざる恨みからヒステリカルになつてムシヤクシヤ腹を「藝妓の意地」さといふ表面的な御座なりの術語で胡摩かして掴み合ひの大喧嘩實際は裏長屋の唄ア左衛門の喧嘩同様つてツマラヌ心裡状態、お蝶が顔を出さぬは作者の働き乍ら、梅麿の原作を讀まぬ

見物には物足りぬ事であらう。

一體此梅曆さいふもの原作で讀んでも甚だしく淫蕩的なもので無く一寸した三面記事がゴシップの様なもので丹次郎は極早熟な男と見てノベツ幕無しに仇米蝶と三人の名垂の女を弄んで居たさした處で半年か一年しか正味の樂しきは出來ない様に性的的の約束が出來て居ると思ふ「道頓堀」を性慾のパンフレットと間違へて居るのでは無いが人間の平均娛樂時間は一生活を通じて平均延時間二百四十時間三十二分何秒さいふ極少ない時間であるから、人生の最大愉快な青春の泉はブツ通しに發散すれば十日ミチツト斗り、これを知らずに無駄に使へばソレ……ナ

郎より地でいつた丹次郎の方が役者が一枚上らしい、それでまあ大詰の結果を延長して想像して見るに一番馬鹿を見たのはお蝶だろうさいふのは丹次郎に一シヨになつて木場の藤兵衛が媒人の重荷を下した時分には丹次郎はソレ例の藥の御厄介になる様になつて來るので、最後には飯櫃を抱へて斷食をして居る様な馬鹿な目に遇ふか乃至は丹次郎がウンミ世帯臭くなつて平々凡々詰らぬおやちになるかきつちか一つの内になる事受合で其時分には米八は年下の極柔和な男を見附けて船宿の株でも買つてノンキに暮して居るだらう、又仇吉はこれも丹治郎を張合つて見たもの、馬鹿々々しい氣が附けばサラリと宗旨替へをして二軒茶屋へ時々來る某藩のお留守居役を丸め込み後には大丸番の奥様になるだらうと想像される一體舞臺に現はれる女性、それが大抵「男の心裡」から微細な解剖はされて居るが「女の心裡」からは少しも解剖されて居

ない、表面的に目度し／＼になつては居るが性の問題に觸れては居らぬ、其多くは作者の二一天作から割り出された女性の描寫であるから俗に云ふ相手變れご主替らず、お家の重寶鯉魚の一軸同様のつも千篇一律なり。

辰巳の園の仲で一番のもうけ役は何といつても政次だろう此奴いゝ加減な與太を飛ばせ乍ら蔭で散々丹次郎をシャブリ幕切れの「馬鹿やあい」を其儘やつて居たに違ひない。忠臣藏偏痴氣論の伴内同様園中第一の人物なりなき、無駄を云ふ。

其他の有象無象引つくるめて五人の性慾の機性になつて居る處御苦勞千萬オット忘れた小道具の茶入れも本筋の上からは有つても無くてもすむ下らぬ名器。此奴も序でに御苦勞々々々。

(昭和三年五月十五日 假寓いも仙にて)

# 南座の吉右衛門を観て

(京都南座五月興行中村  
吉右衛門大一座上演)

豊島扇三郎

盛んは喧がれてゐる、播摩屋の「石切」さうも僕は事件の性質上、八幡社正面前の塲面が氣に食はん。併かも此度の背景

きたら、二階から見ると左程にないが平塲で見ると、石壇の上の地面のみ、よく現はれて、平舞臺の平面の見える程度に比べるに、社殿が恐しい急傾斜にある様で、幕の開いた時、お宮がすり下つて来るか、たまけて仕舞つた。餘程下手な繪かきの大道具だつた。

扱、吉右衛門の梶原、參詣せぬのは、武士として、往く道で、道草を食つて仕舞つて、忘れて、——波野贊氣に言はず、體がけがれたから——歸つて仕舞ふ様では、不らち千萬な奴ツ、そして萬事

動き方が、吾人には、矢張り、成駒屋が面白い。關西人にはね……

次に「法界坊」大體吉右衛門の柄でない。破れ傘に燈籠を下けて、泥濘にすりつゝ櫻姫を探ぐつて行く清立をやる優だ、あんな複雑な性格の法界坊をやる顔でない。

しかし。あれだけよくふざけて呉れた事は、欣しい。馬鹿けてるさいふ人があるかも知れんが、新しい人なら歌舞伎の變態性ナントか、彼ンミか言ふところ、時によつては、思ひ切り、ふざけて良い劇だ、只一つ、大詰の立廻りに土手の上の甚三ミ傘をかざしての見得を裏向きに演つてるのは、畫面の見得てふこゝを無

視した演り方だ。

大正十年頃、京都明治座で、扇雀が、法界坊をやつた時土塲を半廻しにして幽靈を上手の井戸から出す。彼の時の舞臺は、葦藏の甚三ミ相待つて、良い塲面だつた。光線もよかつた。それに、序幕の近江屋店先で、床几共に引くり返る時向ふの端の糞盆がうまく、顔へフツかつて。火入の灰が顔にかゝる等の手際、扇雀の法界坊、存外良かつた。なつかしいあの頃を思ひ出す……ミ、エライ處へ話が行つた。

此度も、東京式に上下の掲幕出人を作つてあるが、吾人は嫌ひく。なんであんなものがあるのだ。

「志賀山三番」連獅子と共に、結構なもの、三津五郎の四肢の充分な伸縮に驚嘆せざるを得ん。時藏の熱演、結局、此一座熱で持つてる。熱に引かれて見に行く。

九藏が、大向ふから、三好屋シツカリ

せい——なんて言はれるのは、さうした事だ。

さり乍ら其の爲、時によつて、呼吸づまる様に思ふ程堅くなる時がある。盛綱でも、「聞き分けてたべ母人……」の處等見てるに、自然つりこまれて、思はず、拳を握り、膝が進む。「梶原でも刀を見て、「ウムー天晴れ名作ツ——」の時なご身がしまる様だ。窮屈な藝だ。も一つ、成駒屋の芝居の様に、ヤンワリした零圍氣に浸して呉れない限みがある、吾等純關西人には……なんほ或る種の學者（芝居の）が、藝術騒ぎしても、所せん、民衆娛樂的に育つた院本劇、歌舞伎劇だもの、何さもいへん、其土地の者の氣分に合ふた演り方で無けにや、眞に面白くない。歌舞伎は必ず、氣樂に娛しみな氣分に包む様に演じねば歌舞伎は益々減びて仕舞ふだらうと思ふ。

高原さん、そう思ひませんか。

歌舞伎に現代的なセンサクは無用々々

——十六日、観劇を終へて——

# 浪人の群

（浪花座五月興行）  
（新國劇上演）

京極利行

上手、潜り戸の上手にみつつけてある貧乏徳利、あれが如何にも男やもめばかりの假世帯らしい味を出して居る。かなり頭の細かく働く人の舞臺装置らしいき開幕匂々から感心して居るに、臆部を運んで登場する浪人の一人が赤い帯での襷姿だ。この姿を見ては、もう嘘言にもこゝが女手の多い家だとは思へなくなつて来る。實際、あの場所の説明方法としては、あれで舞臺効果も充分出て居るのだから、憎い程に巧みな方法とも云へるやうだ。登場人物は、いづれも浪人なのだ。中井君の隊長最上をはじめ、石山君のガサツなの、野村君の氣の弱い、鬼頭、菊岡兩君の如何にも浪人らしく一癖

ありけなの、斯うしてそれづくに性格がはつきり描き出されて居て、この諸浪人、この序幕では、江戸の街ちまたに辻斬の横行するに、その辻斬が、この群の一人細川の仕業らしいさまでは、筋を運んで呉れるが、細川その人の性格に就いては餘りパットした説明までには立ち入らない。立ち入らないだけに、観客の興味がますます細川の上に乗つてきたところで……、そこで聴かすのがあの捕り手の呼子笛だ、そして續いて拔身姿の細川を、花道から駆け足で、初めて登場させ、しかもたつた一言「只今」云はせただけで閉幕なのだ。斯うしたこの序幕での仕事の運び方、云はと題名「浪人の

群)「この文字意説明に終始したことも思へるのだが、あゝした幕の切り方なんか、観客心理の操縦法において、それこそ、相手の尻の穴(少々汚いたゞへで恐縮だが)までも読み盡し得る程のびへのきく人間でなくては、ミても出来ない離れ業だ。

×

第一場では、はつきりしなかつた細川の性格も第二場からはポツ／＼形が出来て来る。そしてはつきりし切つたところが大詰の自殺なのだが……それは兎に角第二場、あの月の明るい夜道を一人歩く細川が、これが澤田君の役なのだが、又従つて全興味もその點にあるのだが、通り過ぎの幕府歩兵隊を一步やり過して一太刀で斬り伏せるシーンまでに事件が進んで来る。観客、その連中の大部分は「大菩薩峠」の愛讀者なのだから、あの龍之助の甲府時代の辻斬のクダリを連想して、もうポツ／＼ミこの主人公細川ミ龍

之の助ミをゴチャ／＼にしてしまふばかりか、まんざら自分ミも他人でないやうな共鳴感さへ湧かしてくるやうにみへるのだ。斯うなつて来るミ舞臺での芝居の進み方も面白いには面白いが、この進み方に乗つて、まるで夢遊病者のやうに舞臺に喰へられて振りまわされる観客の方がよつほぎの面白いものになつてくるのも事實だ。

×

第二幕第一場、また序幕第一場同様に「浪人共の住居」だ。こゝでの細川ミ最上ミの對話、細川に片戀にもがくお敷ミ細川ミの對話、これ等を通してはつきりする細川の性格は、彼がすべてに理想を失つて、たゞ現在にゐら／＼ミ活きて行きつゝ、ある、一種のニヒリストである點だこのニヒリストが、毎夜々々の人殺しは「ゐら／＼する精神を安らかに眠らせるためには、たゞ人を斬つて血を見るより外に解決法なし」ミ、云はゞ人殺しを現

今のカルモチン代用のやうに理由づけるに到るミ、御時勢、幾分かニヒリストが、つた分子の所有者らしく見せかけて居る方が通りも、持てもよい現代であるミを百も承知なのがこの劇團の観客なのだから、そこはもう、自分の何處かに潜むものを、この舞臺上の主人公細川によつて代表されても居るやうに考へたものが、大ひに痛快がつて居て、その嬉しさうな観劇態度、そこには、ミても愉快なものがある見へぬでもない。だが萬事に賢明な現代人のこゝだ、痛快がつて、それに有頂天になつてしまつて居るのだミでも推察したら、それは推察する人の方が阿呆の骨頂なのだ。(こゝで舞臺の順序を追つて書いて来たこの文章も、一寸前後するこゝになるが)大詰で細川が自殺する、この芝居のあゝした解決法であれ程までに細川同様に幾分ニヒリズムが、つた氣持を感じて居るらしい自分に誇りを覺へて、大詰の自殺の瞬間までも

大ひに舞臺で共鳴して居た観客各自も、「あ、助かつた」に安心するのだ。そしてニヒリズムに充じて自殺したのは舞臺上の主人公細川だけであり、自分は、何處までも、これに共鳴したらしく感じながらも、事實の傍觀だけで済まされた、一種の理性人だに自覺して、さうした自覺に、たちどころに前の誇りもは又一種別な誇りさへ持つこゝの出来るのが、萬事に賢明な現代人のやうにも思へて、僕なんか正直なところ、馬鹿を見るのは「斯んな賢明人種相手に最上の舞臺を仕上げて行かねばならぬ俳優諸君の努力だ」と何にかしらの同情が湧いて來ぬでもないのだ。(この場合、俳優も御飯を食べて活きる人間だとは一切云ふべからず)

X

前後した順序をまた、もこのやうにもさすが、そこで第二幕第二場の「ある川端」だ、こゝは小山内先生が既に述べて居られたが、舞臺装置が非常に面白い、

橋ミ川ミ兩岸、これ等の主要部分の組合せ方に、從來見たことのない新鮮味があつたやうだ。しかもその新鮮味が流行物の新劇連中の構成派舞臺でザラに見るやうな、洋物スキキウして終つて居るのではなくて、根底く日本味が溢れて居るのが非常に親しみを覺へさせてくれて居たさと思つて居る。だが、この根岸君の按摩に化けて手先き細川の立ち廻りは眞實らしく行き過ぎて、かへつて、その殺され方に正視出來ぬ程の迫力が漂つて居た。あゝなるミリアルに即した藝の上手過ぎるのも一種考へものだ。根岸君ものを寫す方で巧みなのは君の趣味の方の藝である寫眞だけにまめておいて頂けないものでせうか。そこでこの駄文も大分脱線したから、こゝらでおしまひだが今だにこの芝居で不審になつて居るのはあの「浪人共の住居」で、上手落り戸につけてあつた益之徳利が、この戸を開けての、又締めての、このどつちの出入り

の時にも動かなかつたことだ。で一體あの徳利が何んの爲めにあそこに釣つてあつたのか、僕等上方者で、落り方の内側にはきつミ開閉の度に上トする、こゝろ、のついたのばかりを見馴れた者には、さうしてもその點不審の儘に残つて居る次第だ。

### 劇話會第二回開催

五月二十日の劇話會は御案内した通り京都圓山公園池の寮で開きました。南座五月興行の吉右衛門一座に就ての漫談や、先月のすしや餘談、來月の出しもの盛綱や伊勢音頭に就ての話もいろいろ出ました。

そのあとで木下左太郎氏の「常長」を朗讀してその演出法に就ての私見も述べました。「常長」は左の通り二人づゝ分擔で私(高谷)と森君とで讀みました。

支倉六右衛門常長とその妻 高谷  
佐野太郎左衛門と旅人 森  
猶當日の出席者は左の通りで俳優の出席は役の都合で時間がなく缺席になりました。

- 出席者諸氏 A B C 順
- |    |     |    |     |       |
|----|-----|----|-----|-------|
| 林  | 久男  | 池田 | 威   | 伊吹山次郎 |
| 北川 | 菊男  | 森  | ほのほ | 仲野 武男 |
| 西尾 | 福三郎 | 岡本 | 井筒  | 高原 慶三 |
| 高谷 | 伸   | 山田 | 孝三郎 |       |





# 龜屋忠兵衛

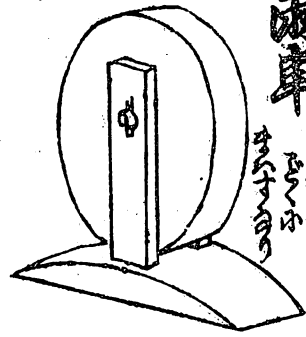
月 券 子

忠兵衛は大和の豪農増田忠左衛門の總領息子、生得美男にして世子に富む、隣家に岡州の浪人住み美しきお吉といふ娘を持たりしが、忠兵衛はいつしか此お吉を人知れず契りしを浪人はさる醫者に敷金を附けてお吉を娶せんし約し此をお吉に語る、お吉は驚き且悲しみ、いかにもして醫者への縁談を破らんミひたすら心を悩ませしを知る者ありてお吉にすゝめていふに、醫者は利欲一圖のものなれば、敷金さへ無くなれば自ら破談ならんミ、之を聞いてお吉は娘心の淺墓にも父が文庫より敷金に調へたる金百兩を窃み出し、が折あしく父の妾の見へければお吉は當座遁れに百兩の包を垣一重隔てたる忠兵衛が庭へ打捨てやりぬ、父は手文庫の金の紛失を憤り

懲らしめのつもりにて刀を抜き胸打したるに、お吉は斬られたるものミ即量して氣絶したる儘蘇生せず死じしたれば父は大に驚きしも詮方なし、此事世間へ廣がり、お吉ミ密通せしは忠兵衛にて百兩の金さへ其庭の内に在りしかば兎や角あしさまに噂しける、忠兵衛は金の事は少しも知らざれど冤罪をいひ解くに由なく、父忠左衛門は世間を憚り、忠兵衛を勸當したるも窃に大阪のしるべを便りて、忠兵衛の身の落着を托し淡路町龜屋の養子に遣はしける、忠兵衛はお吉の事に懲りて其後は身を謹しみ浮きたる事もなかりしかば養家の氣受けてもよく、やがて龜屋の家督を相續してひたすら業務を勵みしが、一三年胤の世上に流行せし時、忠兵衛も旦那筋より預りし胤を揚げし所運わるく緒は切れて胤は虚空より舞ひ下りぬ預りものなれば無くしては申譯なし胤の落つる方角へ駈付しが胤は新町廓龜屋が局の屋根に落ち、是が奇縁となりて梅川ミ馴染、互ひに深くなりてお定まりの金に詰り、遂に爲替金を私し、梅川を請出し大和路さして行く途中、追手かゝりて二人ミ召捕られ、極月五日(寛永七年十二月)千日の刑場にて忠兵衛は刑せられ、梅川は一命を助かりしも尼ミなりて伏見の片ぼこりに庵室を結び、忠兵衛がなき跡を用ひしといふ。(正徳六年版『好色入子枕』より)

両車

ひんごうまの  
あまごうまの  
まろすまの



# 一寸一言

藤井紫影

冥途の飛脚は近松の世話物中でも、まごまりがよくて見せ所の多い佳作であるため、種々な改作もあり、常盤津清元にも語られて、梅忠の名は知らぬ人もない程であるが、原作通りの上演は近頃珍しい事である。役者の仕勝手はわるからうが、仕刷れた改作物よりは時々原作をやつて見るのも、亦氣がかはつてよからうと思ふ。それに現代の若い見物には、しちくさい持つて廻つた空々しい義理づくめの改作物より、素直な穩當な義理人情を縋ひ交ぜた近松の原作の方が、遙かに感興をひくであらう。だから役者も亦此點に注意して演出の工夫を勵まれたら必ずそれだけの骨折甲斐があらうと思ふ。

私は梨園の事情に疎く、人々の藝風も知らず、まして見ぬ芝

居を評することは出来ないが、ごこまでも原本尊重で、セリフも現代の大阪語に翻譯するなごは謹んでもらひたい。現代語を挟んで場當りをやるなごは、甚だ卑怯な話で藝道の墮落である。セリフごいへば八右衛門の詞に、「かういへば忠兵衛を憎みそねむやうなれご、ぬすくみぞ、あの男が身の成る果がかはい、」ミある、ぬすくみが神八幡さか身しやりごかいふ誓の詞であらうごは考へられるものの、傍證がないので稍不安に感じてゐるが、此頃東京新誌に載せた「こそぐり草」(承應二年刊)を見るに、「しんじつせいもん事」の條に、「其外のなみくに思ふ人には、身しやり、くされ、かつたい、神ぞ、ぬすくみなごの誓かや」ミあるので、大きに安心した。

第一回締切後申込殺到に鑑み六月三十日迄延期  
**機曾は永久に去らんとす御申込を乞ふ**

▼芝居國案内記！一目で判る鳥瞰圖！

演劇研究  
 究雜誌

# 道頓堀

年極愛讀者大募集

□ 芝居見ないで芝居が見られる紙上に躍る大舞臺  
 □ 一度手にしたら最後の頁まで讀まずには居られない娯樂を兼ねた演劇雜誌

□ 内容外觀共に演劇雜誌界の權威である事は既に御承知の事です  
 □ 大衆演劇雜誌の自家本元肩のこらない興趣無限の讀もの豊富！

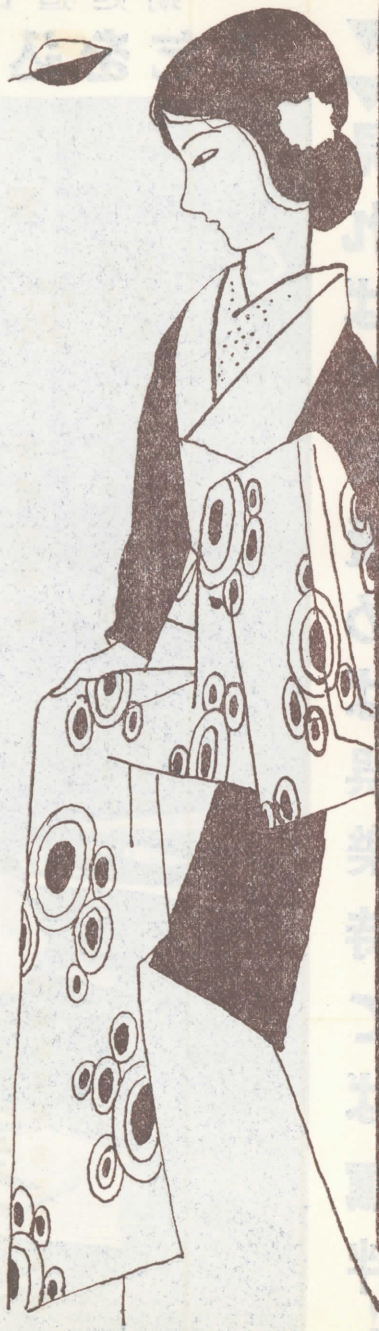
## 年極讀者の大特典

- ▲賞品——年極申込者先着壹千名を限り抽籤を以て内壹百名に壹ヶ年間無料愛讀權を與ふ。  
(但し昭和四年七月號より翌六月號迄)
- ▲特典——年極申込者全部には松竹各座に於て發行するパンフレット案内書及優待券を發行毎に贈呈す。申込者を以て『道頓堀』ドラマリーグを組織し演劇觀賞に就て特典を與ふ。
- ▲申込方法——壹ヶ年分(參圓四拾込錢に割引)前金お拂込みのこと。
- ▲申込先——大阪市南區久左衛門町八 松竹合名社内『道頓堀』發送部宛



▼見れば慰安讀めば娯樂持てば羈絆！

見ざる雜誌！ 讀む雜誌！ — 名優鴈治郎の愛讀す雜誌



裂 小・具道小  
貸 衣 裳

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます)

素人演藝會  
宴會の催物  
春秋温習會  
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

本店 大阪市南區久左衛門町八  
東京支店 東京市淺草區並木町十五  
電話 南一四一七八番  
電話 淺草五五九九番

爽やかな初夏の氣分!!

いみじき情緒・はつらつたる演技

御家族揃つての御觀劇  
楽しい集團的の御觀劇

には

↓是非當所を御利用下さい。

大阪市南區久左衛門町八(松竹合名社内)



松竹觀劇案内所

電話 南(六一)六二八四五〇番

中座 浪花座  
角座

辨天座 松竹座  
朝日座

樂天地 春日座

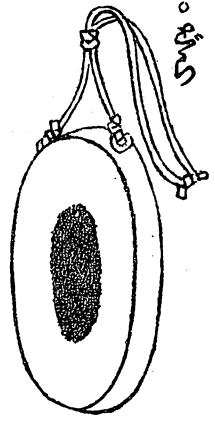
京都松竹經營各劇場  
神戸松竹經營各劇場

◆御申越次第即時參上御相談申上げます。

ルービヒサア

ソトシンボリ 清涼飲料





# 『延命院秘事』漫言

行友李風

享和の三年といへば、御承知の通り文化文政爛熟期の直前でありまして、江戸の市井の風習は業に可成に淫靡頹廢して居た物と思はれます。

随つて、幕府時代の二大禁慾生活者、男で僧侶、女で御殿女中、この兩者に最も多く制度の破綻者を出したのが正に此の時代でありましたさうで。

『ソラ出た坊主吃驚貂の皮』三時の落首に立たごこく、寺社奉行脇坂浪路守の辛辣なる手腕は、各宗の牛鼻坊主共をして殆んき氣死せしめた云ても可い位で、延命院事件の真相もまたその極端な一部分として觀る事が出来ませう。

さてその延命院一件なる物が?

日蓮宗の古刹、江戸谷中の寶珠山延命院——眞實は『延みやう院』であるべきですが、芝居の舞臺では古來『延めい院』と呼び慣はして居ります、多分今度もそれに據るつもりで、殊更に改める程の問題でもありませんから——は、今、省線の日暮

里停車場から、崖の坂道を登るこゝ約三丁餘、日暮りの崖ミ脊中合せの位置に現存して居るさか聞きましたが、遺憾ながら今日までそれを實地に確かめ得る機会に恵れませんで。

その延命院の女犯問題を題材として傳はりました文献は『延命院實記』と題する實録物ミ、講釋種この二通りありまして、講釋の方では此の事件を房州三原妙光寺の蓮華往生ミ繋ぎ合はせて高座に演じます。

先輩識者先生方のお説にも又二通りありまして、同寺十六世の院主日道(從一位日野資枝朝臣の猶子)學徳一世に高かりしも、享和年間纒者の爲に罪を得た、それを其頃流行物の女犯事件に取込んだに過ぎないといふ否定説。

イヤ彼れ程世間へ傳へられた事件、殊に最初の訓本たる『觀延政命談』の著者品田郡太が罪に處せられたといふ事實もあり虚實相半ばする物ミ觀るが至當であらうこの説ですが、それ等の凡ては假令何うあらうミ、今度の脚本『延命院秘事』には何

等の影響もありません。

芝居道でも、古く溯つては調べても見ませんが、明治十一年に新富座で先代菊五郎が演じました『日月星享和政談』七幕二十場、黙阿彌の作ですが奇賊曉星右衛門の事件と縷ひ交ぜにして、菊五郎は日當三、馬吉といふならず者を勤めたさうで。最近さいつても確か大正十一年頃、勘彌、猿之助が震災前の帝劇で上演しました北村包彦氏作の『延命院』があります。こ

## お子達への奉仕

### コドモの國

#### 白木屋四階

界筋の白木屋ではお子達本位の最も理想的な施設でコドモ百貨店とも云ふべきコドモの國を開きました。

斬新な設備といろ／＼面白く且つ爲めになる催物とで好評を博して居りますが今此の施設の内容を申し上げます。

☐子供用品寶庫 洋服、帽子、エプロン、和服仕立上り品、靴、乗物玩具、文具をはじめ、ベビー用品、滋養品等一切の品々を安價に販賣致します。

☐コドモの喫茶室 室内の器具より諸設計まで一切子供向きとし充分に吟味精撰したお子達及び婦人方用の喫茶室。

☐コドモの美髮室 坊ちゃん、嬢ちゃん方の散髮、お下げの手入其他を専門に致しますので従來の如くお子達が頭の手入を嫌がられる事はなくなりませう。

これは随分濃婉な物だつたさうで。

今度の拙作は、單に取材を此の事件の範圍に藉りたさいふだけで、日當にしろ、衆村にしろ、在來型の破戒僧や淫蕩な女ではない事にして取扱い、柳全の岩田長十郎に就ては多く講談の方に據りました、以上、洵に要領を得ませんが、鳥江さんへの申譯までに……。

#### ☐コドモ齒科治療室

お齒の矯正、虫齒の治療等お子達の齒に關する一切の治療を明るい室で優しい先生方がお待ちして居られます。

#### ☐コドモの園

此處はメリー、ランドです、坊ちゃんも嬢ちゃんも思はず萬歳を叫ばれるでせう、歐米の百貨店にも類のない広い遊び場で、大型小型のスベリ臺、數十臺の自働車、三輪車、プランコ、木馬、シーソー、さては樂書の出来る縁板、二三歳のお子達方の遊び臺等全部用意して居ります、又特にお子達の御面倒を見る爲め專屬の女子店員もおります。

☐母の室 御買物中の御休憩は是非ここでなさいませ、お子達の體重秤、身長秤、記録カード等をも設備し、又乳兒用の臺も準備して御座います。

#### ☐コドモ婦人洋服部

お子達の洋服、帽子のお誂品の承りは勿論、御宅でお作りになるお洋服の裁斷、仕立等をも御相談申上ます、尙ほ御便宜のために御客様が自由に御使用下さる様にミシン及び裁縫臺をも設備致して居りますから御繰くり御來店の程お待ち申上ます、而して此處は巴里のクープ、ダウ、パリ裁縫學院を卒業された小西修子女史が擔當されることになりましたから々色と御相談下さいませ

三十三所 壺 坂 (あふひ石)

女房 お里 我 童  
観世音の化身 義 直  
盲人 澤市 右 團 次

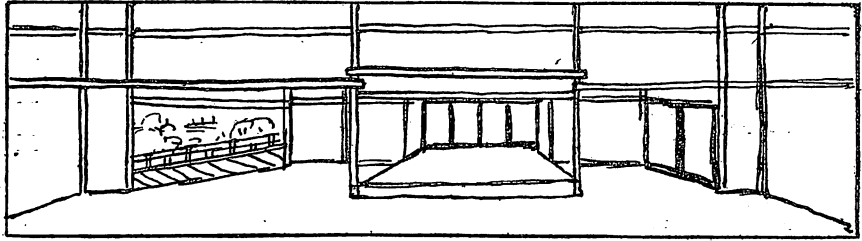
お里 エ、そりや胴悠な澤市さん、いかにいやしい私じやこ  
て現在お前を振り捨て、外に男を持つ様な、そんな女と思  
ふてか、そりや聞えません、ホ、聞えませぬわいな、父様  
や母様に別れてから伯父様のお世話になり、お前と一緒に育  
てられ、三つ違ひの兄様さ、上へ云ふて暮してゐる内に、情な  
やくこなた様は生れもつかぬ痂瘡で、セへ目かいの見へぬ其の  
上に、

上へ貧苦にせまれき、何の其の、セへ一旦殿御の澤市さん  
たごへ火の中水の底上へ未來迄も夫婦ぢやと思ふ許りか  
コレセへおまへのお目を治さん、セへ此の壺坂の観音  
様へ明けの七つの鐘をき、上へそつこ抜け出で唯一人か  
山路いさはぬ三年越、切なる願ひに御利生のないさはい  
なる報いぞや、セへ観音様も聞へぬさ今も今まで恨んで  
たへ私の心も知らずして、外に男がある様に、今のお  
前の一言に上へ私や腹が立つわいのさ口説き立たる貞節  
の涙の程ぞ誠なり。始めて聞きし妻の誠、今更らなんこ  
澤市が詫の詞も涙聲。

伊勢音頭思ひ出いろく

永代漬 久保田泰次郎

中座の六月芝居に成駒屋の貢とは  
季節柄後進者の爲め好劇家の見近  
すべからざる至藝で當を得たる狂  
言である。  
小生の従来見し昔の感想やら現今  
餘り出場せぬ御師孫太夫の内など  
は古風な馬鹿々々しひ場面である  
が捨難ひ面白味がある、過去明治  
廿四年角の芝居で出場した孫太夫  
の内(播市)が貢の伯母に化けて  
おこん(播市)が貢の伯母に化けて  
逢ひに来ると折あしく眞の伯母お  
みや(先々雀右衛門)が来る孫太夫  
の娘のさかき(故玉七)が貢に惚れ  
て居ると正太夫(齋入)が横戀慕す  
る一種の喜劇場面で正太夫が主役  
で其後道頓堀で出た事がない。  
亦十人伎のことは去る三十一年夏  
大阪歌舞伎(梅田電車道堂島座の  
ありし處)で仁左の貢で大詰に鳥  
羽の伯母(故橋三郎)に逢ひに来て  
切腹する此の場も其後絶へて出場  
なし。  
明治十七年新當座全盛時代に五代  
目が、千種花音頭新頭と言ふ名題  
で貢を勤め新當町藝者惣出で伊勢  
をどりを見せ大した好評で此時  
も大詰に鳥羽の伯父の家で切腹す  
る筋があつたよう見ませぬが當時  
の歌舞伎新報の記憶がある。  
何にしても絶好の好出しもので大  
に歓迎する。  
數々見た中で成駒屋は數度仁左は  
中、浪花、辨天、大阪歌舞伎と四  
度其他霞仙先今我童先々延三郎霞  
仙延若と見ましたが無論脛仁左は最  
適任であつたけれど怨を言ふと那  
は粹すぎ仁左は堅すぎ先代仁左は分  
別すぎの感があり、役處としては  
霞仙延若が兩優が認められたを印象  
に残る。  
萬野は段四郎齋入先々嵐吉、琥珀  
郎、傳五郎、多見藏、先留寛、長  
太夫、先延三郎(正若)の内で第一  
に段四郎第二に琥珀郎が印象に残  
る。  
今度の萬野は播市と想像するが役  
處を替へて魁車の萬野にはり市の  
林平、箱登羅のおしか、福助のお  
こん、長三郎の萬次郎、成太郎の  
おきして見たいと思ひます、多分  
萬野は河内屋でしょう。  
晝寝の寝言のようなお笑草迄。



角座六月興行上演(山東京傳作)

芝居 物語 時鳥 雲間月

津守凡太郎

一

の御前に出た。

「お、そもじが噂に聞き及ぶ時鳥殿で御座りますか」

「左様に御座りまする」

「御遠慮には及びません。さア、近うお寄り遊ばせ」

「有難きお詞……、お目見得さへも憚りますに、さうまア、姫君のお傍へ私風情が……」

「左様なごきはなしにして、この上にも心安うお願ひ申しまする」

「冥加にあまる其のお詞、上様よりお興入れありしあなた様また妾は、賤の育ちの不束者、此の上ながら宜しうお願ひ申し上げまする」

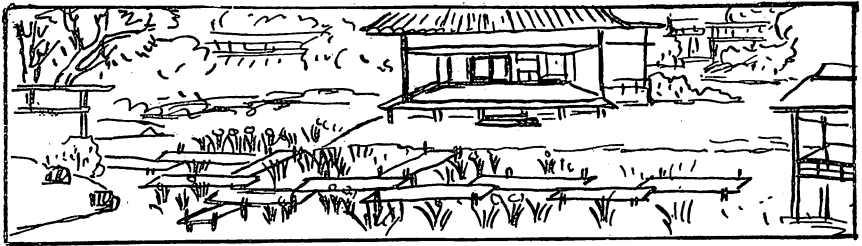
「幸はひ、今日は式日の酒宴、近づきのため、今宵のお目もじ、この上、姉も妹も不束な自らをよきに、お願ひ申します。」

姫三時鳥との間には、なんの故障もなし、初対面の挨拶は勿

秋の一日。殿さまは都入りして御不在である。今日は式日のお祝ひにて、浅間のお館では、家中の方々は勿論、腰元、奥女中を集めて酒宴の會が催された。花筒の紅葉には短冊が下けられてある。机の上の硯箱や短冊箱は不檢束に取り亂されてある。琴、碁盤や、銚子、盃、色々の道具に入り混つて散在する様は、足の踏み場も躊躇ふ程である。

最早、お歌合せや、思ひ思ひの諸藝も終る頃である。殿の愛妾、時鳥は、奥女中の案内で、奥方、嬰麥姫





論のこゝ、お目見得の盃さへ換はされた。然かも、この會合は外面だけの交際には思はれぬ程、信實さが籠つてゐる様にも感ぜられた。お互がこれまで打解けた圓らかな態度であるにも拘らず、この部屋の雰囲気は壓迫され相な重苦しい毒々しさに覆はれてゐた。

『サア、お見目得の盃も濟みました。では何ぞ、時鳥さまのおたしなみの事をお見せして載きませう』  
邪惡な顔付きをした女中頭の横笛は、不遠慮に、また。

『お、左様う、幸ひ月を題にしてお歌合せを致しませう。それが宜敷う御座います。』

横笛の態度には、明らかに、時鳥を輕蔑する傍若無人さが表はれてゐた。横笛は猶ほも言葉續けて、

『當世は、歌俳諧の心得がなくてはなりません。さア、なんなり三月を題にお歌ひ下さい』

時鳥は悉く困惑して仕舞つた。横笛は益々勝ち誇り顔になつた。今まで、時鳥の美しさに嫉妬をさへ感じてゐた他の女中等も、この機会を復讐に三口添へた始めた。

『申し、時鳥様、だまつて居ては濟みませぬ』

『早うお歌を』

それでも、時鳥は、更に怒る様子もなく。

『あられもないこゝを仰しやいます。恥しながら、幼ない時から、丹波の田舎で育ちました事にて、糸繰り、機織りのほかは……』

『知らぬを仰しやるのかえ』

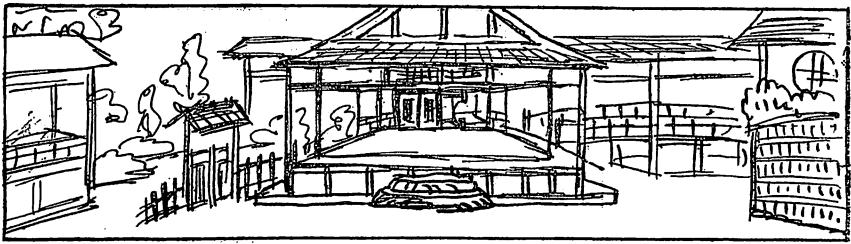
餘りの口惜しさに時鳥は返事の言葉さへ出なかつた。横笛はさも愉快けに、

『皆さま。時鳥殿は、お歌の心得がないのぢやないのふ！』

そりや、その筈、以前が以前ぢやに依つて、三十一文字のお歌より、オ、それ、田舎者が歌ひ歩く順禮歌、父母の恵みも深き粉川寺……、その方がお上手で御座いませうのふ！』

罵言、憎惡、嫉妬！時鳥は、四面楚歌の聲で覆はれて仕舞つた。横笛をはじめ、腰元、奥女中等は、時鳥を侮辱し、困惑さすこゝが、姫の心を慰めるものであり、亦、姫への奉仕でもあるかの様に考へてゐた。氣の毒けに見兼ねてゐた嬰麥姫は、その場を立たずにはゐられなかつた。

『後室さまが……』



誰かの口から聞へて来た。一同は静かに各々の席に控へた。後室さいふのは嬰麥姫の母、百合の方のこゝである。

『そもじが、殿の思ひ者、時鳥殿ぢやの！聞き及ぶ程あつて、中々あでやかな、イヤ感心いたしました』  
 百合の方の眼は、毒々しく煌めいた。優しい言葉の裏には傷々しい刺のある事を感じずにもられなかつた

二

淺間のお館から歸つてきた時鳥は腹痛が原因で病床に就いて仕舞つた彼女のあでやかなさは日毎に失せ、頭髪は櫛付ける毎に脱げ始めた。

發作的に生こる頭痛はさき一番苦痛なものはない。今も、腰元の小蝶は合薬の朱雀湯を調へに出て、家は、時鳥獨りしか居ない。過日、注文して置いた観世音のお厨子を取りに往つた筈の召使信夫が思はぬ時に歸つ

て来た。

信夫 旦那様、只今歸りました。

時鳥 それは大儀であつた。そうして注への品は。

信夫 そこ處では御座いません。お使の途中で一大事を聞いて参りました。

時鳥 一大事とは……。

信夫 お屋敷町の太鼓堂辻番所の小影で、あの意地悪の横笛尾花の二人に出遭ひました。その跡に、この密書が落ちて居りました。

時鳥 なに、百合の方様へ純立より……ハテ、心得ぬ。この純言は慥か當家抱への御殿醫であつた筈。そなた、讀んではくれぬか。

信夫 ハイ、畏りました。

兼々御仰せ付けられ候一薬の儀、これを服すれば、日ならずして惡瘡を發し、相好變り申候。右は、下拙が家傳秘法にして、世に珍らしき奇薬に御座候。また、用ひ方は酒に混じて飲まし申すべく候。

時鳥 さては、何時ぞやのお目見得に、百合の方よりさしたる盃、アノ毒酒で……、我相好の變はりしは百合の方の仕業さ。は、いかに嫉妬さはいへ、世に恐ろしき毒酒を用ひるさは。

時鳥の顔は、さつと土色に變つて、唯だ眼のみが恐ろしく光つてゐた。彼女の腫には判然と復讐の念が漂つてゐた。

時鳥 この事を殿様にお告げ申さうにも海山へだつ陸奥へは  
 ……この上は、御家中で忠臣無二の雪枝小織之介様にお目に  
 かゝり、百合の方の悪事の一々を申し上げ、この身の恨みを晴  
 らさいで置かう。

今にも、帯引きしめて立ち上がらうとする時鳥を、信夫は、  
 やうやくの事で引き止め

信夫 お心にはやるは御尤もで御座います。なれど、御病氣  
 の御身でさうして左様なことがなりませう  
 御在國を丁度幸ひ、是より私が小織之介様  
 のお邸へ参りこの手紙を證據にして一伍一  
 什を申し上げます。私が歸りますまでは  
 お腹も立ちませうが、必らず御辛抱なされ  
 ませ。必ずお待ち遊ばせ。

信夫は、主人を思ふ一念に、一目散に小  
 織之介の邸へ走つて往つた。その時、百合  
 の方は横笛尾花の二人をつれて、時鳥の邸に忍んでゐた。  
 時鳥は到堂百合の方のために殺されて仕舞つた。小雨降り、物  
 頃はしさを感ずる時、八ツの鐘さへ聞へて来た。

三

陸奥、五條坂、傾城逢州の部屋  
 『そなたも妹を尋ねてゐるのか。思へば國に残した時鳥も姉

配		役	
愛妾 時鳥二	扇雀	召使 信夫	霞仙
雪枝小織之助		淺間巴之丞	我童
		後室百合の方	右團治
		撫子姫	延太郎

を尋ねてゐた様ぢや。面ざし格好その方に正しく似てゐる様ぢ  
 や。イヤ、過ぎし昔を嘆くも詮ないこゝ。心さみしい。秋の夜  
 のつれづれに今一曲を調べて聞かせ」  
 殿は逢州の琴に聞き入つてゐる。秋の夜は一層深く淋しく感  
 じられた。琴の調べに合せて何處やらか、笛の色さへ聞へて來  
 る様に思はれた。然かも、それが時鳥であるかの様に。  
 『殿さま。お懐しゆう御座います』

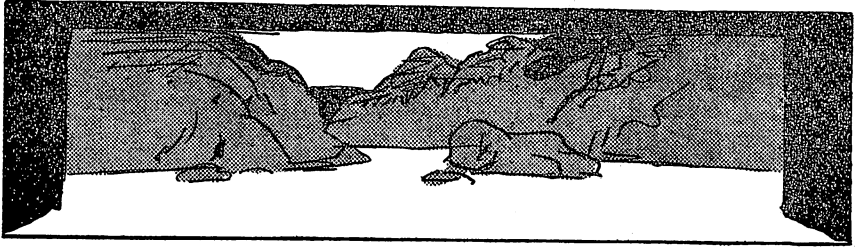
『おゝ、時鳥か、よく参いつた』  
 『殿をお慕ひ申して、これを持って参り  
 ました。常に秘藏遊ばす笛で御座います』  
 殿は微睡み始めた。夢は益々進んで、時  
 鳥と逢州が姉妹の名乗を揚げるまゝころま  
 で往つた。突然、殿の夢想を破るものがあ  
 った。それは國表からの早籠である。  
 『ハア、我君これにおはたり遊ばします

か』  
 『其方は小織ノ介、慌しい。如何致した』  
 『ハア、時鳥殿には、百合の方の手にかゝり、あへなきお最  
 後を』  
 夜は愈々深く、虫の音はいや高く、月は益々淡へて來た。殿  
 は、たゞ呆然と立つてゐる。

角座六月興行上演(大森痴雪氏作)

芝居長崎の鶏

松本泰三



港灣には、一艘の貿易船すら碇泊してゐない。彼方此方の商館は、遠く異郷に取り残されたやうに、獨り寂しく、ボツネンと建つてゐる。而かも、その中には、鼠の子一匹すら住んで居さうに思はれない。大きな濱庫は、空しく來春の貿易を待ち草臥れて居る様に棟を並べてゐる。目に映する港の總てが、深い睡りに塞かれてゐる。本當に、開港地の秋は物寂しい。

慶長十九年の秋も中途過ぎた或る日の午後である。

遠く沖合ひに一艘の和蘭船が碇泊

した。朝から長崎の街々は勿論のこゝ、外人居留地から開港場に至るまで、街の兩側は、老幼男女の差別なく、人垣で悉かり埋められて仕舞つた。今まで静まりきつてゐた開港地も、忽ち修羅場の如き混雑騒音に睡りを醒めされた。

『切支丹の異國追放だ!!』

誰云ふこはなしに群衆の口から口へ傳へられて行つた。見物の群集も刻一刻と集つて來る。流石に、幅広い外人居留地も立錐の餘地がないまでに詰められて仕舞つた。遠く街の方から、觸れ役の聲が聞へて來た。

『この者どもは御禁制の邪宗門切支丹に歸依した罪によつて異國へ御追放になる』

周囲は水を打つた様に靜まつた。聽て、罪狀を記した高札を持つた小役人を先頭に、五六人を一群にした澤山の追放者が、役人等に守られつゝ、通り過ぎた。子の手を曳く父も居れば、嬰兒を背負ふた母、勞り合ふ兄妹もあつた。武士、町人、百姓等

が入り混つてゐるところを見るに、彼等には、階級による差別意識がないやうにも思へた。それでも、男は首に十字架を念珠をかけ、女は頭に白布を被つてゐた。追放者の總しが、役人等に反抗もせず、かへつて、柔順である彼等の態度に、口々に、

『サンタ、マリヤ様、ゼズ、キリスト様』

と唱へてゐる有様には一種の不可思議を抱かすにはゐられなかつた。

群集の中には、追放者も懇意な者もゐた。彼等の中には、恐る恐る目禮する者もあれば、涙の顔を蔽ふ者もあつた。中でも六十才前後の老爺が堪えかねた様に人垣を押し別けて、今通り過ぎる年若い娘の傍へ走り寄つた。

『お玉……』

『伯父様……、さうぞ、ルシヤと呼んで下さい。妾はもうお玉ではなくなりました。日本の女ではなくなりました』

老爺は聲をあげて泣いた。

『妾は天帝様のために喜んで、呂宋へ流されます。伯父様、さうぞ、止めないで下さいまし』

お玉は堪り兼ねた様に涙の顔を蔽ふて追放者の群に歸つて行つた。

役 配	
村山徳太郎	高山 右近
船頭治良兵衛	村山 東安
内藤 采女	内藤 ゆりや
娘 お雪	
我 童	霞 仙
徳 三 郎	大 吉 郎
延 太 郎	ひ さ し
扇 雀	

今日、この追放者の中には、前明石藩主高山右近を始め、内藤飛彈守忠俊父子、長崎外町代官村山東安の長子村山徳太郎も混つてゐた。丁度、徳太郎等の一群が開港地に差掛つた時である。

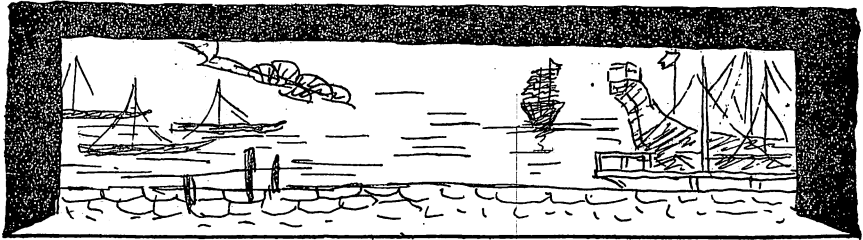
『徳太郎様、若旦那様』  
群衆の中から、恥も外聞もなく、熱情の籠つた聲を張り上げて、徳太郎に近附いて来る娘があつた。彼女はお雪といつて、外町代官村山東安の家に來、五兵衛の娘である。後馳せではあるが娘の跡から徳太郎の父、東安さへ人垣から出て來た。徳太郎は震へる聲で

『お、お雪か』  
『さうあつても、阿媽様へお出で遊ばすのでございますか』

『私は呂宋の方へ流されることに極つた』  
『呂宋に……、それなら阿媽様より、まだ遠いのではございせんか』

『二度に日本に歸らぬ身には、遠からうと近からうと同じことだ、私はお前を妻に持ちたいと思つてゐた然し、それも無事であつた昨日までのことだ』

『では、さうしても御改宗を』



『天帝様に捧げる一念より外はな

い』

『悴、まだ、今でも遅うはない。

俺の心を思ふて、さうか、改宗してくれ』

『天帝様のためには、大名の位を捨てた方さへあります。父上、さう

か、この罪をお許し下さい。私は何さいふ未練者か、これでお別れ申します。

徳太郎は、港に走り去つた。あそこには、船頭の唄が聞へるのみである。長崎の鶏は時知らぬ鶏で、真夜中に鳴いて殿をかへす。

二

元和五年の晩春、

一度、呂宋に追放された村山徳太郎は、布教のため再び肥前の國、茂木の濱に到着した。一行には、慶長十九年國外に追放された、遠藤シモン、馬天連のフランシスコ、ガルベ

スの三人である。

『徳太郎、お前は昔の仕合せだつた身の上や、親の家が戀しくて歸つて来たのではなかつたのか』

『私は、呂宋の管長様から、長崎で宗門のために盡されてゐる馬天連様方へのお使ひご、一層御教を擴めるためにご、お沙汰を受けて歸つて来ました』

長崎から、業々、人目を忍んで迎へに來た東安には、至たく意外な返事であつた。然し彼は決して、この位で失望はしなかつた。彼の心には第二の計畫がたてられてゐたからである。

『なにはごもあれ、長崎まで歸らう。家には、お前の隠れ場もあるごさだから』

『私は、一家一門まで卷添へに遭はしたくはありません』

『いや、大丈夫、私には私の考へがある』

東安よりも、失望落膽したのは、彦右衛門である。

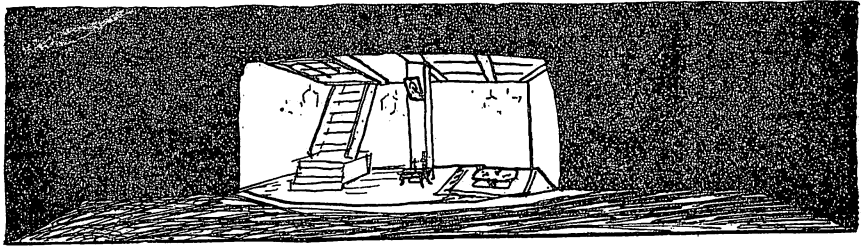
『旦那様、あなたの思召しも夢になり相でございます』

東安は打消す様に

『なんの……なんの……。それよりも、彦右衛門、田上を降り切つた處で措違ふた旅人風の男をお前は怪しいとは思はなかつたか。行過ぎてから立停つてまで俺達を見てゐたやうではないか』

『氣にならんでもありませんでしたが……』

『俺はなんもなく目明しの様な氣がした』



遠藤シモン、フランシスコ、ガルベス、徳太郎の三人は、船頭の次郎兵衛に洗禮を授けるために、海邊へ往つてゐた。東安には、なんじはなしに氣掛りでならなかつた。

『切支丹！御用！』

突然、海邊の方に激しい聲が聞へて來た。

三

呂宋から日本に忍んで來た徳太郎は、父東安の計畫に乗せられて、空しく、穴庫で一ト月を過して仕舞つた。幾度か、改宗と家督相續のこゝを父から話されたこゝか知れない。然し、彼の神に對する奉仕の念は、いやましに堅くされる一方である。或る日、徳太郎は、お雪に遭ふこゝが出来た。

『お雪、私は呂宋に流されてからお前を思ふ自分の心の深さ強さを知ることが出来た。私は、お前のこゝ

を思ふては懺悔し、懺悔しては又思ひ、幾度、繰返したこゝか知れない』

『私は、若旦那様にお別れしてから、一生童貞で通さうと覺悟を致しました。洗禮も受け、今以つて信心を連んで居りますのは、皆若旦那様におつくし申す心でございます』

『お雪、私は日本へ戻つて來た甲斐があつた』

『お嬢しうございます』

其處へ、お雪の父、五兵衛もはいつて來た。

五兵衛とお雪の穴庫に來てゐるのを知つた東安は、狂人の如く、二人に斬り掛つた。お雪は到頭胸を刺されて倒れて仕舞つた。それでも、お雪は、徳太郎は勿論、東安さへ怨まふまはせず

『若旦那様、天国で……』

彼女は安らかに眠つて行つた。

五兵衛が訴人をした。他からは騒がしい物音が聞へて來た。『父上、村山一家の運命も極りました。以前の如く御宗門に歸り、罪を懺悔し、潔きよく刑のお仕置きに與りませう』

『サンタ、マリヤ様』

改悔する東安の眼は、聖母の畫像を仰いでゐた。

(角座六月興行上演) 近松門左衛門原作・食満南北氏脚色

芝居見  
たまま

# 冥途の飛脚

内山惣十郎

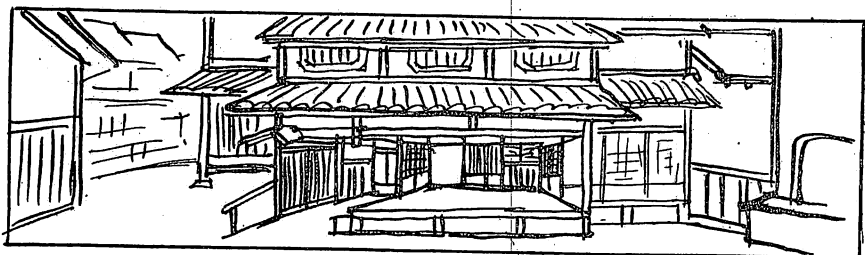
## 上の巻

- 一、淡路町龜屋内の場
- 二、西橋堀川端の場

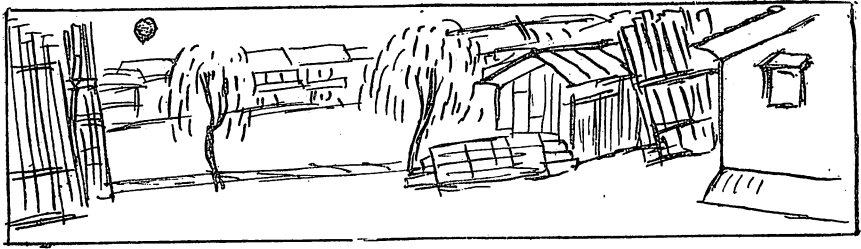
幕あけば、ここ淡路町の飛脚商、龜屋の店先、人形廻しの伊三郎が辨慶の人形を遣つてゐるを、門口で丁稚の千太が面白そうに見されてゐる。そこへ丹波屋の下男六助が通りかかり、千太が「上手い〜」と褒める。ミ「何のこれが上手いものか、下手糞ぢや」ミケナすので、人形遣ひ腹を立て、お互ひに罵り合ひから果ては掴み合ひになるミ、奥から龜屋の番頭伊兵衛が出て来て、千太を吐り人形遣ひに錢を與えて追歸し、六藏

に「お前は何處の若衆ぢや」ミ聞こがめる。六藏「丹波屋の若い者ぢや、龜屋へ使ひに行く速中……」伊兵衛「龜屋なら此處ぢや、何し来た」そこで六藏は江戸から廻送された五十兩の替爲金、度々手紙で催促しても何んの返事ない故、主人の言附で受取りに來た、渡してくれ——さうるさく催促、伊兵衛は「只今主人は留守、歸つて來たら返事する」ミ無理に六藏を歸すミ、入れ違ひに長谷川甚内供を連れて出て來て、江戸表より龜屋宛三百兩送つたから受取れミの書狀が來てるのに、今日になつてもまだ致着せぬミは不届、當方も大事な用をかく、サア證文ミ引替に金渡せミ強談判。伊兵衛は恐縮して「今日迄届かぬは先日來の雨で、道中筋が出水して遅れてゐるのであらふ、着き次第必らずお届け申すから」ミ謝つて、やう〜に歸して伊兵衛はホツミート息、忠兵衛が晝出たきりまだ戻らぬを案じ顔に奥へ入るミ、

「籠の鳥なる梅川に焦がれて通ふさ雀、忠兵衛はさほこほ



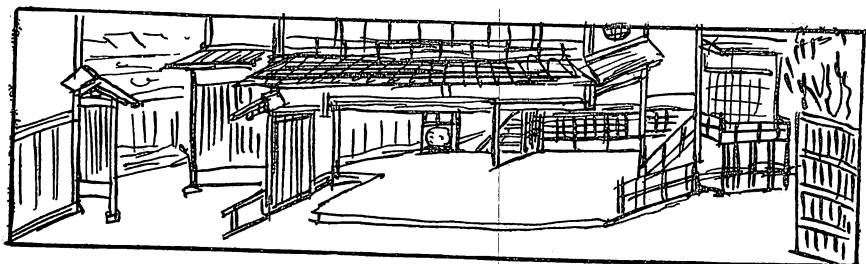




ミ、外の工面内の首尾、胸にミ  
ころの思案さへ、足を空に立か  
へり……

ミ淨瑠璃になつて、忠兵衛思案顔に  
トボくミ出る。忠兵衛は、梅川に  
馴れ初めて日毎の新町通ひ、その梅  
川に阿波の田舎侍白瀬三平が強い横  
戀慕、身籍するのなんのこいふので  
忠兵衛は愛しい梅川を田舎侍如き  
横取りされては男の意地も立たず、  
今更らさうして梅川を別れられよふ  
先方に身籍されぬ内に、五十兩の  
手附金を打つてはおいたが、残る百  
十兩の才覺に、あちこちミ奔走した  
が、工面のつく目當もなく、それに  
こんなこミが養ひ親の妙閑の耳にで  
も入つては面目ないミ、あれやこれ  
やの煩悶をつづけ乍ら、我家の前に  
立つたけれど、何んミなく養母に氣  
兼ね入りかね、そつミ飯焚きのおま  
んを呼出し、内の様子を聞かし、立  
ちわづらうてゐる所へ、いそぐミ

来る丹波屋八右衛門、おう忠兵衛よい所ぢや、江戸の替爲の五  
十兩、さうしてくれる」ミ威高くなるミ、忠兵衛は母に聞かれ  
ては工合悪いミ奥に氣兼ねし乍ら八右衛門に「實はあの金、友  
達の心安さに遣ひ込んだ」ミえつ！ミ呆れる八右衛門に忠兵衛  
は「濟まぬ」ミ詫びて、實は梅川のこミで阿波の客ミの張合か  
ら、八右衛門に渡す金五十兩を手附に遣つた心の中の苦しさを  
打明けて、必らず四五日内には返すから勘忍してくれミ、眞實  
こめて詫れば、八右衛門も男、まして仲良しの友達忠兵衛のこ  
ミなので心よく見して「餘り戀に夢中になつて、店の仕事を  
怠けぬよう、養母に心配かけぬよう」ミ、忠告を與えて歸りか  
ける奥より、養母の妙閑が八右衛門の聲聞いて立出で「まあま  
あ」ミ無理に座敷に上げ「度々の御催促恐れ入る、たしかお金  
は十日以前に着いてゐる筈、忠兵衛何故もつミ早うにお渡し申  
さぬか」ミ、譯を知らねば正直一筋の妙閑は、忠兵衛を叱り早  
く持つて来るように言附けるので、忠兵衛は窮し八右衛門は當  
惑、忠兵衛は母の手前詮方なく奥へ入つてゆく後に、妙閑は八  
右衛門に、此頃の忠兵衛の素振りに就て心を痛め、噂に聞けば  
新町の傾城ミやらに通ひ詰めてゐるそうなが、もし過ちがあつ  
ては十八軒の飛脚屋仲間にも、又亡くなられた親仁殿にも顔向  
けがならぬ、仲良しのお友達ミ見込んでお願い申しますが、ご  
うかお前様から梅川を斷念するよう意見をしてくれミ、涙乍ら  
に頼み込まれ、八右衛門も最初の内は他人の色事、迷惑千萬な



と思ひをする。そこへ、忠兵衛が水入れを紙に包んで、金包みに見せかけて持つて来る。八右衛門それを誠の金子らしく受取つて證文書くを、母は知らずに安心して奥に入る。後で忠兵衛は「忝けない」ミ禮を言ふを、母御も心配もう遊びも程にしや」ミ八右衛門が言ふを「友達なりやこそ其方の誠心、もう西へは足もむけぬ」ミ誓ふ言葉に安心して、八右衛門は歸つて行く……

日は暮れかかる。忠兵衛は帳場に座つて帳合、そこへ江戸から飛脚がつく、番頭や丁稚が出迎える。其内が催促に來た三百両も無事に着いたので伊兵衛も大喜び、早速忠兵衛は堂島のお屋敷への金届けようミ外出の用意。宰相や馬士は爲替金渡して這入るミ忠兵衛羽織着て奥より出て三百両を懐中に入れ、番頭共に留守のこころなき注意して、外へ出ればいつか日は暮れ、忠兵衛は堂島さして

急ぎ足——で道具廻る。

西横堀の夜の景——川向ふに材木置納屋なきが見えて、川端には柳の木が、しよんほりミ列んでゐる……

前の場の宰相馬士が酒に酔ふて通り過るミ、

「みほつくし、難波に咲くやこの花の、さきは三筋に町の名も、佐渡越後の相の手を、通し千鳥の淡路町、西横堀をう

か〜ミ、心は北へ身は南、米屋町まで歩み來て……

ミ淨瑠璃になつて、忠兵衛が上手の橋を渡つて來て、ふミ氣がつき「やこりや何處ぢや。堂島のお邸へ行く道はこんな所ぢや

なかつた。おミ向ふに見ゆるは西横堀、そんなら思はずかう

かミ、出なれた足がくせになり、ここ迄來たかエ、難儀な足や

なあ……」ミ引返したが「イヤ〜兩へ足が向いたのはあの川

が用有つて氏神のお誘ひか、一寸の間なら大事あるまい。ア、

やめにしやう〜、佛のような母者人を最前もある様におだま

し申した不幸の罪、海より深い御恩の程、忘れてはすまぬ譯、

思ひ返して金おさめ、早う歸つて安心させよう、ミは言ふもの

の梅川が、涙乍らの眞實ぶり、一寸顔だけ見てどうか。引かえ

そうか、やめにせうか、エ、さうしやうなあ……」ミ、

「戀ゆえ迷ふ闇黒の、思案に月も皎たけて、行くも歸るも定

まらず、しばしためらう折からに……

ミ上手から田舎侍のお大盡白瀬三平が、暫間蝶孝や島屋の仲居に取巻かれて出て來るので、忠兵衛はあはてて柳の木影に隠れ

るに、三平は今宵さうでも梅川を身籍する言張り乍ら、幫間や仲居に「よう色男々々」ミ囃し立てられ一梶原源太はエヘンおれか知らん」ミ、目尻を下けてワイ／＼騒ぎ乍ら入つてゆく後姿を、忠兵衛は木影より現はれて見送り「ありや島屋の客あつちへ川を取られては、此忠兵衛の男が立たず、こりやさうしても川の所へ！」ミ行かんとしたが「いや／＼行つたら此金、使ひたからうなア……」ミ懐中の三百両じつミ押えて思案、然し

二世かけ  
た梅川を  
他の男に  
取られる  
ぞ知つて  
は、さう  
してじつ

はぶしあん三度飛脚、戻れば合せて六道の、冥途の飛脚……

忠兵衛はミつ追ひつ、羽織のぬけて落ちるも知らず、思案を重ねた場句が戀は遂に、忠兵衛の理性を征服して引かれるように新町さしてへ急ぎゆく……

配 役	
龜屋忠兵衛	我 童
遊女 梅川	霞 仙
手代伊兵衛	徳 三 郎
母 妙 閑	大 吉
女房おきよ	卯 之 助
丹波屋 八右衛門	壽 三 郎

—幕—

下の巻 新町越後屋の場

此の幕は、もう大方の人の御存じの芝居、大阪人で此のお芝居を知らぬ方はあるまいと思ふ程に、鷹治郎始め幾多の俳優によつて演じられてゐるので、改めて書く程のこともあるまいと思ふので、割愛することにす。

只從來の鷹治郎の梅忠は、筋に於ては同一ではあるが、處々、例えば封印を切る處なすが、多少違つてゐるので、又別種の興味がある。ミに角、「冥途の飛脚」ミ言へば、此の新町の場が新口村を出すのが定例なのに、今度は十幾年ぶりかで龜屋の店から出したのは珍らしい。

冥途の飛脚のことども

近松門左衛門作、「梅川忠兵衛・冥途の飛脚」が竹本座に上場されたのは寛永八年三月で、歌舞伎に仕組んだのは正徳元年正月京都萬太夫座で「けいせい九品淨土」と言つた。同年大阪神山座では「御伽十二段」の切の心中狂言として出した。紀海音は「傾城三度笠」と題して正徳三年十月豊竹座に改作上場した、安永二年十二月堀江豊竹座で上場した「けいせい戀飛脚」は菅專助等が改作したもので、今日多く上場されてゐる「戀飛脚大和往來」は更に之に手を入れたものである。角座六月興行のこの狂言は大近松作を食満南北氏が脚色したもので、木谷蓬吟氏が舞臺監督をされる。(V生)

角座六月興行上演



# 延命院秘事

行友李凡

時

享和三年の春

人物

延命院の住職 日當(二十四歳)我童  
 同 納所 柳 全(二十三歳)壽三郎  
 同 所化 良 眞(二十五歳)市郎  
 同 同 妙 光( )右 若  
 同 寺男 銀兵衛(六十歳位)大吉  
 目明し小松屋三四郎(四十歳位)右田三郎  
 手先 倉吉(二十五歳)關三郎  
 町の娘 おころ(十七歳)霞仙  
 奥女中 糸村(二十六歳)扇雀  
 寺社奉行 脇坂淡路守(四十歳)壽三郎  
 町奉行 根岸肥前守(四十五歳)徳三郎  
 脇坂の匠 鹽山喜内 卯之助

序幕 (一)

(谷中延命院七面堂の櫻花)

|| 享和三年の春、晴れたる日の晝、八ツ下り ||

正面下手より上手へ七分通りまで屋根附の寺の筋塀、下手塀に續いて稍斜めに屋根附の小さき門(地上より一段高く、扉は開いたまゝ)門の上手に直ぐ『七面大明神』と彫附けし立石を建てる。

塀の端より上手は、奥深き一面の櫻林、花満開、その前に『麻疹除御祈禱修法當山』と記せし開帳札を立てる。

塀の前には二三本太き櫻の樹を植え、その下蔭に接待の茶道具(茶釜臺、茶碗等)を据

え、紙に、『ばん茶せつたい』と記して貼付ける、傍に、床几二脚を並べ、尙、門の左右、塀の前、上手前側等に奉納の石燈籠を一対づゝ、都合四組八基を配置す。  
塀の向ふに七面堂の側面を見せる。

目明し小松屋三四郎(四十前後)克明さうな町人風に化け、床几に腰かけ菓を吞んで居り、手先の倉吉(二十五六)職人風の扮装頻りに接待の茶を吞んで居る。

賑やかな題目太鼓、それに鏝口の音見世物小屋の鳴物、等混多に聞えて暮明く。

直ぐ下手より町家の娘、甲、乙。

甲 美しいちゃん、早くき、肝腎のお祖師様へお詣りをしなければ何にもならないんだからさ。

乙 ダツテ妾、阿母さんの代りにお百度を踏んで居たんだもの。

甲 お遅くなつては大變よ、それこそ道が遠いんだから。

乙 歸りには裏門からね、日暮里へ抜けるのが近道なんだよ。

これと同時に上手より武家の女房、

供の下女が咄しながら出る（娘兩人の臺詞と入れ亂れになるやう）

女房 杉や、呪禁の御守札を受けるのはどちらであらうの。

下女 ハイ、此の御門の内とか申して居りましたが。

女房 彼方は定めし一段と人込み、はぐれないやうに氣をつけてね。

下女 ハイ、それは大丈夫でござります。

双方上手、下手へ入る。

倉吉 旦那、どうです、此の景氣は些つと馬鹿くし過ぎる位物ですぜ。

三四郎 ハハ、接待のお茶ア肚サンザ飲んで置いて、寺の悪口でもあるまいが、陽氣は宜いし櫻は見頃、それにお上人様は活佛とき、評判のある偉い方、發向するのが當り前だよ。

倉吉 併し、こう見た所が詣つて居るのは大抵婦女ばかりのやうですが。

三四郎 （四邊を見廻し）、倉吉、汝も其所へ氣が注いだか？

倉吉 矢つ張り親分何かしら……

三四郎 叱ツ、無駄ア云ふ暇にモウ一度（頓

で下手を示し）星の附くだけ當つて見ろよ  
倉吉 遣えねえ、何處に御利益がオツ落ちて居ねエとも限らねえや、ぢやア後方。

目と目を見合せ、倉吉下手へ入る。

見世物の鳴物にて、上手より町家の

老人と丁稚と出で来り、下手より供

先の腰元兩人出で来り、通り流し、

左右へ入る、直ぐ下手より講中の男

女四人。

四人（太鼓を叩き）南無妙法蓮華經、く。

題目を唱へる、上手より十二三の娘

の子泣きながら。

迷子の娘 姉ちやーん、くく。

と双方上、下へ入る。

上手より世話人の若い者一、二、三

が咄しながら出で来り。

一 どうです、敷屋の、こう忙しくつちやア

世話人も講中も埒らないねエ。

二 全くどうも、碌スツが息を吐く間がない

んだからなア。

三 關やアしないよ、油も少々賣つて見る

さ（茶釜の下から其の火を、つけ床几へか

ける）

ト、一、二は茶を呑み。

一 その油より接待の番茶の方がよく賣れる

やうだ、所ではれから門前を一廻り。

二 今日随分出し店の數も多いやうだ、から

お賽錢の上りもウンとある筈だ。

三 何しろ高物がダンく多くなり、小屋が

けの地割が割り切れないといふからな。

一 成程然う云へば輕業に力持、地獄極樂。

二 評判の鶏娘にろくろ首、珍らしくはな

いが景氣になりますよ。

この内下手より寺男の銀兵衛（六十

餘り）水の入りたる手桶を重さうに

携へ出て来る）

三 オ、ツ、銀兵衛爺さん。

銀兵衛 ア、これは旦那方でございますか。

一 昨日今日のこの賑はひで、歳をとつたお

前まで随分骨が折れるだらうなア？

銀兵衛 ナア、お前これも皆なお祖師様の

お利益、お上人様のお力だと思やア別段苦

勞にもなりませんよ。

ト水を茶釜に汲入れる。

二 相變らず達者な爺さんだぜ、なる程接待

のお茶の二番煎じといふ奴だな。

銀兵衛 へい、恠うして釜の下に氣をつけて

置きせえすれやア、大勢のお詣りの衆が、  
どんなに悦ぶかも知れませんか。

三 ぢやア銀兵衛さんに負けねエやう。

二 俺達も揃つて出掛けやう。

一 ウム、今が出盛り、丁度沙時だ。

三人拾遺詞にて下手へ入る。

銀兵衛釜の下の炭を直す。

三四郎 (此内銀兵衛の顔を見て兎角不審の  
思入れ) 銀兵衛さんといふ名前を聞いて思

ひ出した、間違つてゐたら御免なさい、だ  
が、もしやお前さん下谷の山崎町に居なす

つた八百屋の銀兵衛さんぢやアねエかい?  
銀兵衛 へッ、イ、如何にも被仰います通り

その銀兵衛で、ございますが。  
三四郎 イヤ、どうも先刻から、確かに見た

事のある老人だと思つては居たんだが、矢  
つ張り然うだよ、何しろ随分久しッ振りだ

からなア。

銀兵衛 へい、私を御存じだと被仰います、  
お前様は一體誰方様で。

三四郎 無理はねエ、歳の若けえ俺でせえ見

外れたんだ、名前を云つたら思ひ出せるだ

らうな、阪本二丁目の小松屋だ、御用聞き  
の三四郎。

銀兵衛 オ、ッ、坂本の親分!、おゝ親分!

三四郎 判つたかい。

銀兵衛 これはまア飛んでもねえ御無禮を致

しまして、親分さんだ、親分さんだ、その

筋は種々御厄介に成りまして、何時もな

がら御機嫌よろしう。

三四郎 お前も達者で何よりだが、マ、茲へ

掛けるがい、咄は山々だ。

銀兵衛 それぢやア御免を蒙りますが(腰を

かけ) お目に掛るもお耻かしいこんな惨目

な容になりまして。

三四郎 ナアニお前、どんな身上に成らうと

も命があつて遇はれりや目出たい、併し全

く怎んな所に世間を隠れて居やうたア、今

日の今日まで知らなかつたが。

銀兵衛 へい、イヤお話にも何にも成りませ

ん。歳を老つて若い奴等に死に後れたが、

因業の種、ソコには深い成行もございまし

て、スツカリ娑婆に愛想が盡き、三年前か

らこの寺のお上人様のお情けで引取られど

うにかまア惜しくもねえ命を繋いで居りま  
すんで。

三四郎 イヤ重ね／＼お前の不幸も、蔭なが

ら聞かねえぢやなかつたが、併し浮世を捨

てた氣になり、毎日毎晩有難えお題目の御

利益に生きたと云ふのも結句幸福だぜ。

銀兵衛 然うして親分、今日は何かマタ御用

の筋でいも。

三四郎 ナアニ、そんな野暮用どころぢやア

ねえ、餘まり此の寺の評判が高けえから、

急に思ひついた俄か信心遊山半分といふ奴

なんだが、さて出掛けて見ると愕いた、噂

にまさる参詣の群衆、ソレに町方はかりで

なく、武家屋敷の奥向さからも随分お詣り

があるやうだなア。

銀兵衛 へい、三組五組、毎日のやうに

御参詣がございます今日も何處かの若いお

局様が先刻内陣へお入りになりましたよ。

三四郎 それとても皆な日當といふお上人様

が偉えからだ、時々御本丸なぞへもお上

りに成るさうだな?

銀兵衛 モウ始終でございます、先刻若い坊

さん達の話では、今日も程なく芝口とやらのお大名屋敷へお越しだとか。

三四郎 芝口、フーム、(氣を替へ)ヤ、何にしても結構く。

銀兵衛 所で親分はモウ、御本堂へ御参詣はお済みに成りましたのでございますか。

三四郎 イ、ヤ、それがマダ、これからなんだよ。

題目太鼓、拍子木が聞える。

銀兵衛 オ、ツ、丁度今から御祈禱の初まりでは私が御案内いたしませう。

三四郎 然うかい、ヤ、其奴ア何より忝けねえ、せめて尊いお上人のお顔なりとも拜みてえんだ。(と立上る)

銀兵衛 この鹽梅では御本堂へ、ナカく寄り附けないかも知れませんが。

と銀兵衛先きに三四郎上手へ入る。直ぐ下手より以前の迷子の娘がウロ／＼と泣きながら出て来り。

迷ひ子 姉ちゃん——姉、姉ちゃん——と上手へ入る。

良眞 コレ何をするのだ。

妙光 不可ません！

おころ イ、エ、退いて、放して。

良眞 成りません！

妙光 サ、部屋へ下らつしやれ。

所化良眞、妙光(二十五六)が町の娘

おころ(十七)を支へながら、押戻して出で来る、おころは狂亂の如く夢中にこ上手へ、氣を奪はれ。

おころ 後生、お願ひ、切望、妾を御本堂へ遣つて下さい、往かせておくんない、タツタ一言お上人様へ、誰にも云へない内證

の相談がしたいばかり、ソ、それを樂しみに遠い道を、わざ／＼尋ねて来ました者この通りでございます。(と拜む)

良眞 何を馬鹿な事を云はつしやるのだ、あの通りお上人様は今、御修法の眞最中。

妙光 貴い御祈禱の済むまでは、取りも直さず活佛様、傍へ寄るさへ勿體ないのぢや。おころ イ、エ、そんな事妾些つとも構やア

しない、活佛だつて何だつて、矢ツ張り妾の可愛いお人、往きます、妾、どうしてもお傍へ往かないでは。

良眞 串戯を云はつしやるな、それこそ罷が

申します。

妙光 第一が御法要の妨げ、サ、歸つた。と兩僧おころを引立てる、おころ其

手を振り拂ひ。

おころ 嫌や……

兩僧 何？

おころ 妾死んだつて歸るのは嫌や、邪魔にされよばされる程、意地になつても附き纏つてやるんだ、蛇のやうに執拗くあのお上人に。

良眞 まるで狂人の沙汰。

妙光 イヤ眞者の狂人かも知れんよ。

おころ エ、狂人だとも、恥も慮外も忘れてしまつた婦女の執念、どうしてもお傍へやつてくれなければ、然うだ、妾、勝手にあの御祈禱場へ。(駆け出す)

良眞 (袖を捕へて)滅相な、大それたにも程がある。

妙光 待たつしやらぬか、コレ。おころ エ、ツ、放して遣つて……

良眞 飛んでもない。おころ イ、エ、どうしても妾。

妙光 これは大變な力だ。

良眞 放してはならぬ、放してはならぬ（上手へ往かんとする）

おころを兩人にて引戻し絡みになるこの内下手より納所柳全（茶色の法衣、三十二三歳）が出て來り様子を窺ひ、宜き程に傍へ進み。

柳全 コレ／＼待たつしやい。  
三人 アツ。（と愕く）

柳全 何とした事だ、斯様な所で猥らがましい娘の子なぞを引つ捕らへ。

良眞 これは御納所、宜い所へ。  
妙光 何も我々が好き好んで致して居るのではござりませぬ。

柳全 どちらにしても穩やかならぬ振舞、別けても今日は大切なお日柄……

良眞 左様でござります、その邊を心得まして、この女を是非引き留めたいと存じまするので……

柳全 一體、如何いたした次第ぢやの。  
妙光 マダ御存じはござりますまいが、今朝早くから、彼の銀兵衛爺やの部屋へ参つて居りますもので。

良眞 遺縁とか知り合ひだとか云つて居りますが、參る早々我々を附け廻して、是非お上人様に遇はせてくれと煩さく申しまするので……

妙光 外ならぬ御祈禱中の御上人、左様な譯には參り兼ねると、懇々申し聞けましたが何としても承知致しません。

良眞 果ては唯今、御本堂へ飛込み、是非お傍へ參るのだと申して。

柳全 それはちと亂暴だな。  
妙光 宛で狂人同様の仕末にホト／＼飽れ果て居ります所。

おころ （柳全に向ひ）貴僧、お願ひ申しますどうぞ妾をお上人様のお傍へお遣し下さいまし……

柳全 よし／＼ア、……何なりとも望みの通りにかなへて遣はずぞ。  
おころ マ、それは貴僧、眞實の事でございますか。

柳全 わしは法衣を纏ふてゐる、出家は嘘を申さぬものぢや。  
おころ ハイ。

柳全 安心を致すがよい。

おころ 有難うござります。ア、ヤレ／＼柳全 ソコでと、此の娘の事はな、愚僧引受け申すに依り、御身違は御本堂へ……

良眞 如何様、御祈禱も半ばを過ぎました。妙光 では 參りませう。  
兩僧柳全に會釋して上手へ入る。

柳全 コレ娘御や。  
おころ ハイ。

柳全 幸い四邊に誰も居ないやうだし、改めて少し聞いて置きたい筋がある、マツこれへ掛けるがよい。（柳全腰をおろす）

おころ ハイ、それでは。（おころ別な床几に掛ける）  
柳全 どうして此方、あの寺男の銀兵衛とは身寄りか、それとも只の知合ひかな。

おころ （安心をすると言葉が粗野になり）え、知つてゐると云つても、亡くなつたお父さんの古いお友達といふだけなんだから。

柳全 ウーム、宅は何處だ、此方の住居は。  
おころ 淺草の馬道つて所。

柳全 馬道？  
おころ 貴僧御存じ？



柳全 平素一向に用のないところ、名前だけは存じて居るが、シテ、此方の名は？

おころ 妾し、おころ。

柳全 おころとは珍らしいな、デ、お上人様とは何時ごろ、何處でどうして知り合になつたのぢやな。

おころ それは彼の、モウずつと前方——子供

供の時には妾の宅が靈岸島にあつたものだから八丁堀の中村のお師匠さん所で、一緒に踊りを習つて居て。

柳全 踊りの稽古を？

おころ その時分には兄さん／＼て云つてました、兄さんはまだ丑之助と云つて舞臺へ出て居た子供役者。

柳全 エヘン／＼。

おころ 今度遇つたのは去年の春、お母さんに連れられて下谷の伯母さんの宅へ往つた時、兄さんは立派な御出家の姿になつて居

て。

柳全 娘御、此方が話すその御人と、當延命院の御院主たる日當上人とは似ても似つかぬ人違ひぢや。

おころ イ、エ、違つては居りませんとも、妾、その時から毎日々々寝ても覺めても此のお寺の事、御上人様の事ばかり、思ひ續けて忘れぬ暇もなく、焦れ、慕ふて居ました。

柳全 エ、ツ。

おころ あんまり戀しさをせなさに、あの銀兵衛伯父さんの事まで思ひ出し、當分宅へは歸らない積りでお上人様のお傍へ置いて敷きたくお慕ひ申して來ました妾、ねエ貴僧、どうぞ何時までも戀しいお方のお傍に附いて居られますやう、お願ひ、お願ひでございます。

柳全 ヤ委細逐一承つて見れば滿更に人違ひでもなきさうぢやが、掬きびしい本門法華の道場へ、女を圍ふといふことは……

おころ エツ、出來ないのぢやござんすか。

柳全 イヤ、マ出來ぬとは申さぬが、さて、容易でないそれに就いては此方どんなに苦しい辛抱我慢でも……

おころ え、厭いませんとも、屹つと望みの叶ふ事なら。

柳全 凡て愚僧の指圖通りに必らず、みん事守つて見やるか。

おころ 佛になりと鬼になりと成つて見せませぬの念力、シテその辛抱、我慢と仰しやいますは？

柳全 身不肖なれども當山の納所を勤むる柳全が、血肉を搾つた計略、不惑な其方の念願を成就させるその前方、精神堅固な上人に誘ひの水の掛引きは。(とおころに囁く)

おころ えつ、では日參の御殿女中を……

柳全 叱ッ！、大きな聲をしては成らぬ(と立上る)

おころ 上手より銀兵衛が出來る。

おころ オ、伯父さん。(と傍へかけ寄る)

銀兵衛 和女また恁んな所ら、オ、納所様、エ、まだ申上げませんで居りますが、此の娘つ子は……

柳全 イヤ唯今様子は承はつた、お前の知邊の人ださうだな。

銀兵衛 左様でございます、押掛けに當分厄介に成りたいと申してまゐりまして。

柳全 それは一向差支へない義だが、成べく

お前の部屋から外へは出さないやうに氣をつけること、時節柄といひ、兎角世間の口がうるさい。

銀兵衛 畏りました、有難う存じます。

柳全 但し大目に見てつかはすは愚僧の情、御院主には内々だぞ。

銀兵衛 へい、それも承知いたしましたし、ぢや、おころさんや御免を蒙つて、俺の部屋へ。

おころ エ、歸りませう、あの、納所様。  
柳全 ウム。(首肯)

銀兵衛 サア、歸ろう。  
と銀兵衛、おころを促して下手へ入る。

柳全後を見送り、ヂツと思入れ、釣鐘が鳴り、櫻ハラと散る。  
ニヤリと微笑む。

上手より奥女中糸村(二十六才)好みの扮装、先に立ち、腰元四人(内二人は前に上手へ通り流したのと、同一)侍侍兩人附添ひ出で来り。

糸村 柳全様。

柳全 オ、これは、最早や御歸館にムリ

まするか。

糸村 日々の参詣いつも乍ら、大いに御造作に預りました。

柳全 何と致して只々御奇特千萬に存じまする。

糸村 お蔭を持ちまして、妾の御代参もうちと一日にて満願、明日こそは御本堂の内陳へ通夜のお籠りを致し、夜もすがら御上人様より有難い法華八軸秘法の御祈禱を頂きますが、この身の本懐、御利益の程も如何ばかりかと存じまする。

柳全 すれば現世の法華得佛、妙法の功德、必ず共に利益洪大無邊でござりませう。  
糸村 左様なれば、今日はこれにて失禮。  
柳全 お目立ちましてはと御見送りを差控へまする、混雑の折柄お氣をつけられて。

糸村 忝けなうござりまする。  
柳全 お供方御苦勞……  
糸村 御院代によるしく。  
柳全 御機嫌よろしく。

と釣鐘……落花する。

糸村 (空を見上げ)オ、散るは、まるで吹雪と渦巻いて花の命も人間の命も……

柳全 エッ!

糸村 罪な嵐でござりまするなア、おさらば……

と氣を變へ先に供廻り一同を連れて向ふへ入る。  
柳全後を視送り。

柳全 禮儀作法は云ふに及ばず、物腰格好棲外れ、自然と備はる氣高きは、御本丸か西丸か、大々名の御主殿か、打明かさぬだけに尙更良床しいが、歳は二十歳を三ツ四ツか、艶と膏の乗り盛り、チツ権茸には惜しい物だが。  
上手より以前の良眞が駆け出で。

良眞 御納所々々、柳全殿!  
柳全 (ハツとして)。エ、ッ吃驚致した何か用か

良眞 お上人様が芝口へお出掛けに成りまする。  
柳全 オ、それは

上手より院主、日當(二十四歳)緋の法衣に金襴の袈裟、水晶の珠數を持ち、續いて所化光妙、外二人(これに良眞が加はり四人なる)侍侍一人を引連れ出で来る、侍は附際より向

侍 お乗物...  
ふへ。

揚幕にて聲 ハツ...

柳全 芝口までとは餘程の道程、遠路御苦勞  
に存じまする。

日當 何の、宗法の榮えは高祖菩薩の導  
き、更に苦勞とも存せぬが、外々ならぬお  
係り寺社奉行のお屋敷へ、癩疹祈禱のお招  
きとは。

柳全 では汐留の、脇坂様でござりまするか  
日當 されば、聊か合點は參らねど、脇坂家  
は愚か如何なる高貴の御前行とて、此の身  
に心に一點のやましい影を有たぬ氣安さ、  
本門法華經の行者が弟子日當坊と名乗つて  
通るまでの事、必らず心配いたさぬやう。

下手より以前のおころが窺ひ出でッ  
カ〜と駈け寄り。

おころ 貴郎! (と、また駈寄る)

柳全 コーレ! (と引戻し袖で圍ふ)

日當ギツクリ、靜かに珠敷にて身體

を拂ひ、往き掛る。

柳全の袖の蔭にておころ、ワツと泣  
く。

日當思入れ。

珠敷を持直す。

木の頭。

おころ泣き入る。

柳全 叱ッ! (と制しながら見送る)

日當先きに所化、侍一同向ふへ入る  
同時にツナギ幕を引きつける。

序幕 返し

(芝口脇坂家上屋敷離座敷)

前場と同日、夕方前よ  
り日の暮れる頃

正面、藁葺屋根の風雅なる座敷、庇付き三  
方廻り縁(並二重)兩方とも縁の突當り棧戸  
の出入、座敷正面上手床の間、下手は壁に  
て花洞瓦に模の出入、上手横縁側にだけ障  
子を建てる。

座敷の下手は廣く汐入の泉入を見せ、下手  
より石橋を架け、泉水の周圍凡べて山吹の  
満開、橋の下手奥は麿竹の堀僅かに座敷が  
見へる。

座敷の上手は惣植込、雪見燈籠、稍大きな

椿の樹、花が赤く咲いて居り、飛石傳ひに  
上手へ出入、その他手水鉢、いろ／＼の植  
木、飛石、沓脱石、橋の袂に青柳が一本水  
に枝垂れてゐる。

座敷に町奉行根岸肥前守(四十五歳)  
(肩衣に袴小刀)、(紋は蛇の目)が、  
脇坂の家臣鹽山喜内(肩衣袴)と對談  
中の體、琴胡弓の合奏が聞えて幕明  
く。

鹽山 長々とお待せを致しまして恐縮に存じ  
ます。

根岸 イヤ〜御病中とは存じながら、お招  
きに依つて取敢へず推參致した、シテ昨今  
の御容態は。

鹽山 お蔭を持ちまして最早や全快同様にござ  
ります。

根岸 それは大慶、時に先程より風のまにま  
に妙なる音色の聞えるは?

鹽山 お濱御殿に大奥の女中達が汐干狩の催  
しかに聞き及びます。

根岸 如何様汐干泰平の世の春は一段と長閑  
ぢやな。

正面瓦洞口より寺社奉行脇坂淡路守  
(四十才、羽織定紋輪違ひ袴、小刀)



脇坂 さて今日は、寺社奉行とか町奉行とか申す堅苦しい、表立ての役儀格式は別と致し、只の脇坂、唯の根岸で打寛るぎ、罪も他愛もない言葉敵に相成らうと存じ申すが

根岸 それは、打解けての交はりこそ、自ら、眞の親しみも生ずる道理、上人にも萬事心措きなく。

日當 御懇の仰せ、冥加至極に存じます。下手奥縁側より林齊茶碗を帛紗に乗せ持出で日當の前に置く。

日當 取手下手奥へ入る。取り上人は、當年何歳に成らるゝな。

根岸 二十四歳にござります。

脇坂 若いな、佛門の修業もマダこれからぢや。

根岸 何歳にして剃髮得度致された。

日當 十六歳にして双親に死別れ、寄る邊なき身を御佛の法衣の袖に救はれまして、先代院主日聰の徒弟と相成、初めて法華の行法に入りました。

脇坂 シテその法門修業の次第は。

年、更に本山たる京表、妙顯寺の僧堂に入つて、マツ觀心本尊鈔守護國家鈔その外三百有餘卷の教義に祖師の高徳無邊なることを悟り、師の坊病氣の知らせに依て歸山いたしたが二十一歳の折。

根岸 院主を繼承せられしは。

日當 それも同年、師の坊示寂せられしに就き觸れ頭たる谷中瑞林寺よりして公儀、お係りへ願ひを立て、法燈相次ぎ十六代の院主と相成る。

脇坂 延命院草創の來由はの。

日當 素、眞言宗寶珠寺の遺跡なるが故に、用ひて山號を寶珠山と稱へ、慶安元年開基日長甫めて一字を建立致した。

根岸 境内に安置せらるゝ七面天女の緣起と申すは。

日當 それぞ日蓮法華の守護神にして、慶安三年、御本丸大奥の老女三澤の局、心願に依つて甲州身延七面山に一千日の參籠中、或る夜の靈夢に龍の鱗一枚を感得し、これを境内に七面大明神として勸請仕つた。

脇坂 上人々々！

日當 ハツ。

脇坂 其許の宗門において秘法とか秘密とか人に知らさぬ不思議の戒行もあるやに承はるが、それは如何やうな儀を申すのぢやな。

日當 お尋ねではござりますが、秘法、秘密はこれ畢竟するに心に映る影にして、行ひの上の形にあらず、三大の秘法は乃ち法華經の根本にして、又宗教の五綱ともいひ七字の題目にも八軸の秘奧を包む、皆、教への上より説きましたる稱へかと心得まする。

根岸 次手ながら貴僧の昔のお身分は。

日當 ハツ。(當惑)

根岸 出世の土地は何處ぢや？

日當 生れは京の町父は、浪華の歌舞伎役者拙僧幼少の御りは子供役者として紅白粉に装ひを凝し舞臺の上に立ちましたる、眞にお耻かしき身の業體、消へも入りたう存じまするが、お歴々様お尋ねに對し、隠しまするも失禮、と只有りのまゝをお答へ仕りまする、その餘の事は幾重にも御覽察願はしう。(と差俯向く)

兩人ソツと顔を見合はせる。

脇坂 イヤ、人々との交りに、身分素性の高下などは論外、卑下斟酌には及ばぬこと。

根岸 我ながら持前の些つと詮索が過ぎ申したの、上人、必らず意にかけられぬやう。日當 どう仕りまして、出家の身には過越し方の、果敢ない夢でござりました。

時計の音六ツ。

脇坂 オ、暮六ツか。

日當 思はぬ長座、愚僧はこれにてお暇を。

根岸 モウ参らるゝか。

脇坂 何の風情もなく、却つて迷惑致されたであらうの。

日當 恐れ入ります、失禮幾重にも、お許しを。(と立ち上り、縁から降りる)

バタ／＼と、椿の花落ちる。

根岸 花の色香の美しさも一盛り、やがて腐れて落ち椿。

日當 エ、?(椿を見る)

根岸 醜い姿ぢや。

日當 これを三世の教相と申します、美しいが眞か、醜いが眞か、花の心は花より外

に知る物なく、人の心は已れ自身に顧みるより外はござりませぬ、御免下され。

と悠々下手へ入る。

根岸 さて、何と見らるゝ。

脇坂 マツ尊公のお鑑定から。

根岸 イヤ、豫てより相學のお嗜み深しと聞き及ぶ尊公様の御批判は。

脇坂 人品骨格賤しからず、天晴器量あるべき才物、なれどその器量と申すが怖しい。

根岸 ウーム、デ此上の御才覺は。

脇坂 いや、我等が非常の奥の手、一兩日内には何分かの虚置をとり申さう。

根岸 さらば、餘所ながらにお手際を拜見いたすとして拙者も御免を蒙ると致さう。

脇坂 御歸館とな、それは。(と手を鳴らす) 下手より以前の鹽山が出て来る。

鹽山 ハ、ア。

脇坂 玄關までお見送りを。

鹽山 心得ました、イザ。

根岸 大儀でござるな、御病中尙御大切に。失禮を仕る。

脇坂

鹽山 先に根岸下手へ入る。

脇坂 立て縁側へ出で。

脇坂 オ、長閑な裡にも一日々々と、焦立たしう春は暮れて逝く。あの老功な肥前守、役遣ひの厭に遠慮して、何にも云はずに立歸つたが、...さて此の上の取るべき道は... (と考へる)

この内縁側上手奥より中老桑村、手雪洞を袖にて圍ひ、忍び足に出で来り、障子の蔭にて様子を窺ひ。

桑村 御前様。

脇坂 誰ぢや?

桑村 妾にござりまする。(と前へ出る)

脇坂 オ、桑村であつたか。

桑村 延命院の上人様は。

脇坂 既に先刻、歸山致した。

桑村 恐れながら御前様、お思召の儀は?

脇坂 それに就て、近うよれ。

桑村 オ、暗うなりましたに、マダ御灯も;

脇坂 イ、ヤ宜い、灯はなくとも話は解る、和女が日々辛勞もきこそとは存じ居るが、天下萬民のため、寺社奉行といふ大

役の表。

桑村 では俺くまでも日當上人を。

脇坂 疑ふてかゝるも大事の上の大事と思へ

ばこそぢや、初めて遇ふたる彼の相好、天  
停平かにして人中狹り、下層裕なるは人に  
敬ひ愛せらるゝの象、さり乍ら、臉上に薄き  
曇りを帯び、眼の内、濡みて察官に亂れあ  
り、遂に女色に身を滅ぼす。

桑村 エ、女の色香に取亂し、あの命までも  
滅しまするとな。

脇坂 惨忍、邪淫の大悪相、此上は猶激に及  
ばず、歌に齊しき彼奴が本性、延命院一山  
の加持祈禱の秘密を残らず曝き立て、目に  
物見せてくれやうばかり、婦人の信仰特に  
篤く、通夜参籠に町家武家方の女達數多入  
込む等、唯事ならざる世上の噂。

桑村 シテお石捕のお手筈は。

脇坂 組の興力に申しつけ、オツ取り圍んで  
只一網と、手配り萬端相定まつたが、此上  
は動かぬ證據、その糸口の蔓一筋。

桑村 御安心を遊ばしませ、それ程堅い思召  
となら、不束ながら桑村が、二ツなき身に  
代へまして。

脇坂 仕遂げて見せるか。

桑村 幸い明夜は満願のお籠り、その節吃と

賣僧の秘密を。

脇坂 なれども彼は惻巧者、只かりその口  
先では、のう。

桑村 それも覺悟を致して居ります、婦女の  
身には男に負けぬ強い力がござりまする。

脇坂 さては愈々。

桑村 忠義の爲めには代へられませぬ(泣く)

脇坂 左様か、よく申しつけた、過分に存ず  
る、此度の手柄は淡路守の働きでなく、和  
女からの賜物、これにて寺社奉行勤役以來  
の御奉公も出来ると申すもの、改めて禮を  
申す。

桑村 それは餘りに恐れ多く、勿體のう存じ  
まする。

脇坂 (脇差を抜き)女一生に一度の大役、余  
が饒別ぢや。(と桑村に與へる)

桑村 (押戴き)天下の爲めにお盡し遊ばしま  
す御前様の御心に肖かりますやう、有難く  
頂戴いたしまする。

脇坂 恠様な所に何時まで長話も致し居られ  
まい、人目にかゝらぬ内、部屋へ退つて休  
息いたすがよい。

桑村 ハイ。

上手奥より、家來一人出で來り。

家來 ア、御前、マダ此方にお在でござり  
ますか、エ、御灯の用意を……

脇坂 それには及ぶまい。

家來 ハツ。

脇坂 何か用か。

家來 お食事の用意が整ひまして。

脇坂 オ、デハ居間へ歸つて。

家來 お供を仕りまする。

脇坂、思ひを残し家來を連れて上手  
奥へ入る。

桑村 (脇差を取直し)、四年此來お仕へ申し  
たこのお邸の御奉公も、後一日……明日の  
夜半に見る夢は、地獄か、但しは極樂か。

(脇差を抜いて見入る)

瓦洞口が開いて脇坂が様子を窺ふ。

桑村偶と顔見合はせ、愕いて雪洞を  
吹き消す。

“木の頭”

瓦洞口閉る。

桑村鞘に納め、脇差を抱へて思入れ  
誂らへの鳴物、拍子木。(幕)

二幕目 (一)

(延命院祖師堂内陣の裏座敷)

前幕の翌日、春の夜五ツ時より

前側、總欄間、正面真中が貼壁、所々に御簾の掛りし黒塗の曰く窓、その上手が床の間、貼壁の上手は奥に廊下(上、下へ通ふ)を見せその向ふ内陣の裏手の壁、黒塗の櫛窓。

上手横、同じく櫛窓に貼壁。  
下手横同じく壁にて、下部が押入、大形の襖戸、その下手が杉戸の出入、鐵の金網の行燈。

所化良眞、妙光が差向ひになり机の上にて守札を折り重ねてゐる。

片隅に常盤津色文字が眞盆を控へ、眞を煙らし居る。題目の柏子木だけ開へて幕閉く。

良眞 妙光さん、兎に角、是れ位にして置いて御納所に見て貰ひませう。

妙光 天氣の悪い故か、今夜は大分參詣が少ないうちやな。

色文字 マア、これでお詣りが少ないんですつて。

妙光 多い時にはこの本堂へ一杯、足も踏み

込めないやうに成ります。

色文字 へー、驚きましたねエ、何といふ素晴らしい人氣なんだらう、淺草の太郎稻荷様だつて、恧んなではありませんからねエ

良眞 色文字さん、只今お説法が初まつて居りますから、御聽聞なされては。

色文字 嫌な事、妾お説教なんか眞ツ平ですよ、お祖師様の信心よりは、お上人様のお顔を見に来るんだから。

妙光 コレは怪しからぬ。

色文字 眞實さ、あれでお上人様が、モツと小意氣だと、ネエそれこそウンとお詣りが

あるんだが、顔に似合はぬ野暮堅いつたら全く仕末に終へないんだからネエ。

良眞 アア若し左様なお話は。

色文字 アア不可ないの?

妙光 茲は御本堂の内御座いますから。

色文字 オイヤオヤ師匠が師匠ならお弟子も御弟子、粹も甘いもありやアしない。

廊下の上手より弟子の娘△□が顔を出し。

△ アアお師匠さんはマタ恧んな所に。

□ 早く彼方へ被來いよう。

色文字 ダツテき、舞臺ばかりぢや詰まらないう、恧うして樂屋へ入浸るのが眞の最良と云ふ物なんだよ。

△ 皆も待つてゐるんだから。

□ 妾達と一緒に行きませう。

色文字 仕様がないうえ、阿惚も三年つて事があるからマア、穴の開く程お上人の顔見たゞけで得心するか。

△ サア早く。

色文字 今往きますよ、アイ大きにお邪魔をいたしましたネエ。

と立上り△、□と共に廊下を上手に入る。

良眞 彼の女は何處から來るであろう。

妙光 金杉邊とか云ふ事だが、色狂人には困つたものぢや。

良眞 困ると云へば彼のやうな嫌らしい參詣人が、多くなる程お上人様が御機嫌が悪くなる。

妙光 然うぢや、近頃はとんと浮かぬ顔、何か大きな配事でもお有りなされるのではなからうか。



良眞 どうぞお身體に障りなぞしなければ宜  
いがなア。

下手の杉戸を開けて寺男銀兵衛が出  
て来り。

銀兵衛 ハテナ、此方にも、居ねえやうだな  
ア。

妙光 爺や、今頃に居ないとは何がぢや。

銀兵衛 彼のおころと云ふ娘つ子が、マタ部  
屋ン中から飛び出したんだ。

良眞 オオ、そのおころとかいふ娘なら、ツ  
イ日の暮前、題目石の蔭で柳全さんとタツ  
タ二人立咄しをして居たやうだが。

銀兵衛 ヘー、納所様と、所がその納所様も  
急に何處かへ出かねなすつたか、庫裏にも  
姿が見えないのでネ。

上手奥にて大勢の参詣者が口々に題  
目を唱へる聲。

妙光 どうやらお説法もお仕舞になつたらし  
いな。

銀兵衛 ぢやアソロー、お夜食の仕度しどに掛る  
として仕末しまつに終へねえ厄介娘やくげにょう、餘計な世話  
まで焼かせやアがる。

と銀兵衛つぶやきながら杉戸の内へ

入る。

良眞 デハ私達もこの間に一休み。

妙光 彼方で暫く、寛ぎませう。

兩人打連れ廊下を下手へ入る。

題目太鼓。

杉戸を開けて納所柳全が健か酒に酔  
い、貧乏徳利を法衣の下に隠し態と  
らしぶ装ふて出で来り。

柳全 大層寂然じやくぜんいたして居ると思つたら、タ  
誰も居ない、所化達しやくたはドウ致したのだ、  
ウーイ（と押入へ目を注げ、襖戸へ手を觸  
へやうとする）

ハヅミに杉戸より銀兵衛が、茶碗へ  
水を入れ、片手に風呂敷包みを携げ  
て顔を出し。

銀兵衛 納所様！  
柳全 驚き押入の前に座る。

銀兵衛 お冷水を持つて参りました。

柳全 銀兵衛か、や忝かたじけけない（受取つて飲  
み）ア！美味しいな、正に甘露かんろう（飲み干す）

銀兵衛 それにタツタ今、お前様の後から、  
見た事もねえ妙な男が、これを納所様にお  
届け申してくれと、包みのまゝで置いて往

きました。

柳全 解つたく、イヤ宜しい確かに受取つ  
た御苦勞々々々。

銀兵衛 グがお前様、今夜は御酒を召上つて  
被かざる御様子。

柳全（空嘯くさせき）左様かな。

銀兵衛 左様かなでは御座いませぬ、假且かりあに  
も大切な御祈禱ごにたう最中さいちゆうに。

柳全 盤ばん若湯わがゆが不可ぬと申すのか。

銀兵衛 お宗旨の事は何も彼も、よく御存じ  
のお前様からして、左様なことをなされて

はお上人様せんじんさまに濟すまみますまいかと。

柳全 ウ煩わづらいな、宗門しゆもんの講釋かうじやくを寺男てらのおにの貴様風  
情じやうに開ひらかせて貰もらふ柳全りゅうぜんではない、白痴ばか奴やつ。

銀兵衛 ヘイ、オ、お氣いきに觸ふりましたらどう  
かまア御勘辨ごかんべん下さいませやう。

柳全 餘計な世話よけいな世話を焼く暇ひまに、部屋へやへ歸つて  
内職うちやくの、草鞋わらじの紐ひもでも拘かまふがよいわ、退れ

銀兵衛 失禮しれいな事を申しました、御免ごめん下さい  
まし。（往いきかゝる）

柳全 待まちて〜銀兵衛。

銀兵衛 ヘイ。

柳全 何日もの、ソラ、美しい奥女中な。

銀兵衛 ヘイ、日参をなさる、お局様でございませうか。

柳全 今夜も定めし、御参詣になつて居るであらうな。

銀兵衛 宵の裡からお見へで御座います。

柳全 一七日満願のお通夜か、イヤ退つて宜しい。

銀兵衛 左様でございますか。

銀兵衛始終柳全の舉動を怪しみながら杉戸の内へ入る。

柳全 アイ、近頃になく、氣持だ、どの道今夜は一か八か、破れかぶれの法衣の袖どれ(袖を捲り、胡座を掻き、徳利を出して手酌で茶碗に注ぎ、飲み初める)

廊下の上手より院主日當、今説法を終りし體にて出て來り、偶と柳全を見て、立ち縮む。

柳全 オ、之はお上人、エ、日々の御修法、ゴ御苦勞千萬に存じまする。

日當 柳全此方、場所柄の辨へもなく、この光景は?

柳全 ハ、イヤ何とも早や、實は先刻、

久し振りにて小林平兵衛と申す昔の友人が訪ね参り、餘りのなつかしきツイ門前の煮賣店にて一盞酌み交し、その節お上人が日夜の御戒行、定めし御疲れの程もお察し申し、お氣晴しにと御覽の通り需めて参つた盤若湯、御鬱散のため、一口きこし召されては。

日當 何、愚僧に飲めとなの!

柳全 柳全、オ、お酌を仕りまする。

ト茶碗を出す。

日當 さては此方、この日當に目前、五戒を破れと申すのぢやな。

柳全 ドド、どう仕まりして、御意に召さぬを承知の上、強つてとは申しませぬが、お上人へ、俄坊主の柳全は在家の凡夫も同じこと、好きな酒でも飲まねえぢやアムシヤクシヤ肚が治まりませんからねえ。

日當 デハ大枚の金子の強請を斷つた、愚僧へ對しての面當てにか。

柳全 然う氣取られて是非のねえ、眉毛に火のつく金の工面、モシお上人様、ぢやア百兩金のお願ひは、何うしても出來ねえとお

斷りなさるので御座いますか。

日當 コレ其方も納所を預かつて大低様子は解りもしやう、塚家と申せど數へる程、別に寺領のあるではなし、寄進供物や賽銭の上りも乏しい、貧乏寺、此度の癩疹禱にせよ、愚僧に強ち利慾の高めんするでなく諸人の難義を助けやう眞實の慈悲心から。

柳全 勿體ねえなア、貴い佛の御心と申すのでハ、併しながらお上人、眞の御慈悲か存じませぬが、今度の祈禱で一備けと仕組みを立てたは此の柳全。

日當 それも諸入費差ツ引いて若干手許へ残つた中を、右か左へ三兩貸せ、五兩貸せとの此方の無心、が積つて彼是二十兩。

柳全 フーム、ぢやア御院主、お前様それを今更洗ひ立てして、愛想盡しをしやうと成さるんだね。

日當 何の、此方に愛想は盡かさねども、金子の事は此場限り、キツパリとお斷り申す。

柳全 駄らつせい。

日當 ウム、?

柳全 ヤイ日當、汝昔を忘れたのか？ 圓い頭で緋の法衣に鹿爪らしく珠敷を爪繰り、今日連だのイヤ活佛だのと、人に敬ひ奉らる、その化の皮を引つ剝がして汝の齷齪洗えざれへ。

日當 コレ柳、ナ、ナ何を申戯（廊下へ氣を配る）

柳全 ビク／＼するねえ、納所坊主の柳全なら斯んな御詫に吐かねえが、還俗すりやア天下の直參、御家人岩田長十郎、拙者は武士だぞ。

日當 ヘイ。

柳全 汝如きの青二才、一夜造りの賣僧野郎に、安く見られて堪る物か、こゝ日當、ヤレ道心堅固だの、イヤ戒律不犯だのと、口幅つてえ汝の蔭の行爲を、今日の前にさらけ出し、戒無残の動かぬ證據を見せてやるから待つてゐる。

日當 ナニ愚僧を破戒だ、無残どとな？

柳全 無残も無残、女犯の亂行（押入の戸を開ける）

中よりおこころが轉び出で。  
おこころ お上人様。

日當 アツ！

おこころ 遇いたかつた、遇たかつた！（おこころ夢中になつて日當に取纏る）  
日當 和女はおこころ殿、何うして今頃斯様に。

おこころ どうも斯うも有やアしない、急に遇たくつて遇たたくつて、それこそ妾壇らなくなつたから貴僧の傍へ附いてゐる氣で昨日から。

日當（法衣の袖を拂ひ）何を馴々しい戯れ言コレ、左様なことは申さぬもの。

おこころ イ、エ申戯では有ません、お別れ申してそれから後は毎日夢にも現にも、貴僧ばかりを思ひ通して忘れる暇のない妾、可愛想だと思召して。

柳全 どうだ生臭、此奴ばかりは拔差なるめへ。

おこころ 戀しい、戀しいお上人様（おこころ又傍へ寄る）

日當（突退け）エ、ツ寄るな、寄てはならぬ戒行未熟の日當なれども、淫らがましき女人の近附きなぞさら／＼此身に覺えはないおこころ イ、エ、イ、エそれは御身悞、薄情

といふもの、今更妾を知らないなぞと。

日當 成程此方は幼少よりの見知越し幼馴染と申すまで、その後お目に掛つたなれど。

おこころ え、その時に、その時に……  
日當 イ、ヤ別段深い親しみの有らう筈なき我等に對し夢にも覺えぬ云がよりは、僧侶の身として眞に迷惑！

おこころ 何の、それは嘘、皆な嘘。

日當 愚僧が嘘を申したと……  
おこころ 去年下谷の伯母さんの宅で、圖らずお出遇ひ申した時、貴僧は儼しくそのお口から妾を梁々可愛い娘ぢやと。

日當 馬鹿な、馬鹿な、何といふ恐ろしい偽りを。

おこころ モウ、怨うなつたら妾、離れやしない、離れやしない、死んでもお傍を離れやしない。（ト又纏りつく）

日當（おこころを取つて押へて）清淨無色に身を固め、專念法華の行者たる此日當を生きながらに、十惡五逆の畜生道へ、墮落さんとする、世にも情ないとも淺猿しい企圖、汝は惡魔、夜叉、外道奴（おこころを疊に擦

付け思はず珠数を振り上げる)

柳全 ヤイ待て、汝その娘をどうするつもりだ。

日當 アツ。(振り上げた手を下す)

柳全 今振り上げた珠数の手は何だ。

日當 アツ。

柳全 上行菩薩を拜んだ手で繊弱い女を打擲するのが、正しい僧侶の行ひか、殴るなら

殴れ、殺すなら殺して見る、サア打て、ナ

ぞ打たネエ、女が怖くて打てねえのか。

日當 ウーム、ア、仕方はねえ(苦しみ、力

なくおこるを突放して涙を拭ひ氣を變へ)

モシ、岩田の旦那へ。

柳全 何?

日當 仕方アございませんモウ此上は、延命

院の院主日當でなく、ヘイ昔ながらの歌舞

伎役者丑之助になつてお話を致します、ど

うかマア私のいふ事をお聞きなすつてお呉

んなさい。

柳全 之やア面白い、汝がソコまで碎けて出

れやア長十郎何にも申すまい、どんな事だ

か云つて見る。

日當 ネエ旦那へ、御承知の通り丑之助は肚

ン中からの役者氣質、年端のいかねえ時分  
から色の戀の面白可笑しく淫な眞似を仕  
つくした揚句が、お定まりの三陀羅陀、煩  
惱、女を蕩すばかりでなく、種んな悪事に  
此の首はダンダン細くなつて来る、此奴ア  
何うやら世の中が剣呑だ、怖氣え懐つて居  
る矢先へ、親父が死んでしまひまして。

柳全 それは拙者も存じてゐる。

日當 母親の方は疾に亡くなつたし惡黨にも

似合はねえ、變に心細いやうな氣が出る

今度我身のして來たことが怖くなり或賣下

に見て貰つた所が、お前されには女難の相

がある。

柳全 ホ、色男は違つたもんだなア。

日當 茶化しては不可ません、油断をすると

女のために應着のねえ命まで亡くなると、

言はれた言葉がこの胸へピンと徹へたん

でソコで生涯女には縁を有たねえ、出家に

なつて佛門へ入らう一つは吾身の罪障消滅

親兄弟の後世の菩提と、こう考へて此寺へ

飛び込ましたが其日を限り、之や嘘でも偽

はりでもございませんよ、馴れない修業や

お經の稽古に散ぎつばらの愛い目辛い目、  
五戒を守つて一生懸命、艱難苦勞をした甲  
斐にヤツと茲まで漕ぎつけて來ましたが、  
ネエ、それに今更旦那の口から昔の疵を突  
つかれ、此の娘つ子からは覺へもねえ女犯  
の冤罪を云ひ立てられ、是が世間へ表向き  
取り沙汰をされた曉の、私の身體はどうな  
りませう。

柳全 ウム!

日當 永エ月日の辛抱苦勞も水の泡、それ

そ泣くにも泣かれません! ネエ旦那、愛

なんで、可哀想な坊主を一人救つてやろう

不憐がつてやろうと思召し、今夜のところ

は何分にも御勘辨下さいませやう……

柳全 ぢやア一切何にも云はねえで、許して

くれと申すのだな。

日當 兩手を突いて此の通りお願いを申上げ

ます、おころさん、お前さんにも日當が折

入つてお願ひ申す。

おころ でも妾は眞實貴僧の事を、ソそれに

茲へは柳全様が入つて居ると被仰つて

柳全 え、つ、ペラ〜と汝の口を出す様ぢ

やアねえ。

おころ ダツて妾の頼んだ首尾を……

柳全 引込んで居ろい、所で成程巧えものだなア。

日當 えつづ。

柳全 汝は役者だ、芝居は相手のもの、涙を流して俺達兩人を泣き落しの手にかけてやうたつてドツコイ然うは抜けさせねえ、そりやア成程、拙者にしてもよく、深え縁なればこそ、身の置所のねえ中から汝を便つて此の寺へ納所奉公、幾らか恩義はあるにせよ、それとこれとの咄しは別物、岩田の口一つが左程剣呑だと思つたら、小判を詰めて蓋をしる、高が百兩 かけ引なしだ。

日當 サーそれが手元にある位なら、七重の膝を八重には折りません。

柳全 何だなアオツ、宜い悪黨にも似合はねえ、意久地のねえ事を申すなよ、壁へにも云ふ通り坊主丸儲けと、百兩は思か三百兩か、五百兩でも、ツイ目の前に轉がつてゐるんだ。

日當 百兩の、金が目の前に……

柳全 解らなけりやア訓讀してやるが、如やおころ え、妾……

柳全 誰ぞ來ねえか、暫く廊下を見張つてゐてくれ。

おころ アイ。(と廊下へ出る)

柳全 談は入證だ、耳を貸しねえ(と日當に睨く)

柳全 ナ、とマア云つた寸法よと(睨きつづける)

日當 (吃驚)ゲツ、あの満願の奥女中を……

おころ え、女中?(奥女中の奥におころ吃つとなる)

柳全 どうだ一番、この柳全を軍使に使つて女人濟度の生佛と榮華の花を咲かせて見るか、但しいやなら、俺の口から人の知らねえ汝の悪事を根こそぎ世間へ云ひ觸らせるマタ一方には此の娘が戀の叶はぬ意趣晴しに、女犯の罪を吹聴すれやア、汝の身妹もこの延命院の屋臺骨も骨灰微塵に碎けて奈落へ眞逆様、オイ如や、和女だつて此程までに戀慕つてゐる坊さんに見棄てられては此まゝに泣いて我慢も出来ねえだろう。

おころ 當り前さ、お上人様に嫌はれたら妾

や面當に茲のお寺でシ死んでやるから。日當 え、つ。(標とする)

柳全 さ、戀と無常の追分道。おころ (泣く)妾は生きるか死ぬの境。

柳全 何方へ足を踏み出すんだ。

日當 ウム、祖師の利益に見放されたか絶對絶命(ト珠數の緒を切り)八萬地獄へ一足飛び旦那、一杯頂きませう(ト胡座になる)

柳全 それぢやア汝。(茶碗を指す)

日當 おころさん、酌をたのむぜ。

おころ アイ。

トおころ酌をする。

日當 法華行者の日當から、今葉平の丑之助へ還俗すりやア氣が強い、オツ柳全、モウ手前なんぞに這風み泣つて面下げぢやア居ねえんだぞ。

柳全 ぢやアオやるか、やるのか。

日當 どんな種でも持つて來い、只一口に咬み碎き、片つ端から科して見せらア。

柳全 (と飛上り)傳え、腕も度胸も天下一後光の射したる大悪黨、話が極まりや祝いの印、之も下物に後で一杯(風呂敷の中より山鳥の死骸を取出し)ソーラ、焼いて

食ふとも、煮て食ふとも今が膏の乗り盛り  
日當 殺生次手にこの命鳥。

おころ え、つ。

日當 安心をしねえ、今から昔の丑之助だ、  
幼馴染の和女とも、仲よくしやうぜ。  
おころ それで妾の嬉しい願ごと。

上手真にて。

衆村の聲 お上人様、お上人様。

柳全 ア、あの聲はつ……

日當 通夜のお女中。

柳全 ゲ、ツ、其奴ア大變、オツ姐や、和女  
は暫く外したく院主、宜いかい、徳利を  
早く片付けてくれよ姐やア此方だ。

おころ だつて妾は……

柳全 え、ツ愚圖くしちやア居られねえん  
だ。

柳全、無理におころを杉戸の中へ押  
入れ居住居を直す。

日當は徳利、山鳥を押入へ仕舞ひな  
ぞする。

衆村 奥女中衆村廊下の上手より出で來り  
衆村 御院主様、柳全様もこれにお在でござ  
いましたか。

柳全 オ、くこれはお局、日々遠路の御參  
詣、イヤ御奇特に存じます、別けて今宵  
は御満眼、定めし御利益も洪大と先づ以つ  
て祝着申上げます。

衆村 お陰を持ちまして、代參の儀も滞りな  
く相済み、主人、心願もどうやら成就に近  
づきました、これ皆高祖大菩薩の御加護、  
二つにはお上人様お骨折、その御禮のため  
今宵一夜の參籠りにござります。

日當 その並々ならぬ御信心に、やがて妙法  
蓮華の花咲き實を結びませう、これを佛果  
と申します、皆具圓滿。

衆村 就きましてはかねく仰せられました  
る八軸秘法の御祈禱を、是非御修法下さ  
りますやう。

日當 そりや宗門の三大秘法をそれ程までに  
御所望とな。

衆村 所望いたさねばなりませぬ、命にかけ  
ての信心でござりまするもの。

柳全 如何様これは左もあるべきこと、お上  
人様、善は急げでござりまするな。

日當 心得申した、さらば之より別室におい

て……(立上る)

衆村 いやく望みの時節到來。

柳全 えッ 嬉し涙が先に立ち。(泣く)

衆村 (苦悶)愚僧は元の修羅煩惱。

日當 何と仰せられます。

衆村 いや、素より煩惱即菩提、イザ、修法  
を致し申さう。

衆村 さらばお供致しませう。

銘々、それく思入れ、日當先に衆  
村、廊下を下手に入る。

柳全、その後を窺ひ、元の座に復し  
酒を飲み始める、杉戸を開けておこ  
ろ駈け出て、廊下口を眺めシク、  
泣き出す。

柳全 オヤ、どうした、何が悲しくつて泣い  
てゐるんだ。

おころ 妾、口惜しい、どう、どう考へても  
……

柳全 口惜しい?

おころ 妾の大事な、お上人様を譬へ一時半  
時だつて、あんな、あんな綺麗なお女中な  
んかの自まゝにはさせられない、妾や嫌だ

くく。

柳全 申、串戲云つちやアいけねえ、な、俺が昨日から、あれ程諄く云つて聞かせてある筈だぜ、今夜を無事に過したら、明日からきつとお上人の身軀はお前一人の好き自由、それを承知で先刻のやうにあんな色つばい言ひがかりをつけ俺が教へてやつた通りにさんざ、お上人を困らせたんぢやアねえか。

おころ 先刻はその氣でゐたんだけれど、考へて見れば口惜しくつて、口惜しくつて、立つても居ても居られない、矢張り妾やア嫌なんだから。

柳全 今になつてお前、そんな無理を云つたつて仕やうはねえ。

おころ え、もう此上はどうしてやるう、どうしてやらう、さうだ、これから妾、お上人の傍に附會て居て……

柳全 げつ  
おころ 離れやもない、眞實に離れやしない意地から邪魔をしてやるんだ他に仕様はありやしない、さうだ。(と廊下へ駆け出す)  
柳全 (驚き)エ、何、何をしやアがるんだ。

(と引き戻す)

おころ よろめき押入の前へ例れる、氣注いで押入の中より刀を取出し。おころ 止めたつて止る物か、恨めしいとも憎いのは彼の奥女中、奴、いつそ殺して。(駆け出す)

柳全 エ、ツ巫山戯るねえ、此の阿麗つ女奴…… 第一危……

おころ イイエ、往かして、往かしておくれ  
柳全 何をいふんだ刃物が危ねえ、離せよ。

おころ 往かせて……  
柳全 え、離せつたら……

おころ 死んでも妾……  
柳全 邪、邪魔するねえ。

と突放す、おころは刀の鞘だけ抱いて下手へ倒れ泣き入る、柳全の手に白刃が残り、廊下の敷居際に突立つこの見得よろしく、雨の音にて。  
"道具廻る"

二幕目 (二)

(同じく院主日當の居間)

正面、上手に床の間、違ひ棚、下手が二枚建の大形な繪襖、上手横は塗骨の書院障子

それを開けると内縁、雨戸が締まつてゐる下手横は壁、衣桁に緋の法衣が掛つて居り宜き所に青きもじ張りの西瓜行燈が點つてゐる、床の間に鬚題目の懸軸他に經机、香爐、經文等  
雨の音が續いて。

道具納まる。

やがて正面の襖が開き日當、衆村(好みの扮装)が肩を並べ頭を垂れて思ひく／＼の考へに沈みながら出て來り

衆村 日當様。

日當 衆村殿。

衆村 眞に女は罪深い者でございます。

日當 それを今更申されたとて。

衆村 嬉しい悲しい妾の願ひは叶ひましたがお痛はしいは貴僧のお身の上。

日當 此方の色香に心を奪はれ、墮落いたしましたこの姿が、それ程までに淺猿しう見えま

するか。

衆村 そ、それは。(口籠る)

日當 昔は昔、法門に、精進持戒の難行苦行を此方様の、情けに代へてタツタ今、貴き

佛心佛性から、元の凡夫の惡業へ、還俗い

たした此の日當、それを惜いの耻かしいの  
と何、何の後悔するどころか、マダ見ぬ眞  
如の月よりも、ツイ目の先の煩惱の花の眺  
めが懐しい、法衣の下には人間の、温い血  
が通つて居ります、シタガ此方殿ヨモヤ  
愚僧を此のまゝに見棄てはなされまいな  
ア。

衆村 まア水臭いその疑ひ、寧ろお恨みに存  
じまする、見棄てねばこそ二世三世まで、  
添ひ遂げたいが妾の一念、互ひの心を結び  
合ふ、此上の願ひといふは。

日當 ナニ此上の願ひとは。  
衆村 何にも云はずに日當様、お命を下さ  
ませ。

日當 え、トッ！  
衆村 お覺悟を（と脇差を抜いて斬つてかゝ  
る）

日當 （その手を捕え）これは又近頃理不盡千  
萬、譯も話さず唐突に、愚僧の命が欲しい  
とは、此方、正氣の沙汰とも思はれぬが。

衆村 正氣、正氣、貴方様が只お愛しいばつ  
かりに。

日當 ますく合點の往かぬ言葉、してその

仔細は。  
衆村 申し日當様、この衆村は貴僧の御本心  
イイエ今夜の深いお企圖を何も彼も、残ら  
ず存じて居るのでございます。

日當 ゲツ？  
衆村 サ、その淺狭しいお心を知つて居なが  
ら彌増す思ひに、冥土へお連れ申さうとし  
た、居ながら妾の素性を御存じでござりま  
すか。

日當 うむ？  
衆村 何處の何者ぢやと思召します？  
日當 俺の本心、企圖を底の底まで知つて居  
るといふ此方は？

衆村 寺社奉行脇坂淡路守様お屋敷のお奥を  
勤める中老衆村、繊弱い女の耳一ツにて、  
當時世上に噂の高い延命院の祈禱の秘密、  
並びに院主日當の身分素性を探らうための  
通夜日參、これ皆殿の内命により我身を捨  
てた忠義の働き、何と合點が参りましたか  
？

日當 何、寺社奉行の廻し者、あの脇坂の奥  
女中、然うか、や其奴め夢にも知らなかつ

た、畏に掛けたと思ひの外、逆一杯喰は  
されたはよく、此方が大間拔、ダガこの  
俺の素性まで、何處でどうして突き止めた  
のだ。

衆村 此方悪黨のやうにもない、コレ、今夜  
本堂へ參詣の群衆に紛れて寺社方の與力同  
心、手先が大勢。  
日當 ゲ、シ、失策つた（と刀を逆手に屹つ  
となる）

衆村 而も先程、内陣の小座敷で、柳全との  
話のあらましを、通り掛つた障子越し、聞  
くともなしに妾の耳へ………況して女犯の生  
證據、既に合圖で捕方一同、出口々々を張  
り廻した上は、所詮が脱がれぬ此方の命、  
どうぞ妾と兩人一緒に死んで下され頼みま  
する。

日當 待つてくんねえ、マア鳥渡待つてくん  
ねえ、成程女難に身を滅ぼすと身者言葉  
に嘘はなかつた、其所まで八方抜目なくお  
手が廻りやアもう是れまで、どう手對ひの  
仕様もなし、娑婆の名残と觀念して、器用  
にお繩を戴いた上、御牢屋敷の柳の下で、



刀の錆になる身軀死ぬなと云つても生きられねえ先の詰つた俺の命だ、それに引代へ

お前の方は、大事な役目を仕終ふせたお手柄が、こんな所で無駄死しやうなぞとは悪い

了見、今夜の事は假且の悪い夢だと諦めて

衆村 イ、エ妾は諦められない、忠義の道も

もうこれまで、大事な役目を仕終ふせたか

らは、譬へ果敢ない契りにもせよ、今から

後、貴僧の情を身に必みく〜と女の操を大

切に、死んで未來で添ひ遂げたい。

日當 ウム、世に怖ろしい悪黨と、知ても愛

想を盡かさねえで、良人と思ひ貞女を立て

彼した仇な悪戯を、眞の戀にしやうといふ

のか。

衆村 今夜の事は妾から、お詫び申さねばな

りませぬ、可愛い良人を殺す女、嗚憎くい

とも思召しませうが、貴僧に別れて唯一人

残つた此身はどうなります、せめて不惑と

望みの通りに。

日當 然うか、よく云つて呉れた、一度濁つ

た俺の心は此方の眞で淨められたが、佛の

徳にも見放された日當、どう藻掻いたとて

も袋の鼠。

衆村 せめて捕方の手の廻らぬ先。

日當 オオ死の？

衆村 死にませう。

日當 とはい云ひながら落ちつく先は、劔の山

か火の車か。

衆村 三悪道の苦しみも、厭はず夫婦一心同

體。

日當 地水火風もやぶれ法衣（と衣桁の緋法

衣を刀にて引裂き）形を變へて、紅蓮の臺

に。（と法衣を敷く）

衆村 半座を別けて（と經机を引寄せその法

衣の上に座る）

日當 必ず死出を迷ふなよ。

衆村 三途の道を一足お先へ。

日當 直ぐに追つてく。

この内、香を焚き、衆村懐紙を口に

啣む。

日當 臨終の題目。

と日當、衆村の胸倉を掴んで片手に

脇差を構へ顔見合す。

この模様よろしく。

この道具が廻る。

### 二幕 目 (三)

(同じく裏手亂塔場)

正面、背後一面の藪壘前に、大小いろ／＼の墓石、輪塔など、眞中少し下手に拵樺の井戸、上手、下手に二本の推の樹、上手の端に寺の一部が少し見える。

雨、次第に歌むと。

蛙の聲。

上手より寺男の銀兵衛バツテウ笠を冠り尻端折り、手に『延命院』と記した弓張提燈を持ち、足駄穿きにて出て來り。

銀兵衛 どうやら小歌みはしたやうだが、空

ア眞暗、この鹽梅だと、容易に雨は上るま

い、それに何だか寺の中が妙にザワザワす

るやうだが、物騒だから油断はならねえ、

ドレ向ふの方を一廻りして來やう、南無妙

法蓮華經！。

と下手へ入る。

直ぐ上手にて。

ウワー。

聲

聲

と二人續いて悲鳴、倒れる音。

納所柳全、着物は雨に濡れ霽、尻端折素跣足、拔身の一刀を掲げ出て来り、椎の樹を小楯に四邊を窺ひ、探り足に井戸側へ近づき、釣瓶を汲み上げんとする、上手奥、墓の間より捕方三四人、地上を這つて窺ひ出る柳全はつと氣がつき、井戸側を廻つて下手の椎の木の蔭へ隠れる。

凡て暗中の探り合ひ。

捕手頭

オイ、オイ其所に居るなア誰だ。

捕手一

誰だ〜？

ト、柳全、刀を背に廻し。

柳全

ヘイ、ヘイ。

捕手頭

返辭だけぢやア解らねエ汝何だ。

柳全

ワ、私でございますか。

捕手頭

變な奴だなア、モツとハツキリ口を

利け、ハツキリ。

柳全

ヘイ、エエ私、グ愚僧はその。

捕手頭

愚僧たア何だ？

柳全

ト、當山の納所坊主で、ヘイ。

捕手頭

納所だ？

柳全

柳全、ハイ柳全と申しまする。

捕手頭

何でもいゝから此方へ出る。

柳全 ナ、ナ、何か御、御用でございますか

捕手頭 用があるから呼んで居るんだ、爰へ来い。

柳全 ヘイ。

捕手一

來ねエのか汝え。

柳全

イエ參ります、直ぐに參ります。

捕手頭

早くしろよ！

柳全

只今々々。

捕方一

ト、柳全忍び寄る。

捕方二

オイ、何處にゐるんだ。

柳全

と窺ひ寄る尖を、柳全不意に。

柳全

茲だ！

と斬りつけ、鳥渡立廻り一二人傷つき、一同下手へ逃げ込む。

柳全

ホツと息。

再び井戸側により片足かけ、釣瓶をあけて水を呑む、上手よりおころが

柳全

轉び出で、口も利かずに這ひ廻る。

柳全

(低聲)誰だ、オツ汝誰なんだよ？

おころ

アア、死んぢまつた。

柳全

おころだな。

おころ

アア、お、お、お上人様が先刻の女

柳全

中と兩人とも、死ぢまつた〜。

柳全

ゲツ、日當が死んだ。

おころ (大聲)オ、オ柳全さん！(と組りつ)

この内上手より目明し三四郎が忍び

出で、後より柳全に組付く。

柳全 オヤ、何をしヤアがるんだ、エエツ。

と刀で拂ふ、切尖がおころに當り。

おころ キヤツ。(と井戸側の蔭へ仆れる)。

三四郎 神妙にしろ、御家人岩田長十郎御用

だ。

柳全 ゲ、それが露顯しちやアモウこれまで

だ野郎(と組まれた腕を振り解く)

上、下より捕方大勢、一度にかゝる

柳全大立廻り、一同を追込み、上手

椎の木に寄り凭れ。

柳全 命延びると文字に書く、寺の壽命も俺

達の運も今が終りだ、日當、岩田も往くぞ

よ待つてゐる。(と肚へ突き立てる)

柳全 日當、々々、々々。(と引廻す)

”木の頭”

この内下手より、銀兵衛が、提灯を

かざし何ひ出で、ワナ〜ふるへる

雨また降り出で。

柳全倒れず、立身の最期。

この模様よろしく、柏子木。(暮)

編輯後記



朝 郎 生

久しぶりに成駒屋の中座興行で、此の月の道頓堀は一時に活氣づいた。角座も満員、辨天座も大入、各座揃つてまことに目出度い、其處で浪花座の志賀賀庭家も「しがない私共もお影さまで喜ばれて居ります」と淡海でなくてたんかを切る。こんな洒落は今時流行らない。

扱て「道頓堀」である。各座の氣勢に押された故か今月は誠に淋しい。うんと原稿が集るつもりで安心してゐたところが、的ごとは何とやらで、締切間に惶てふためいた事は例によつて何時もの通り。

綿貫六助氏の御玉稿が、今一足といふ處へ到着したけれど、既に手おくれであつたのは残念至極である。「玩辭樓漫筆」も、成駒屋多忙のため頂だい出来なかつた。それから大川渡江、日比繁二氏の「幕内閑話」も兩氏の都合上掲載出来なかつたことはくれぐれも残念である。來月は必つとこの埋め合せをするつもり、今から御約束をして置く。尙三浦おいろ

さんから「盛綱」の年表を頂いたけれど、紙面の都合で載せられたことを執筆者並に讀者諸氏へお詫びをする。

廣告には申込殺到などと大變景氣のいゝやうなことを書いたがあれは、所謂宣傳文でその實、年極讀者の應募は餘り香しくないで困る。とにかく壹千名以上の讀者は募りたい。それに依つて「道頓堀」はある目ざましい仕事を計畫してゐるのだ、とにかく駄辯を弄ぶまでもなく「道頓堀」は他誌に比べて充分の勉強をしてゐる心算りである。此際心ある人々はどしどし年極め讀者の勸誘をして欲しい。

樂書帳を募集したが、ねつから應募がない。締切までに届たいのが僅かに十七通である。これでは淋しすぎてどうにも仕様がなない。折角愛讀者の要求を入れたのだからどしどし應募して頂きたい。

寄贈雜誌

- 創作時代 蛙 群
- 新國劇 家庭の教
- 舞臺評論 警世
- 川柳きやり 實業の大阪

昭和三年六月一日發行  
月刊『道頓堀』第三年  
第廿一輯

□ 誌代は前金でお拂ひを願  
ます。

□ 郵券代用は一割増にて御  
註文を願ひます。

□ 御相談の上廣告掲載の需  
めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵費五錢)

昭和三年五月廿八日印刷  
昭和三年六月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名社

編輯者 島江 鏡也

印刷者 大坂市東區船場町二丁目三〇〇

印刷者 山上 貞一

印刷所 大坂市東區船場町二丁目三〇〇

印刷所 中央堂印刷所

大坂市南區久左衛門町八番地

松竹合名社内

發行所 道頓堀編輯部

電話 (二四〇番) 一六八五番

# 珊瑚

茶喫と場酒・理料西蘭佛

隣東座天辨掘頓道

番 六 五 五 四 南 話 電

# 忠 梅

地番四十三町屋笠區南市阪大

(入北詰北橋門衛左太町門衛右宗)

番 六 九 三 八 南 話 電

大阪をたちのいて……

唄に知られた趣味のカフェー

「梅忠」は今やモダン化されて皆さんの御ひるきを頂いて居ります。

かりかぶがなければ飛行機でもあるひは又テクシイでも、さしくお越しの程お待ち申して居ります。

赤い灯!! 青い灯!! のどうとんぼりに燦然としてうら若き人々の瞳に

映る「珊瑚」こそは、まごころの砂漠をさ迷ふ人々のオシアスで御座います。

たはやめの腕にまかれて美酒の! 永無月の夜の歡樂はこよなき青春のたまもので御座いませう。

# プラトン社出版の書籍目録

## 魚人の陸

菊池 寛 著

輕井澤の夏に現れたる二人の女性、妖艶にして賢明なるを麗子といひ、富裕にして快活なるを敏子といふ。金力と美貌、地位と手腕、こゝに渦巻起る名譽と戀の大葛藤。

桃色ポプリン總布美本  
¥ 2.00

三上於菟吉著  
長篇小説

都

美貌と才氣に恵まれたる

近代兒を繞る戀愛情史

内容

時代の子 美妻 蜜  
キユラソウ 毒 笑 情 蜜  
妖花 嬌 笑 美 情 蜜  
花を踏んで進む 罪に甦へる女 刺 美 婦 哀 傷 男 蜂  
新しき薔薇 花 粉

普及版 定價五拾錢

## 女性のカット

山 六郎・山名文夫共著

清新の才、巧緻の技、独自の想を以て現挿畫界に特異の地歩を築ける山、山名二氏のカットは確かに劃時代的創作圖案の新方向を示したものであります。

總金泥クロス装幀  
¥ 2.80

## 鈴木泉三郎著 火あぶり

新劇招來の烽火!!

才氣潑瀾にして近代的感觉に根ざしたる舞臺技巧と、あくまで豊艶真挚なる筆致を以て雄々しくも新劇招來の烽火を翳し多くの仕事を残して天折した天才戯曲家鈴木泉三郎氏こそ未來の劇壇を暗示したる時代の劇を建設したと云ふべきである

普及版 定價五拾錢

東京

プラトン社

大阪



若く明るい顔になる

# レイト白粉



東京大坂  
平尾營業店

昭和二年十月廿五日  
昭和三年五月廿八日  
昭和三年六月一日

金參拾錢 (郵一錢五厘 稅)